山ざくら

第42号　平成23年11月　関東氷上郷友会

おもわず　新しい

NEXTA

人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

東　京　支　店　111-0051 東京都台東区蔵前2-4-5 K-FRONTビル　TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッピイ株式会社

東　京　工　場　121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12　TEL 03-3849-6611
千　葉　工　場　270-0202 千葉県野田市関宿台町2192　TEL 04-7196-1721

ネクスタ パッケイ株式会社

栃　木　工　場　323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938　TEL 0282-62-3321

山ぎろう

第42号

泪目で石けとばしぬ里の秋

山ざる　第42号　目次

〈表紙〉可部美智子作陶彫〝聖徳太子〟／〈目次・扉〉俳句＝渡邊隆男
弁ぜんとしてすでに言を忘る……坂上勝朗　5
平成22年度「ふるさとの会」開催……6／村上信夫氏講演要旨……8
平成22年度「ふるさとの会」出席者……11／会計報告書……12
祝寿の方々ご紹介……13／懇親会スナップ……20

《特集／東日本大震災の衝撃》
「東日本大震災」に遭遇して……野村節三　24
立ちすくんだあの時……伊藤富士子　32
出張帰りの電車の中で……山口泰男　35
二度の大震災に思うこと……植田茂樹　38
あの美しき海岸線の惨状……今田二三夫　40
福島へ震災ボランティア……足立晃一郎　43
被災地に向った留学生たち……上　高子　48

《丹波ブランド紹介》
〈丹波布〉ふっくらと手織りの良さ……安達佳代　51
〈稲畑人形〉全国に知られる郷土玩具……小田晋作　55

《インタビューコーナー》
笹倉鉄平さん／森と水に物語性を求めて……編集部　62

《追　悼》
村上末吉さんと郷友会……渡邊隆男　68
村上元会長を偲ぶ……坂上勝朗　69
《ふるさと随想》
故郷づくり百年の大計……梅津浩平　78
柏原劇場の思い出……灰野悦昭　81
軍歌からリンゴの歌へ（続編）……丸川健三郎　85
古本屋になった山ざる……前川芳之　89
「山ざる」41号を読んで……岡原東光　92
懐かしや丹波の自然……中江悦子　93
庭上の一寒梅……大野義昭　96
丹波Uターン一年……足立静雄　101
丹波市の図書館……徳田八郎衛　102
《大震災 被災地からのお便り》……　104
《近況・エッセイ》
セクレタリアット……金出一郎　118
皇居の森～皇居勤労奉仕に参加して～……堀　博之　121
戦いの日々……三浦　宏　124
情報とデータ……北山素純　128
折々の記(8)……井本義一　131
《丹波を撮る》……徳田八郎衛　72
《丹波通信》始まった学校統廃合の議論……古西　純　58
《私の職場》アメリカ留学が転機に……八木信行　114
《山ざる文芸》俳壇・詩座・歌壇……　110
ふるさとトピックス（丹波新聞から）……71・113／会員だより……137
寄附者芳名……144／BOOKS……145
《インフォメーション》平成23年度柏陵同窓会東京支部総会・懇親会……148
《協賛広告》……152／編集後記……164
《いけばな（写真）》……三觜拍洋（三觜洋子）　34・80・95・127・136・143
《イラスト》上田道代……39・120

旅愁

犬童球渓／作詞
オードウエイ／作曲

ふけゆく秋の夜　旅の空の
わびしき想いに　一人なやむ
恋しや故郷　なつかし父母
夢路にたどるは　里の家路
ふけゆく秋の夜　旅の空の
わびしき想いに　一人なやむ

窓うつ嵐に　夢もやぶれ
遙けき彼方に　心まよう
恋しや故郷　なつかし父母
想いに浮かぶは　森のこずえ
窓うつ嵐に　夢もやぶれ
遙けき彼方に　心迷う

弁ぜんとしてすでに言を忘る

会長　坂上勝朗

東日本大震災が起きてから、義援金やら救援物資にいくばくかの拠出をしはしたものの、ただそれだけのことでいいのか、なにかほかにできることはないのか、と思いをつのらせていたときに、成松出身の上高子さんが主宰されるＮＰＯの有志が、岩手県の大槌町へのボランティアを計画されているのに便乗して、当地を訪れたときのことでした。

目の前に展開する惨憺たる風景に、息を飲んだまま、バスの車窓を流れゆく悪魔の爪痕を、ただ茫然と眺め入るだけというのが、私のありさまでした。そのとき、ふと脳裏をよぎったのが、表題の語句です。

これは、陶淵明の〝飲酒〟という詩のなかに出てくる一節で、悲惨な情景に遭遇したときのことを表現しているわけではなく、むしろその逆の境涯をうたったものなのですが、ひとは感極まったとき、言葉を失うものだということを、身を以て実感したことでした。

この災害では、こころならずも故郷を捨てなければならない人たちも多く、心中察するにあまりあるものがあり、これも言葉にすることあたわずの心境です。世界中の関心を集めているこの災害、被災地の復興の一日も早やからんことを祈るばかりです。

郷友会では、被災地域にお住いの会員の方々に柏陵同窓会東京支部と連名で、お見舞状を差し上げましたが、後片付けもままならぬ状態の最中にもかかわらず、ごていねいな御礼状を多数いただきました。まことに恐縮の至りです。また、なまなましい体験記も数編頂戴しました。掲載して多くの会員読者の方々と思いを共有したいと存じます。

ついでながら、三十年ちかく慣れ親しんできた九段会館も震災被害のため廃業となり、今回から新たな会場に移っての「ふるさとの会」開催となりますが、どうぞ奮ってのご参加をお待ちしております。

平成二十二年度の「ふるさとの会」は十一月二十七日（日）正午より東京都千代田区の九段会館で行われました。

総会に先立つ十一時よりの今年の特別講演会はＮＨＫエグゼクティブアナウンサーで現在、毎週月～金午前8：30～11：50ＮＨＫラジオ第1放送の「ラジオビタミン」、祝日特集「鎌田實いのちの対話」などの司会を担当。これまでＴＶ「おはよう日本」「ニュース7」などでも活躍されています村上信夫氏に講演をお願いし、「ことばのビタミン」と題して、丹波にまつわる、興味深いお話を聞かせていただきました。総会前に大

坂上会長のあいさつ

層の盛り上がりを見せました。（講演の要旨は別掲）

総会では坂上勝朗会長の挨拶に続き議事に入り、谷口副会長（会計担当）よりの会計報告・監査報告・会務報告の後、今総会で任期の切れる役員の選出に移り、理事会で推薦された新理事四氏と前役員の留任が全会一致の承認されました。

満八十歳を迎えられた郷友の方にお祝いを申し上げる「祝寿会」では、ご参加いただいた梅田重二氏、井出梅野氏、鈴木和栄氏に坂上会長より祝辞と花束を贈りました。

懇親会は岸本副会長の司会で開会、金出一郎理事の乾杯の音頭に講演をいただいた村上さんも交え、いよいよ丹波訛りの抜けきらない会話の輪があちこちに広がり、いつもの楽しい宴会になりました。恒例のお楽しみ抽選会は、より多くの皆さんに喜んでいただけるよう、昨年から「丹波の山芋」一キログラム、「丹波黒豆」〇・九リットル、「黒豆・丸大豆の煮豆」三袋、が、それぞれ全員に渡るようされ、参加者全員何かのお土産を楽しめるようになりました。

名残り惜しい会も中締めとなり、丸川健三郎氏の三本締めで、来年また元気に会えることをお約束し、閉会となりました。

（岡　吉明・記）

祝寿の花束を手に、右から梅田重二氏、鈴木和栄氏、井出梅野氏

村上信夫氏講演要旨

講演前に、同じ職場の先輩である上野重喜さんから「村上信夫さんはＮＨＫでは大御所的存在で、エグゼクティブアナウンサーという立場におられ、10人しかおられない一番偉いアナウンサーです。また、奥様は丹波で絵を教えたり絵本を出されていたり、お嬢様はＮＨＫに出演されたり、家族の皆様全員がご活躍中です」などのご紹介がありました。（以下、講演要旨）

講演する村上信夫氏

〈講師紹介〉ＮＨＫエグゼクティブアナウンサー。１９５３年、京都生まれ。明治学院大学卒業後、１９７７年、ＮＨＫ入局。富山、山口、名古屋、東京、大阪に勤務。現在は、「ラジオビタミン」（ラジオ第一８：30～）司会、「鎌田實いのちの対話」司会。これまで、「おはよう日本」「ニュース7」「育児カレンダー」などを担当。最近は、なにげない言葉の力を訴える講演にも力を入れている。趣味は、将棋（二段）。著書に『ラジオが好き！』（海竜社）『ことばのビタミン』（近代文芸社）『いのちの対話』（集英社）など。

○

今は亡き父から「いずれ、丹波で暮らすのだから皆様に挨拶しておけ」と言われ、６年前の郷友会に参加させてもらい楽しい時間を過ごさせていただきました。

私は10年前からラジオ一筋でやってきています。ラジオの仕事は楽しいです。会ったこともない方々に聞いていただいて、以前からの知り合いみたいです。いつもと同じ時間に同じ声が聞こえてくるというのが安心感を与えるようです。

楽しんでいただきたいと思ってよく駄洒落を言って

います。ニュースでも駄洒落を言って叱られたことがありました。「アシタバ展は今日まで」というコメントを「アシタバなのに今日までなんですね」と勝手に口が動いたんです。

大げさに聞こえるかもしれませんが、駄洒落が人の命を救ったこともあります。ある講演会で、少年が「今日はお礼を言いに来た」と訪ねてくれた。彼は自傷行為があり何度も死にたいと考えて不登校になっていたのですが、「ラジオから村上さんの駄洒落が聞こえてきて思わず笑ってしまった。その時、〝明日も生きてみよう〟と思った」とのことでした。また、「妊娠中毒症で何度も流産しかけていたが、村上さんの〝きょうも良いことがいっぱいありますように〟という挨拶に励まされて出産し、良多と名付けました」とのお便りや、「医療ミスでお腹の子を亡くし、その後妊娠しても亡くし、日中泣いてばかりいましたが、何となく聞き流していたラジオから、『鹿に頭突きされた私を置いて主人は一目散に逃げた』との便りに、村上さんは『それはしかたないなあ』『私を置いて逃げる時に夫が捻挫した』『それもしかたないなあ』と。1回目で笑い、2回目は大笑いしました。忘れていた笑いを思い出させていただいた」など、有難い声を寄せていただいています。

笑いは人間関係の潤滑油で、血のめぐりが良くなります。私は毎朝起きてから鏡の前で〝にこっ〟と笑って挨拶します。いつも笑顔を心がけます。笑顔の自分を誉めてやります。その笑顔が外に出たときに伝わっていくのです。

私は一人っ子で、昔から人に喜んでもらいたい気持ちが強かったようです。言葉は口に出していくことによって、相手の心に届きます。形から入って心に至る。何回も口にしているうちに、身についていくものです。

退学寸前の札付き少年を預かる仕事をしていた元校長先生からのお便りです。一週間経っても態度が改まらない。このままでは卒業できない。元校長は「取って置きの言葉を教えようか?」少年「聞いてほしけりゃ教えろよ」「人の心を溶かす魔法の言葉、それは〝ありがとう〟というんだよ」。少年が学校で使ってみたら周りがアタフタして喜んでくれるのを体感した。それを見た先生方が退学しないようにと代わる代わる勉

強を教えてくれた。〝ありがとう〟が自然に使えるようになった頃無事に卒業。退学しないですみました。

ラジオには想像する力があります。共感する力が育まれていきます。感動したとき、むしろ言葉にしないことが自然な「間」を生みます。「間」をかみしめて味わう。そして、味わいながら話すことができる。「間」で想像が生まれます。日常生活の中でも「間」を大事に出来れば人の話をじっくり聴けるし、人間関係も変っていくかなと思います。

講師の流暢な語り口に聴き入る参加者

最後に父の話をさせていただきます。二〇〇八年、八十四歳で亡くなりました。「丹波で死にたい」が口癖でしたが叶いませんでした。最後に口にしたのは丹波栗のスープでした。氷上郷友会員の一人「りんごの絆」の山本さんが届けてくださいました。父は一九九九年の一年間、毎日息子に葉書を書き続けました。その中に次のような言葉がありました。

「人に接する時は暖かい春の心で／仕事をする時は燃える夏の心で／考える時は澄んだ秋の心で／自分に向かう時は厳しい冬の心で」

これは私の座右の銘になっています。丹波出身の親父の話が供養になるかと思って最後に話をさせてもらいました。

ラジオというメディアはなくならないと思っています。ご静聴ありがとうございました。

〈この後のふるさと会パーティにも参加していただき、会が盛り上がりました。ご著書へのサイン会もありました〉

（文責・岡田昌子）

◎平成二十二年度「ふるさとの会」出席者

（順不同・敬称略）

〈来賓〉

竹岡　喜彦　兵庫県東京事務所 所長
長谷川進也　兵庫県東京事務所 主任
皆川　広一　神戸新聞東京支社
荻野　祐一　丹波新聞 社長

〈祝寿〉

梅田　重二（山南町）井出　梅野（春日町）
鈴木　和栄（柏原町）

〈会員〉

○青垣町（3名）
足立和巳　飯田光雄　福田治子

○市島町（10名）
大槻作治郎　木寺昭三　高見秀史　藤田　純
藤田純子　藤田千治　藤田　徹　丸川宥次郎
丸川健三郎　山本喜則

○柏原町（12名）
池畑廣士郎　岡　吉明　岡　洋子　岡田昌子
可部美智子　小竹政孝　小谷　崇　鈴木和栄
瀬々妙子　藤本芳子　山本明男　山本雅子

○春日町（5名）
井手梅野　金出一郎　木呂子惠美子　近藤仁司
原　利充　高見雄樹

○山南町（16名）
植木十和子　梅田重二　大野義昭　小田明子
岸本里子　下井源治郎　勢川武彦　徳岡　敏
仲　一聡　中居篤子　野村節三　原谷洋美
前田和市　三浦セツ　藤本貴士　若森敏郎

○氷上町（19名）
足立吉雄　足立明子　安達健一郎　足立正喜
井上　巖　上　高子　上田道代　上野重喜
上野忠明　臼井小五郎　岸本圭司　岸本　勲
小山としこ　坂上勝朗　谷口浩章　谷口　捷
本城英明　山口和久　山森直美

会 計 報 告 書

（平成 22 年 7 月 1 日～平成 23 年 6 月 30 日）

関東氷上郷友会
会計理事・谷口　浩章
原谷　洋美

（単位：円）

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
繰越金	2,417,520	郵便貯金 1,617,520	出版費	801,097	『山ざる』41号
		定額貯金 800,000	通信・印刷費	128,500	総会・役員会案内等
		振替貯金 0	総会費	625,520	総会関係支払
年会費収入	418,000	延205名	会議費	131,160	役員会等
総会費収入	485,000	71名	支払手数料	22,350	振替手数料
役員会費収入	132,000	延 44名	消耗・備品費	153,535	事務品・広告費・慶弔費等
寄付金	196,600	延 66名	繰越金	2,367,262	郵便貯金 1,567,262
広告料収入	580,000	延 71名			定額貯金 800,000
その他	304	利子			振替貯金 0
合計	4,229,424		合計	4,229,424	

以上

監査の結果、上記のとおり相違ありません。

平成23年 8 月 3 日　　会計監査 岡林逸男　印井小五郎

祝寿の方々ご紹介

郷友会では毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる19名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、9名の方から回答頂きましたのでご紹介します。（誕生日順）

①生年月日
②ご出身地
③上京の年月日
④上京の動機
⑤これまでに最も印象に残ることは
⑥祝寿を迎えられてひと言

鶴田　宏様

①昭和6年1月21日
②柏原町
③昭和48年11月1日
④勤務先が、昭和48年11月1日付けで、東京都京橋にある本社に勤務することになった。
⑤22歳の夏、広島の事業所に勤務していた時のことである。全員で、宮島の裏の海水浴場へ行くことがあった。私は、泳ぎに自信があったし、張り切って催しに参加した。後輩3人とボートで沖の小島へ行くことを計画した。小島には、岩の間に小動植物がいて、珍しく楽しかったのは覚えている。さて、帰ることになって、天候が急変してしまった。明るかった周囲は薄暗くなって、波はうねるし、潮が流れ始めた。自然は恐い。4人の中で、ボートを漕げるのは私だけであった。私は必死で漕いで漕いで、あらん限りの力を振り絞って、やっとの思いで陸に辿り着いた。
⑥寿命の許される限り生きる、日々感謝です。

〈生まれた年＝昭和6年・辛未・1931年〉昭和恐慌は、この年最悪の事態を迎えた／15年戦争の口火となる満州事変が関東軍の謀略で戦端を開いた／わが国初のトーキー映画「マダムと女房」が上映され、洋画「モロッコ」で日本語の字幕が入った。

祝寿の方々ご紹介

大野　善三様

①昭和6年1月29日
②柏原町
③昭和28年12月
④大学入学（上京直後には入れませんでした）
⑤ギリシャ旅行をしたとき、窓ガラスの大きい、アテネの喫茶店からパルテノン宮殿を見上げて、柏原高校で教わった西洋史の教科書に載っていた写真そっくりだと、えらく感激したのを覚えています。
⑥映画監督の新藤兼人氏が、「私が60のときには、80歳のお年寄りは多分こんな精神だろうと思っていましたが、自分が80歳になると、予想とは全く違っていました。実際に体験しなければ、わからんものですね」と言っていたのを思い出します。「年をとると、だんだん穏やかになって、仏様のように丸くなる」と言いますが、私の経験では、人間は年を重ねると、益々俗っぽく、意地汚くなるように思います。若いときには、戦死しても止むを得ないと感じていましたが、高齢になると、死ぬのは嫌だと考えるようになりました。高齢は人生の締めくくりではなく、どんな時期でも人生は進行しているのです。長い間、様々な経験をしてくると、考え方も感じ方も変ってくるものだということです。リビングウイルも毎年見直すべきだと、資料にも書いてあります。

藤井　宏次様

①昭和6年2月14日
②兵庫県多可郡（現　西脇市）黒田庄町喜多
③昭和33年10月8日
④会社内人事異動に伴う転勤
既に数年住んだ神戸は風光明媚、気候温暖、人情豊か、更に低物価で愛着心大なるものがありましたが、会社の命令には従わざるを得ないのと、この際、心気一転して新天地で新人生を始めるのも悪くないとの思いで、神戸を後にしました（当時私は27歳、独身でした）。
⑤柏原中学、高校の6年間、最も親しかった旧友、田中篤郎君（氷上郡出身）と、昭和34

年に東京有楽町の路上で10年振りに思いがけない再会をしました。当日、私は有楽町駅に向かう途中で、すれ違った男性から大声で呼ばれました。「藤井やないか!?」と。彼は田中篤郎君で最近、大阪から東京へ転勤して来た由。私も数ヶ月前に神戸から転勤してきたのです。その後、彼とは在京同窓会でよく会いましたが、不幸な事に数年前、急病にて不帰の客となってしまいました。本当に残念です。

私の一生のうちで最も印象深い出来事でした。

⑥幼少の頃はあまり頑健でなかった私が故郷の播州を離れてから、神戸と東京でのサラリーマン生活を終え、平凡ながらも鎌倉にて余生を送ることが出来るのも、これまでに色々お世話になった方々の御陰と感謝しています。この上は更に頑張って、早く他界された同級生の分、長生きしたいものだと念願しています。

三浦　セツ様

①昭和6年3月10日
②山南町（小川村）井原
④結婚
⑤父が大阪で医者をしておりましたが、小川村に県立診療所が出来、知人の紹介でそこへ勤務することになり、家族もいっしょに疎開（引越し）致しました。

両親は亡くなりましたが、山里の心の深い郷友会のお友達とのおつきあいが続き、その上この度の祝寿のお知らせにとても嬉しく小川村に住んで郷友会に入ってよかったとしみじみ思います。

前田　和秀様

①昭和6年3月16日
②東京日本橋に生まれる。昭和20年3月10日の東京大空襲に罹災し、両親の郷里の柏原に疎開する。昭和23年3月柏原中学を卒業し、兵庫県立医科大学（篠山市）入学、柏原より通学し、昭和26年4月に鳴尾に転居して学部に4年間通学し、卒業後1年間、大学病院にてインターンをした後、昭和31年4月より陸上自衛隊に入隊し、久留米、東京・世田谷の学校にて基礎教育を受ける。昭和31年9月、自衛隊中央病院に所属し、昭和62年1月より防衛医科大学に転勤。昭和63年3月自衛隊を退職、埼玉県衛生部に勤務し、衛生行政を学び仕事をさせていただき平成8年3月定年退職した。

その後4か所の介護老人保健施設の開設のお手伝いをさせていただき77歳で現職をひき、家内のクラブ活動の送迎をして認知症予防をしている。また地域の老人大学2か所に通って友達作りをしている。自衛隊33年の医療の生活で医師の真の姿を学んだことが最もありがたかったことだと感謝しています。

③医療の進歩です。私は49歳と59歳と2回心筋梗塞を起こし60歳で冠動脈バイパス術を自治医大大宮医療センターで受けました。術後3日間の安静の後はすべて自分のことは自分ですることで生活をし、3週間で退院、翌日から仕事に出られました。また病院職員の対応（開院後2年目でしたが）が素晴らしく、最も印象に残っています。

④これからは多くの方々に助けられたいのちですので1日でも長く生きることに努力していきたいと思います。

金子　徹様

①昭和6年5月4日
②大阪市生まれ。柏原高時代は氷上郡神楽村稲土（現丹波市青垣町稲土）
③昭和25年3月20日
④柏原高を卒業し、静岡大学に入学。静岡市に下宿すること

となった。以後、静岡県内に在職、結婚、家を建て今日に至っている。

⑤私が丹波に居たのは、大阪の中学から転校し、柏原中～柏原高に在籍していた5年間である。丹波を〝ふるさと〟と呼ぶにはあまりに短い年月であるが、終戦直後の5年であり、多感な青春の時期であった。丹波の自然・風物を脳裡に刻んだ映像・感性は、静岡県現代俳句協会会長として俳句に携わっている今も、〈わが俳句の原点〉であることを実感している。

⑥ひたすら歩み続けた教職38年、退職後、俳句に復帰し20年。健康でいられるのも、終戦直後の、ひもじい時代を自然豊かな丹波の地が、体を支えてくれた賜物だと思う。

望郷の空に傘寿の五月富士

徹

小田富士夫様

①昭和6年6月12日
②柏原町
③昭和27年3月末
④早大入学
⑤「この心臓手術は日本で3例目、生存率20％です」家族と別れの握手をかわし、手術室に入ったのが、平成1年2月3日朝8時、翌早朝手術は終わった。ICUで6週間、奇蹟的に助かった。4月2日、若い医師の運転で街に出た。地下駐車場から病院の庭に出た途端、陽に輝く若葉が目に飛び込んで来た。「あー生きていた」生を実感する感動の一瞬だった。

⑥あの手術のあと、これからは「一日一期」生きていこうと心に決めた。以来23年まさかの傘寿を迎えられるとは思ってもいなかった。感謝を込めて、改めて「一日一期」を心にきざんだ。

祝寿の方々ご紹介

上村　愛子様

①昭和6年10月24日
②柏原町
③昭和41年
④主人の転勤
⑤神戸、大阪で生まれ育ち、終戦の年の1月、女学校の1年3学期から柏原へ疎開してそのまま柏原高女、柏原高校を卒業しました。小学校5年生からBK（NHK大阪）の児童合唱団で歌い始め、高校でも、子ども達のPTAでもコーラスをしていましたが、あの9・11の惨事の少し前、お琴のバックコーラスでカーネギーホールで歌うことができました。また長男の嫁と台湾北から南へ名所旧跡を訪ね歩き、うち3日間は宋美齢が建てたという圓山ホテルに滞在して「故宮美術館」をじっくり観て来ました。
⑥戦前戦中戦後を経て、よくこの年まで生きて来られたと感慨無量、感謝です。双方の両親を新幹線で通って介護し、18年前、主人まで見送ってしまいました。3人の子ども達も夫々世帯を持ち、仕事に忙しい年頃なので、ずっと一人暮らしをしています。今のところ身体に支障はなく、忘れもの探しものばかりですが、歌も続けアンクルン（アジアの竹の楽器）の演奏や太極拳、ゲーム事、音楽会、美術展とお絵描き、「達者で留守ばかり!!」と言われながら、気ままに余生を過ごしたいと思っています。

谷垣　富子様

①昭和6年10月27日
②姫路市西2階町で生まれ後、柏原町へ（姫路で空襲に遭い、柏原町出身の親戚に引き取られ共に柏原に移り住みました）ふる里が二つあります。
③昭和31年11月4日
④結婚による転居（夫が横須賀

市の造船所に勤めておりました）

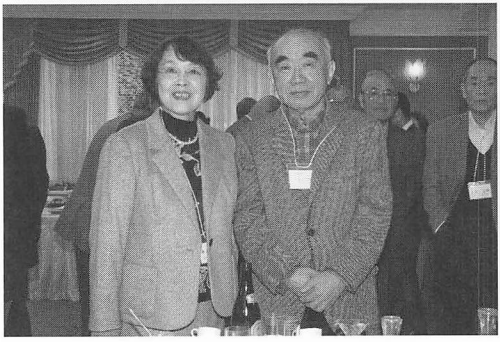
⑤何と言っても終戦（敗戦の日）でしょう。女学校2年生の時でした。日本と言う国も、自分達もどうなるか予想もできないことでした。その後、学校とは晴耕雨読ならぬ晴天は山行きでした。お弁当はふかしたさつま芋1本（食料不足）。割りに元気印の年寄りになったのは、その時の労働のおかげでしょうか。その代わり勉強は何もできていません。（ウン？　不勉強の理由を「人のせい」にしてはいけませんね）生きている間に起きる良い事も悪い事もすべて「自分のこやし」にしてこそ自分の一生なのでしょう。命の終わりを迎えるまで、生き方を間違えないで明るく、つとめさせて戴きたいものです。

（補足）山行きと言うのは都市の人のため、燃料になる山の木を伐って、木材（たき木）を用意する仕事です。男の生徒が木を伐り倒し、適当な長さに切っておきます。女学生がそれを2人で肩に担いで山から学校まで運び「たき木」にして都市の人のために用意するものです（4キロぐらい離れた山から午前中1回、午後1回）。それが終戦後の柏原の中学校（男性）、女学校の仕事でした（勉強でした）。

⑥自分が若かった頃、老人が「いつの間にこんなに歳を取ったのだろう」と言われるのを聞いて、おかしくて仕方ありませんでした。しかし、自分がその年になって見ますと昔？年寄りから聞いたのと同じことをひしひしと身にしみて感じます。人は皆、こうして年をとってゆくのですね。そして、これが人生と言うものなのですね。間違いのない佳き人生であることを心がけ祈りつつ、一日一日を大切に過ごして参ります。その日を迎える時まで。

懇親会スナップ

撮影：岡　吉明



三陸町越喜来中心地の惨状（右の建物：農協、←：筆者宅前のグランド、現在は仮設住宅地）

「東日本大震災」に遭遇して

野村　節　三（山南町）

三陸地方は春とはいえ、まだ薄ら寒かった今年三月一一日、誰も予想だにしなかった未曾有の大震災が起きて、その惨状を目の当たりにしましたが、自宅は地震による僅かな被害があっただけで、家族共に大津波からの難を免れたことは誠に幸運でした。

大震災後、多くの方々から御丁重な見舞い状とお心こもった御配慮にあずかったことに深く感謝し、ここに改めて厚く御礼申し上げます。

その後、不自由な毎日でしたが、温かい御支援のお蔭で、今はほぼ元の生活に戻ることができました。

そこで、大震災当日からの三陸沿岸での被災状況について、記録的な内容も含めて述べることにします。

三月一一日、私は大船渡市に居て、分担執筆した産金遺跡研究会編の産金冊子「黄金の在処と行方」の頒布作業をしていました。作業も終わり、そろそろ帰宅しようとしていた午後二時四六分、突如、大地を揺るがすあの大地震が発生したのです。私は驚いて居合わせた数人と共に急いで屋外へ飛び出したものの、数分間は余りの大揺れに立っては居られず、思わず庭石にしがみついていました。このような大地震はかつて経験したことがなく、とっさに「すごい大津波が来るのではないか」と言いましたが、その通りの大津波が襲したのです。

この大地震はのちに、宮城県牡鹿半島沖の東南東約一三〇km、深さ約二四kmの海底を震源地とする最大震度七、マグニチュード九・〇、揺れ時間約六分のわが国観測史上最大の巨大地震と発表され、「東北地方太平洋沖地震」と命名されました。

大地震発生四分後に気象庁から岩手、宮城、福島各県に「大津波警報」が発令されましたが、市内の防災無線では予想される津波の高さは三m（その後六mと訂正）と放送されました。これを聴いた多くの市民は湾口防潮堤もあり、せいぜいチリ地震津波程度と思い込んでいたようで、急いで逃げる様子もなく、このことが却って人的被害を大きくした要因の一つと思われます。

私は急ぎ帰宅のため乗用車に乗ったものの、停電で全ての信号機が作動せず、道路は大変な渋滞になり、私がまだ帰宅途中の午後三時一五分頃に、三陸沿岸の街々へ高さ数十mという想像を絶する巨大な津波が襲来したのです。その時、大船渡では私が居た場所のすぐ近くまで津波が盛川を逆流して、周辺の多くの建物が全半壊しました。もし、私がその辺りに居たら、どうなっていたかわかりません。

ようやく三陸町越喜来（おきらい）の峠道まで来て見下ろした時は、街並みは全く無くなり、一面、湖のように海水が溢れ、民家の屋根や夥しい瓦礫が浮かんでいました。また、越喜来湾では曇り空の下、どす黒い海面が大きなうねりに伴って、寄せ波と引き波で転覆した漁船や絡まった漁具と瓦礫が右に左にと数百mも流されて、私は初めて見たその異様な光景に言葉を失っていました。

その頃、既に沿岸市町村は一瞬にして巨大津波に呑み込まれ、各所で大火も発生して、北は青森県三沢市から南は千葉県旭市まで全長約六百㎞に及ぶ全被災地で全半壊した建物は一八、五四四戸（三月一八日現在）、死亡者は一五、三五五人、行方不明者は八、二八一人、避難者は九八、九一六人（六月四日現在）という極めて甚大な被害をもたらした「東日本大震災」となりました。

さらに、周知のように、この地震・津波によって東京電力㈱の福島第一原子力発電所の原子炉建屋が大きく損壊して、相次ぐ水素爆発による放射性物質（ヨウ素一三一、セシウム一三四、一三七）の放出という重大な二次災害が発生し、多くの避難者が出て、今なお深刻な事態が続いています。

この大津波で当大船渡市と陸前高田市の被害も甚大で、それぞれ死亡者は三二二人、一、五〇八人、行方不明者は一四〇人、六三二人、避難者は一、二四二人、一、四三八人（六月四日現在）に及びました。大船渡市内ではとくに、ＪＲ大船渡線とその海側や対岸の被害が大きく、私が住む三陸町越喜来では、漁港、防潮堤、防風林、漁協、農協、商店、民家、学生アパート、三陸鉄道の線路が壊滅し、市役所支所、公民館、郵便局、小学校、養護施設などの内部が大きく損壊しました。

また、「世界三大漁場」を誇った三陸の遠洋・近海・増・養殖漁業も操業不能状態となり、わが国の漁業・水産業にとって、計り知れない損失となったことも特

平成大津波による三陸町越喜来の爪痕 (H23.5.7. 筆者撮影)

1：三陸公民館、2：市役所支所、3：三陸郵便局、
4：農協、5：越喜来小学校、6：三鉄三陸駅、7：浦浜漁港、
8：松林跡、9：越喜来湾、10: 筆者宅付近

筆すべき災害です。中でもアワビ、ウニ、ホタテ、カキ、ホヤ、ワカメなどの増・養殖施設は全て破壊され、沿岸海域の生態系にも大きな影響が出ました。

そして、その爪痕は無残な姿と膨大な瓦礫と化し、これがつい数時間前まで平穏だった佇まいや活気に溢れていた漁港の見る影も無く変わり果てた光景かと、わが眼を疑うほどの惨状にただ呆然としていました。

何人かの知人や隣人が逃げ遅れて死亡したり、行方不明になったことも信じられず、また、津波到達地点にあった特別養護施設では、高齢者五六人と職員一人が背丈をゆうに超える大津波に一瞬にして呑み込まれてしまったのです。

一方、海岸近くの越喜来小学校は津波の猛威を最初に受けて壊滅しましたが、幸いにも教職員が全児童を緊急に高台へ避難させて、全員が無事であったことは避難行動の模範として高く評価されています。

津波には一刻も早く高台へ逃げることが「自明の理」ですが、前述のように、今回の津波では市の緊急防災放送に緊迫感がなく、予想される津波の高さも時間によって変化し、それを聴いた多くの市民は大した

ことはなかろうと思い込んで避難が遅れ、海上での時速一一〇㎞といわれる大津波の襲来には到底逃げ切れなかったこと、つまり、「逃げ遅れた」というより「逃げなかった」人もあって、それが多くの尊い人命が失われた要因であろうと報じています。従って、的確で徹底した緊急避難放送と、それを聴いた住民の判断が生死を分ける鍵になることを如実に示しています。

ところが、間一髪、九死に一生を得た知人もいました。これは直接本人から聴いた話ですが、その人は海岸近くの自宅（地元の旧家）へ帰って間もなく大津波の直撃を受け、家もろとも流されようとした時、運よく浮かんできた冷蔵庫の上に乗ったまま浮上し、屋根板の釘で負傷したものの、大波にほうり出されて、気が付いた時は数十m離れた民家の松の古木にしがみついて助かったのです。その時とっさに、奇しくも過去の三陸大津波に遭った人がその松の木で助かったと聴いていたことが頭をよぎり、その松で自分も助かるかも知れないと思ったそうです。勿論、その旧家と松の民家も流されて跡形も無く、二人の命を救った松も無残な姿でしたが、旧家脇の大欅と街の瓦礫の中に一本だけ残ったポプラは印象的でした。

柔道場の屋根に残った軽自動車
（三陸町越喜来）

また、震源地により近い陸前高田市をはじめ宮城県の気仙沼市や南三陸町の惨状は余りにも酷く、役所や民家は壊滅し、多くの人命や船舶などが失われました。風光明媚な三陸海岸の中でも白砂青松の名勝であった高田松原は約七万本もあった松林が根こそぎ流され、古川沼も海と繋がりました。それでも、奇跡的にただ一本の松が大津波の猛威に耐えて生き残ったことは、市民にとって大きな心の支えになっています。

一方、津波防災用の大船渡湾口と釜石湾口の防潮堤

大船渡線線路まで流された曳航船（大船渡港より約２km）

（海面下六〇ｍで世界最大、ギネスブックに登録）をはじめ各地の防波堤が無残に破壊され、それを乗り越えて甚大な被害を及ぼしたことは地震・津波の専門家にとっても予想外であり、この大地震・津波のエネルギーが如何に想像を絶したものであったかを示しています。

この地震の規模は関東大震災の約四五倍、阪神・淡路大震災の約一、四五〇倍といわれ、わが国では最大、世界ではチリ（Ｍ九・五）、アラスカ（Ｍ九・二）、スマトラ（Ｍ九・一）に次いで四番目の大地震とされ、今回の津波の高さ（遡上高）は約一、一〇〇年前に起きた貞観（じょうかん）津波（八六九年）のそれに匹敵し、宮古市姉吉（あねよし）では明治三陸津波のそれを上回り三八・九ｍ（ほぼ一〇階建てビルに相当）に達したと発表されました（東京海洋大学）。

また、今回の津波は最長六㎞の内陸にまで到達し、陸前高田市では約四㎞離れた矢作町の側溝で生きたヒラメ（約一五㎝）が発見されたことも話題の一つです。

この大津波の原因となった地震は太平洋プレートが日本列島のプレートに沈み込む境界で起き、これに伴

う大きな地殻変動も観測され、岩手県から茨城県にかけての海底では南北約五〇〇㎞、東西約二〇〇㎞という巨大な活断層（震源域）が二〇～三〇ｍもずれ、陸のプレートが跳ね上がって、三陸沿岸では陸地が最大五ｍも東へ移動し、少なくとも六〇～八五㎝は沈降したと報道されました。そのせいか、越喜来の浦浜海岸では波打ち際がおよそ一〇〇ｍも陸地へ入り込み、陸前高田市小友町では八四㎝も沈下して（国土交通省国土地理院）、高田松原では海岸線がおよそ四〇〇ｍも陸地側へ移るなど、かつての海岸風景が一変しました。

また、大地震発生後の余震も頻発し、マグニチュード五以上の余震が二六二回（三月一九日現在）も観測され、これも観測史上最多といわれています。

震災直後から各所に出来た避難所に多くの被災者が身を寄せて、不自由な生活が始まりました。当地の中学校もその一つで、一時は遺体安置所にもなっていましたが、多くの変わり果てた遺体はその確認も容易ではなかったといわれています。また、未だに行方不明者も多く、その殆どは発見が困難で、おそらく湾内か外洋の海底に眠っておられることでしょう。

震災直後から約一週間は断水で、沢水や雪解け水を使用しました。燃料は幸いにも残った燃料店からの補給プロパン・ガスで間に合いましたが、約一ヶ月間は停電が続いたことで、一時はリースの発電機で洗濯機を使い、ガソリン不足で乗用車での買い物もままならず、風呂も一〇日に一度（公衆浴場）くらいで、夜は懐中電灯（乾電池の入手が困難）やローソクで過ごし、まるで戦中・戦後のような毎日でした。普段は何とも思っていなかった水道や電気の有難さを痛感した次第です。さらに、電話もパソコン（サーバーの故障）も不通になりましたが（携帯電話は避難所の衛生中継器を利用）、私達の安否情報は息子がスウェーデンから帰国直前にインターネットへアクセスして、かなりの方が確認できたことを後で知り、被災地外では有効なインターネットを今回の災害時に利用できたことは幸いでした。

また、全国から被災地へ様々な支援物資が届けられ、自衛隊や都道府県の警察、それに多くのボランティアによる目覚しい救援活動が続けられ、被災地にとって大きな力になりました。震災後約二ヶ月が経った頃に

は避難者の多くは身寄りを頼っての移住や仮設住宅への入居などが始まり、わが家前のグランドにも仮設住宅（八四戸分）が建設されて、知人ほか多くの被災者が入居しました。

震災後四ヶ月半が過ぎた今、被災地では膨大な瓦礫が山積みされ、さらに、水産加工場跡地では酷い悪臭がする腐敗水産物など、その処理もまた大きな課題になっています。最近、瓦礫は地元の大手セメント工場での焼却処分（三年間で計百万トン）が始まり、腐敗物は外洋（深さ数千ｍ）への投棄も行なわれています。

一方、未だに続く余震（つい先ほども震度四強の地震）に不安な毎日ですが、ライフラインは大方元に戻りつつあります。しかし、家を流され身内も失った多くの被災者の悲痛な気持ちを思い、毎日、瓦礫の山を見るにつけても、忌まわしい大震災の惨状と被災者の困窮生活は私の脳裏から生涯消え去ることはありません。

当大船渡市も復興に向けての第一歩として、最近、地区毎に発足した震災復興委員会に不肖私もその一員として微力を傾けています。また、個人的には企業への復興の手助けとして、陸前高田市の全壊した老舗の醤油醸造元「八木澤商店」からの依頼で、気仙川を逆流した大津波で流された醸造用大桶と残った圧搾機から、「麹かび」と「酵母」を分離・純培養することができました。これを元に従来の醤油が醸造できれば幸いです。

本文を記述した七月末には、福島原発の事故もまだ収束する見通しも立たない状態ですが、国難ともいえる今回の大災害の現状に的確に対応するべく、国や各自治体が総力を挙げて結集して被災地が復興され、被災者が安心して生活できる日が一日も早く来ることを切望してやみません。

末筆ながら、関東氷上郷友会並びに柏陵同窓会からの温かいお見舞いに衷心より感謝し、併せて、同会の益々の御発展と会員諸氏の御健勝をお祈りして、「東日本大震災」についての現地通信を終わります。

（昭和9年、山南町岡本生まれ／現北里大学名誉教授・理博／岩手県大船渡市三陸町在住）

立ちすくんだあの時

伊藤　富士子（氷上町）

三月十一日、午後二時四十六分、東日本を襲った未曽有の大地震は忘れることはない。その恐怖は人々の心に刻まれていると思う。数十年前の宮城県沖地震以来、何度か大きな地震をここ仙台で体験した私は、その恐怖はいまだ消えることはない。少しの揺れにも体が反応する。地震国日本に住むからには「しっかりしなさい」と自分に言い聞かせているのだが……。

この様子にまわりの者は少々困惑しているようだ。仙台に住んで四十年近くになり、度々の地震で免疫は出来ているはずなのに身体は敏感にその反応を示す。近々高い確率で宮城県沖地震が起きると予告され、ひしひしと迫る恐怖におびえながら過ごしてきた。

それがこの三月十一日、現実のものとして起きた。外出から帰宅したばかりの時だ。玄関に入るなり異常な揺れ方に思わず「こわい、こわい」と声を出し立ちすくんでしまった。

その揺れは身体ごと持ち上がるように、揺れの激しさは表現の術もない。大きな家具はその備えをしていたので転倒することはなかった。が、棚のものは散乱し、余震は続き、部屋の中を眺めるだけで片付ける余裕などない。夜だともっと恐怖感は増したことだと思う。家の中に居れず、車庫が安全だと車に一時避難もした。しかし揺れはおさまらず、隣近所の人達と互いの安否を確かめながら余震に耐える。

私の住んでいる所は内陸部で津波の恐れはまぬがれた。電気、水道、ガスのライフラインが断たれてしまい、電話も通じにくい。一夜は小学校に避難、二日目からは自宅に戻り、夜は寒さと暗さの中、小さな明かりを頼りに暖のためにストーブはつけるが、余震の度に消すという有様、度重なる余震に時間が止まったように感じ、あわれ眠れぬ日々が続いた。情報はラジオが頼り。情景は想像出来ない。緊急地震速報は格別の恐ろしさも加わって来る。風の音にも地震かと驚く。

津波で家や家族を失った方には言葉もない。内陸部に住む私などは、不便と我慢を強いられながらも自宅

での生活が出来、幸運だった。テレビの映像は、その様子を生々しく映し出す。子供達が小さい頃にキャンプなどで訪れたあの美しい三陸海岸も町もがれきの山と化して、人影もなく一変している風景には息をのむ。人間の知識や能力も自然の力の前には、何も出来ない悔しさ、美しい町を、人々の生活を、命をのみ込んで行く大津波の脅威の計りしれないこの現実を見て震え上がるばかりだ。

このようなむごい映像の中にも、幸いにも倒れた家の中から助け出された祖母とお孫さん、流木の上で動きまわる犬、また家の庭であったろう所に水仙の花が咲き風に揺れている。陸前高田市では七万本あった高田松原の松の木が一本だけ津波に流されず立ち残り、復興のシンボルとして復活させるとのニュース、今回の震災で失ったものは数えきれないほどあるが、避難所での辛い生活の中で黙々と耐えて頑張っている人達の姿や、子供達の明るい笑顔、国内外からの救援の様子など懸命に頑張って復興を目指している人々の姿には希望と元気をもらった。

どのような困難な状況下でも日本人の忍耐強さと冷静さの中での行動に感銘した、と外国のメディアは報じ、「がんばれ日本」とエールを送ってくれている。まさに日本人の理性を失わず、どんな困難にもうち勝って行く姿は、日本人として生まれ育ったことの誇りだ。

まだまだ行方不明の方もおられ、新聞紙上で亡くなられた方々の名前を見る度に胸が痛む。ライフラインの復旧がなるまでの道のりは長く、便利に慣らされた者にとっては工夫で不便を便利にして頑張るしかない。心細くなる食料品、日用品の買い出しも閉店も多く、開店していても一人何点と制限され、給水車には長蛇の列で四、五時間は待つ、体力的に大変だった。

苦しい辛い思いもしたが、電気は震災から三日目の夜中の十二時十分に点灯し明るさが戻る。暗さの中の不安は遠のく。水道は二週間ぶりに復旧し、水汲みの苦労は解消した。ガスの供給は四十日目。関係者のおかげで日常が戻った時は特別の日のように思った。やっとこれで、お風呂に入り湯に体をしずめて疲れを癒そうと思いきや、余震に見舞われて休まることもままならない。こんな日々だが、余震の回数も減り終息宣言がいつなのか待ち望んでいるところだ。原発も大きな課題を残している。

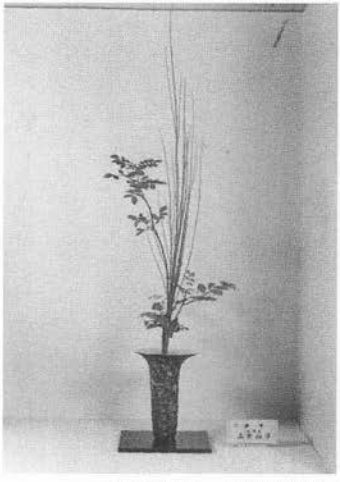
この大地震を機に防災意識は一変した。この地震国に住む限り地震はいつ、どこで起こるか判らない。今日か、明日かもしれない。誰もが被災者になり得ることだってある。巨大地震から二か月余りが去ろうとしている。備えは万全ではなかったが、なんとか切り抜けてきた。地震は待っていてはくれない。いざという時のために「今」を心して各々の生活に即して備蓄し、対策をしておくことが体験で得た思いである。不便と我慢の中で、物の豊かな便利な現在を考えさせられることも多々あった。

この美しい地球があればこそ、国内外にかかわらず人と出逢い、それぞれの文化にふれて、見聞をひろめ、豊かで楽しい生活があると思う。願わくば、この星「地球」が恐ろしい地殻変動のない静かで穏やかな星であって欲しい。

今は地震の一日も早い終息と被災者に元の生活が戻り、笑顔のある明るい日々が訪れることを念じてやまない。

（平成23年5月17日・記）

（昭和9年、氷上町上新庄生まれ／主婦／仙台市太白区在住）



（いけばな・三觜拍洋）

出張帰りの電車の中で

山口　泰男（氷上町）

今回の震災でいろいろな経験をしました。

三月十一日は、茨城県東海村の原子力研究所への出張の帰りの電車の中で地震に遭いました。北茨城を通っている時に緊急地震速報が出て電車が止まり、間もなく激しい揺れがきました。振幅は小さいけれど激しい揺れが繰り替えし襲って来て、一〇分程も続いたような気がしました。走り続けていたら間違いなく脱線転覆だったに違いありません。日本の技術は大したものだと思いました。

そのうち大津波警報が出たとの連絡があり、乗客達は荷物を持って電車から降りました。線路が海岸に近い所を走っていたのですが、幸いなことにすぐ目の前に5階建てのアパートがありました。しばらくして松林の所から泥水が沸き出してきましたので、慌てて階段を三階まで上がって様子を見ました。アパートの敷地に入ってきた所で泥水は止まりました。その辺は海からすぐ高台になっていたのが幸いしたのです。

夕方が近づき寒くて、おまけに雪なんかも降って来ましたから、車掌は地域の避難所である小学校に誘導してくれました。この辺では塀が崩れたり、屋根瓦が落ちたりした家や、津波で床上浸水した家があり、二〇〇名程の人が体育館に避難して来ました。そこに電車の乗客四〇〇名程が加わりました。体育のマットに横になる人もいましたが、大部分の人たちは折畳み椅子に座って暗い夜を過ごしました。二か所にストーブがありましたが、大変寒い夜で、私は鞄から作業着とか着替えのシャツなんかを出して体に巻き付けておりました。夜になってお茶とおにぎりが配られました。一人一個です。寒いのと余震の大きいのが続いて、その夜は殆ど眠れませんでした。情報源はラジオがあるだけですが、仙台の被害が大きいらしいことが分かって来ました。携帯電話が殆ど通じなくて、外部との連絡には苦労しました。唯一連絡できたのは息子のところで、そこから親戚等に無事を知らせてもらいました。ただ、仙台の自宅はどうしても連絡つかず、二日後に

帰り着くまで女房の安否もわかりませんでした。

次の日の朝もおにぎりをいただきました。最寄りの大津港駅まで歩いて行きました。タクシーはあったのですが、運転手がいなくて車は動いていません。皆さん自宅の復旧や買い出しに忙しいのです。体育館に引き返しますと、「いわきまでバスを出す」というのです。いわきまで一人四〇〇〇円で行くというので飛びつきました。一三名でいわきの駅まで行き、浜通りは原発事故で通れないことは知らされていましたから、そこからタクシーに分乗して郡山に行きました。道路はいわきの辺で少しでこぼこしていましたが、車が走れないほどではありませんでした。

郡山は断水のためホテルは休業で、駅前のビルの七階の避難所に入りました。エレベーターが動いてなくて、階段を登った時はどうなるかという感じでしたが、電気が点いていて、おにぎりとお茶とバナナを受け取りました。なにより嬉しかったのは、暖房が効いていて毛布を支給されたことで、これで朝までぐっすり眠ることができました。ここにはテレビがあり、想像していたよりも大きな被害で、仙台まで無事に帰れるかと大いに心配になりました。

十三日の朝食をとり、駅前の乗り場でタクシーをつかまえて仙台まで三人で乗り込みました。郡山の辺は屋根の瓦がずれていたり、大谷石の塀が倒れていたりしたのですが、北上していっても被害が大きくなるようには見えません。国道四号は、福島市に入るところで崖崩れがあって一か所不通でしたが、それ以外は通常通り通れました。仙台に近づいて行っても大丈夫だったので安心しました。こういう場合、タクシーの運転手は対向車線をタクシーが走ってくるかどうかを見るのだそうです。タクシーが走ってくるようなら、この道は先まで走れると考えるのです。

仙台市内に入っても建物が壊れている感じはなく、同乗者を降ろして北部の私の家に帰り着き、周りも我が家も大きな被害はなくてほっとしました。女房も無事でした。片付けを終えた家の被害は食器が二〇個ぐらい割れただけでした。テレビの情報というのは随分偏った印象を与えるものだと思いました。

私の住んでいる辺は三月十四日に電気、二十日に水道、四月一日にガスが復旧して生活は普通になりまし

た。一時期は何を手に入れるにも行列で、私も食料品、こんろ用ガスボンベ、灯油、ガソリン等を並んで買いました。普段こういう経験はなかなか出来ないですから、近所の人たちと情報交換しながら行列ごっこをやっておりました。ただ、ちょっと寒かったですが。

宮城県でも沿岸部は大変ですが、七月になって、地元の人たちからも、ようやく復興についての議論が出てくるようになりました。政府がもたもたしているうちに、地元の議論が出て来たのは結構なことだと思います。押し付けではなく自分達で選んだ道との意識が出てくれば、政策の遅れもあながち悪いことばかりではないように思います。

それにしても、福島第一原発事故は困ったものです。日本の技術の信用を大きく傷つけました。ただ、同様に津波に襲われた第一原発の五号機、六号機や、第二原発の四基の原子炉がなんとか持ちこたえたのを見ますと、第一原発の四基の原子炉には建設年代の古さから来る安全性への備えに欠陥があったのでしょうし、その後の追加の対策に手抜かりがあったのでしょう。「あそこでもう少し金をかけておけばよかったのに」と今頃悔やんでいる関係者がおられると思います。

放射線汚染によって人の立ち入れなくなった土地を作り、その周辺地域の人たちの生活を不自由にした上に、野菜・牛乳・牛肉・魚等の汚染によって生産者と消費者を苦しめています。放射性セシウムの半減期が三十年ですから長期戦の構えが必要です。ほぼ全容が明らかになってきた現在、将来のあり方について現実を直視し感情的にならず、腰を落ち着けた議論をすることだと思います。

この度の震災では、全国からの大勢の人たちの助けがありました。私の接した人たちでも給水車は京都からでしたし、パトカーは東京からでした。仙台の供給所が壊れたので、ガスは山越えのパイプラインで新潟から送られてきています。沢山の人たちの支えがあって、ここまで来られたわけですし、これからもいくつかの山を超えて行かねばならないと思います。

皆さんどうもありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

（昭和14年、氷上町上新庄生まれ／東北大学名誉教授／仙台市泉区在住）

二度の大震災に思うこと

植田茂樹（柏原町）

三月十一日、東日本大震災を首都圏で体験して、十六年前の阪神大震災当時の思い出や、家族との安否確認及び避難方法について、いろいろと考えさせられた。

#

一九九五年一月十七日阪神大震災の日、私はスペインに単身赴任していた。現地会社に出社すると、日本人上司（神戸出身）が飛んできて神戸近辺で大地震だという。早速、日本へ電話したがつながらない。テレビでは町が炎上している映像を映し続けている。後で神戸市長田地区とわかったが、それから二日間まったく国際電話がつながらなかった。三日目にようやく埼玉の妻から電話があり、柏原の両親は無事だという。埼玉から柏原、埼玉からスペインという安否確認に三日間を要した。震災の際は、この安否確認というのが重要でかつ大変ことがわかった。

#

今回の東日本大震災は、午後二時四十六分に発生した。私は会社で執務中であった。最初揺れた瞬間はすぐに収まるだろうと思っていたら、揺れが急に大きくなり、慌てて机の下に潜り込んだ。すぐに社員全員建物の外へ避難し、怪我をした社員は誰もいなかった。

一次避難はうまくいったが、携帯電話がまったくつながらず、非常用防災無線も会社の防災本部がすぐ立ち上がらなかったので機能しなかった。一次避難場所から次にどこへ移動すれば安全なのかわからず、不安な気持ちのまま待たされた。どこの会社も一次避難訓練は行っていたはずだが、いざ本番となると、その次の行動がわからない。二時間くらい待たされて、ようやく別の避難場所へ移動したが、この間に津波に襲われていたらと思うと、津波対策も含めた二次避難訓練の重要性を痛感した。また会社では、携帯電話を通じた安否確認システムを導入していたが、本番では役に立たなかった。

二次避難場所から、家族に携帯電話で連絡をとろう

にもまったくつながらなかった。メールも送信できない。とりあえずメールを送信予約しておいたら、夜八時頃、一斉にメールが送信され、家族からのメールも受信できた。全員無事だった。そのうち携帯電話のバッテリーが切れ、再び音信不通状態になった。

会社の従業員の大半はターミナル駅まで歩き、そこで一夜を明かした者が多かった。私は、会社の二次避難場所の床で毛布にくるまって一夜を明かした。非常用電源で暖房されていたが寒かった。深夜、社員食堂のおばさんが赤飯を炊き出ししてくれてうれしかった。このような震災の際、会社にとどまるべきか帰宅すべきかは意見が分かれるところだが、社員同士の連帯感は強力で、会社にとどまった方が安全なような気がする。

#

私の妻は池袋駅で地震に遭遇し、近くの公園に避難した後、幸いにもそこで知り合った主婦グループと立教大学へ移動し一晩過ごしたという。警察も消防署員も誰も誘導しなかったので、どこへ移動していいかわからなかった。立教大学への避難情報は、公園内で口コミで伝わった。都市部の警察や自治体は、今回のような震災時に避難指示をどうやって人々に伝えるべきか、大きな課題だと思う。

今回の東日本大震災を教訓として、社会や各家庭で防災に対する意識を高め、安否確認や避難方法について十分論議することが最も大切なことなのだろう。

（昭和28年、柏原町生まれ／商社勤務／和光市在住）

（上田道代・画）

あの美しき海岸線の惨状

今田　二三夫（春日町）

「東日本大震災」、千年に一度と言われる巨大地震が、さらに想定外の大津波が輪をかけて大惨事を引き起した。その上、東京電力福島第一原子力発電所の大事故が重なったことは大きな不幸であった。

私は、昭和四十四年に大阪から東京に転勤して来た時、東京は何と地震の多いことかと思い、最初の頃は夜も眠れないほどであった。しかし、今日まで震度六ほどの規模のものは経験せず、地震があっても、又かと特に意識しなくなり、身体自体も慣れてしまっていた。十六年前の阪神淡路大震災時も他人事のように思えていたのである。

三月十一日の地震当日、私は妻と近くのイトーヨーカ堂で買物を済ませて、喫茶店でコーヒー休憩をしていた。十分程経過した時、すごく大きな横揺れが来た。居合わせた客達が「地震だ」と大声を上げた。私はいつもの通りで大したことはないだろうと座っていたら、只事ではない揺れ方で、しかも長時間続いた。スーパーの建物も菱形になるように見え、一瞬、自分達も下敷きになってしまうのではないか、といやな予感も走った。付近にいた年配の女性達も恐怖におののき、私達のところに寄って来た。私も立ち上がって歩こうとしたが、とても正面（まとも）に歩ける状態ではなく、テーブルに掴まり立ち竦んでしまった。

そのうち店内アナウンスで「この建物は地震には強く建てられていますので安心して下さい。外には一切出ないように」と放送され、ようやく皆落ち着いた。余震が立て続けに起きたので、おさまるまで出口付近で待機した。これほど大きなのは初めて体験し、生きた心地がしなかった。スーパーの中はマネキンが倒れ、積んであった箱が崩れるなど商品もかなり散乱した。

四時頃に帰宅し、家の中を見回したが、特に被害はなかったので安堵した。近所や友人宅の瓦礫が崩れたり、水屋の皿が落ちて割れたという話を聞くと、私は幸いであった。テレビをつけて東北地方が大変なことになっているのに驚いた。大津波が押し寄せ、家や船や自動車などがたくさんおもちゃのように、密集した街中に流されて行くすさまじい映像に私は唖然となり、そんな光景は沿岸の各地に起きていることに強いショックを受けた。

美しい景色の陸中海岸四五号線は二度ドライブしたが、日本有数の水産都市で多くの漁船が集まっていた気仙沼港、七万本のきれいな松林「高田松原」で有名な陸前高田市、碁石海岸の絶景大船渡市、大観音の上に上がり眺めた波静かな釜石湾、浄土が浜の景勝地宮古市など大きな被害を受けた。幾度訪れても、すてきなリアス式海岸線の魅力ある風景は忘れられないが、今はすっかり姿を変えてしまったのは残念極まりない。

テレビ、新聞、雑誌等で多くの悲劇が報じられ、数え上げれば切りがないほどだが、とりわけ胸が潰れる想いにさせられたのは、石巻市の大川小学校の全校生徒一〇八人のうち七割が死亡、行方不明になった悲痛な事実である。地震直後に整列して小高くなった場所へ避難しようとする途中に津波に襲われ、これほど多くの子供達が命を落としたことは痛恨の極みである。

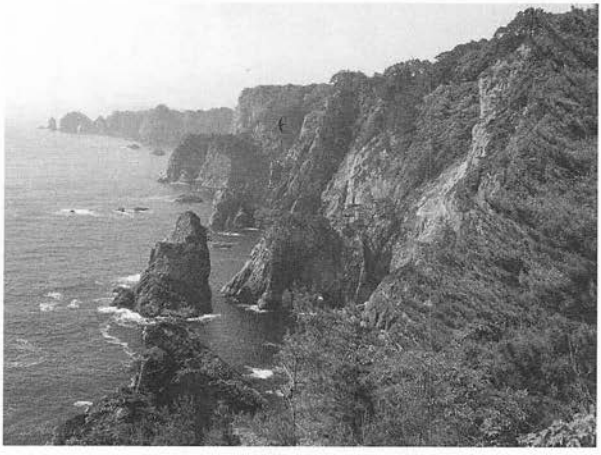
また一方、両親を亡くした子供達が多くいることも強烈に胸を打たれる。その一人、宮古市の小さな漁村に入り組んだ狭くなった小さな湾に、三〇メートル以上の高さとも言われる津波が寄せて、両親と妹が流され行方不明、四歳の女児だけ取り残された記事があった。この女児は、たまたま身体が漁具に引っかかり助かったのだ。祖母に引き取られたが、当時、自宅があった近くの高台で行方不明の母親が帰って来るまで待つと言って祖母を困らせた。また手紙を書いて「ままへ、いきてるといいね、おげんきですか」と、私は思わず涙が溢れて仕方がなかった。こんな聡明な幼い子が一人ぼっちとなり、これから長い人生を生きて行かねばならないのかと思うと不憫でならない。どうか元気で明るく成長して欲しいと祈るばかりである。

この二つの記事は、特に私の心を強く打ち、大きな

衝撃となったのである。生死の境目は紙一重、運だと言ってしまえばそれまでだが、あまりにも無常としか言いようがない。東北地方とは比べものにならないが、近辺では浦安市、取手市、香取市など液状化現象がひどく、考えもしなかった被害が広範囲に渡ったことにも驚嘆するばかりである。新浦安に今年四月より息子一家が住んでおり、度々訪れるが、今だに道路に下水管が飛び出していたり、亀裂が入っている所を見る。一戸建て住宅は傾いた家など住めなくなったところが多くある。東日本大震災では、多くの人や財産を持ち去った大自然の恐ろしさをまざまざと見せつけられ、その脅威の前に人間はいかに小さな存在であるかと思い知らされた。私は丹波に生まれ育ち、戦後の何もない時代であったが、何の災害にも遭わず今日まで生き長らえて来られたことに感謝しなければならない。今回の震災は、生き残った私達に、生き方を見つめ直して新しい時代へ歩めと呼び掛けているように思える。

地震国日本、どこにいても遭遇する機会があり、新たな教訓として私達も日常生活を見直す絶好の機会である。東北地方が早く復興することを念じ、すばらしい三陸海岸をもう一度走ってみたいと思う。

（昭和13年、春日町生まれ／前金融機関勤務／流山市在住）



岩手県下閉伊郡・北山崎北山崎

福島へ震災ボランティア

足立　晃一郎（青垣町在住）

私は、東日本大震災が起き被害の様子が明らかになるにつれ、自分にしかできないリサイクル楽器の演奏で、避難している人たちを少しでも和ませてあげられたら……と思っていた。最初は、そんなことをおぼろに考えているだけだったが、話をしたりネットで調べたりしている内に、行くことに固まっていた。日時は五月七日から八日。車で行くことに揺るぎはなかったが、なにせ東北、一番近い福島でも七五〇キロメートル。交代で運転してくれる助人がいる。柏高時代からの友人、清水孝志君に言うと、一緒に行きたいと言ってくれた。

さて、何県に行くか？　被害の大きい海岸部か原発の福島県か、考えているうちに福島県の川俣町のことを思い出した。そこは、日本のコスキンという、南アメリカのフォルクローレ音楽の祭典を行っている。ならば住民の中にもケーナやコンドルパサが浸透していて喜んでもらえるだろう。福島県だったら東北でも一番近いし。そんなわけで福島県の災害ボランティアセンターに電話をしてみた。

「避難所でコンサートを開きたいと思っていますが、そんなニーズはありませんか？」

「個々の事は分かりませんので、避難所に直に電話してみて下さい」

川俣町にも避難所があるので電話をしてみたが出ない。そんな時、テレビで避難所から中継をやっていた。電話をすると、そういう申し出が多く、言いにくそうだったが、要は事足りていると言うことらしかった。

原発からの放射能の飛散で、福島市や郡山では他よりも少し放射線レベルが高い。過敏な人はそんな所へ行くのは心配だと言う。これも風評被害というのか、現実にそこで生活している人がいるのに、ほんの一日二日程度行く我々が敬遠するのは変だ。ならやはり、福島へ行くべきだろう。

郡山市の避難所を調べると、郡山養護学校が避難所になっている。人数も七〇人程度と二人で行くには

ちょうどいい気がした。
早速電話すると、来て下さいということであった。午前十時から一時間のコンサート「リサイクル楽器でリサイタル」をさせていただきますと伝えた。午後はまた別の所、あまりボランティアが入っていない所ということで、大玉村の「フォレストパークあだたら」に電話をした。午後一時半から気功の講習会があるというので、その後にコンサートをすることになった。二日目の予定は現地で考えることにした。飛び込みで行っても何とかなるだろう。
五月六日（金）午後六時、あいがも農法をしている農家からいただいた合鴨肉と、それに見合う白菜やネギ、中華そば、楽器や炊事道具に寝袋を車に積んで出発した。
ルートは、舞鶴道で小浜まで出て敦賀から北陸道を新潟まで、その後は磐越道で福島に入る。順調に走って小浜を抜け、出発から二時間半で敦賀インターに入った。
昨夜は若干興奮していたのか目がよく覚めた。そのせいか運転していると、午後九時頃にもう眠気が出てきた。清水君と交代して助手席に座る。その間、眠ればいいのだが、助手席に座ったとたんに眠気がとれてしまう。あれこれ話しながら、それでも時折こっくりこっくりと船をこぐ。二、三回運転を交代したが、ちょうど新潟に入った頃ＳＡで寝ることにした。
ところが、さあ寝るぞと思っても頭の中を明日のコンサートのことや炊き出しのことがぐるぐると回り、なかなか寝付けない。二時間ぐらい目を閉じていたが、あまり寝ることが出来ずまた走りだした。不思議なもので、夜が白み始め明るくなってくると、少し眠気もましになってきた。目はしばしばするが何とか行けそうだ。
磐越道で福島に入り、五月七日午前六時頃、目指す郡山へ到着。市内はあまり車が走っていない。それが震災の影響か、単に朝早すぎるだけのことかは分からない。
郡山養護学校はＩＣを降りてすぐの所だ。生徒の下駄箱に避難者受付があり、そこで演奏に来た者です、という旨を伝えロビーの方まで案内してもらった。後で分かったことだが、受付の人や避難所運営をしてい

た人たちは、地方自治体から派遣されてきた人だった。

この郡山養護学校は、京都府の職員が五、六日単位で入れ替わりながら仕事をしているらしい。演奏場所は体育館の入り口近く、食事の配給用においてある長机に手作り楽器を並べ、アンプは学校の物を借用することにした。今日は土曜日で、よくは分からないが、自分の車等で外出している人もいるらしい。お客さんが何人いるかは、始まってみないと分からないそうだ。炊き出しは、この避難所の栄養士さんに相談し、鴨鍋の材料を提供することで解決した。

体育館の入り口の小さなホワイトボードに「本日の予定・10時・手作り楽器演奏」と案内してもらっていた。十時になって体育館内に放送で、「兵庫県から来られたマエストロ足立さんによる手作り楽器の演奏会を始めます」と放送していただき、マイクが私に回ってきた。

果たして、お客さんは被災者や支援者も含めて約二〇人程度、今日の昼ご飯を食べる人が三〇人というから、多く集まった方だ。

「えー、皆さんこんにちは。兵庫県からやってきました足立晃一郎と申します。不要品で作ったリサイクル楽器の……」と、いつものようにしゃべり出し、ほうきの笛から演奏を始めた。

お客さんは、殆どの人がマスクをしている。そのため、お客さんの表情が今一つ分からない。私の芸は、トークで笑わすという部分がだいぶあるので、マスクで表情が見えないのは困った。でも、初めのうちこそ固かったお客さんも、ストロー笛の赤ちゃんの泣き真似や鶏の鳴き声で、徐々に笑い顔が見えるようになってきた。時折、ダジャレを交えて笑いを取るのも、今回は被災している人たちだから不謹慎と思われないか、という遠慮があった。でも、私のくすぐり（笑わすところ）で少しずつ笑い声が出たことで、こちらも楽しく進めることができた。

演奏は体育館の端の方でやっているが、中の方は段ボールで仕切られたスペースに被災者がいる。幼稚園児ぐらいと思われる子どもも数人いるが、お母さんとなにやら話したり、泣いたりしていて、こちらには出てこない。本当はこっちへ来て聴いてほしいなと思っているのだが……。だから、時々、その子等に向けて「と

なりのトトロ」などを演奏してみたが、結局、最後までお母さんと一緒だった。

ジョウロのラッパも浮くレレも、ハンドルベルも全て演奏して最後には、最近の芸のピアニカの頭上弾きをした。「フーテンの寅さん」を頭で演奏するので、そのギャップで笑ってもらえた。私としては大満足である。そして最後に「ふるさと」や「見上げてごらん夜の星を」等をお客さんと一緒に歌った。

演奏の後は、楽器を見てもらいながら話をしたり聞いたりした。こちらから聞くのは、どこから避難されているのかということ。南相馬市という方がいた。「こういう風に演奏などしてくれるのは良いが、わしらはこんな状態だ。このことを帰って他の人に伝えてほしい」と涙ながらに言う人がいた。また他の人は、廃物を楽器にしていることに興味を持って、一つ一つ手にとって質問してきた。この避難所にボランティアで派遣されてきている自治体職員の人たちも興味深く話しかけてきた。中に一人、女子中学生が、僕の笛を手にとってすんなりと音を出すので、何か楽器やっているのかと尋ねると、民謡の笛を習っているとのこと。さすが東北、レベルが高い。うかうかしていたら追い越されてしまう。その中学生が笛を欲しいと言う。すぐにあげられるものはないので作って送ってあげると約束した。住所は?と尋ねて、はっと気がついた。そうだ、どこへ送ったら良いのだろう。自分の家にはいないし、この避難所にもいつまでいるか分からない。結局、早い内にこの避難所宛に送ることにした。一週間後に笛を作って送ったが、インターネットで避難所情報を見ていても、だんだんと避難者の数は減ってきていて、無事届いたかどうかは分からない。

十一時半頃、我々が持ってきた鴨鍋が出来たらしい。どんな風になっているか食べてみたかったので、昼に

なるのを待っていたら、ボランティアのスタッフの方から、一緒にどうぞと言われた。メニューはご飯、キュウリとシーチキンのサラダ、それに我々の提供した鴨鍋（汁）である。あとで、スタッフルーム（家庭科室）に例の女子中学生が「お代わり下さい」とやってきた。友達と三杯食べた、と言っていた。

お礼を言ったり言われたりして郡山養護学校を出発、次の避難所に向かった。何か普段とは違う充実感というか高揚感があり、車の運転もなめらかであった。

「フォレストパークあだたら」では約一〇人の中年女性のお客さんに。養護学校と同じように演奏した。笑いながら泣き出す人もいて、避難をされている方の心の中を慮った。

今晩の宿は、会津若松のホテルで泊まった。観光客は一時減っていたが、このゴールデンウィークには多くの方が来られたと言うことであった。翌日は、直前に電話をして二カ所の避難所を訪問し、同じように演奏した。どの避難所でも控えめながら笑ったり、感心していただいた。

後日、あの中学生から手紙が届いた。避難所はホテルに変わっていたが、笛は毎日手にとって遊んでいる（吹いている）と書いてあった。素直に良かったと思った。

〈足立晃一郎さんプロフィール〉

1953年　丹波市青垣町生まれ。在住。鳥取大学では落語研究会。卒業後、電子技術者として勤務。

1980年　会社を退職し、中南米を放浪の旅。リマで開いた演芸会で披露した落語が大受け。現地の民族楽器に親しむ。

1982年、小学校の教員の傍ら、アンデス楽器の演奏や楽器作りを始め、教材として身近な廃材を使ったリサイクル楽器作りを児童と一緒に行なう。

見回り品を使った楽器演奏と漫談が話題になり、各所で出演。「思いっきりテレビ」他にも。

現在、篠山市立篠山養護学校勤務。

被災地に向った留学生たち

上　高　子（氷上町）

あの、三月十一日以来、日本人のタイプははっきり二つに分かれたような気がする。「何か自分にできることはないか」と、今すぐ走り出したいような焦燥感をもったタイプと、「焦ってボランティアへ行ったところで、却って邪魔になるから、当面は静観した方がいい」というタイプ。私は言わずもがな、前者。そして、我が夫は後者。

うつうつと過ぎゆくままにいたところ、「アジアの新しい風」という、私が事務局長を務めるＮＰＯで、そのチャンスが巡ってきた。交流するハノイ貿易大学の学生たちが、日本の復興を祈って千羽鶴を折ったが、出来上がった鶴を、日本大使館や日系企業へ持ち込んでもだれも受け取ってくれない。そりゃそうでしょう。鶴は支援物資にはならない、今欲しいのは食べ物、衣類、生存に最低必要なものなんですもの。

学生たちががっかりしている、と聞き、「アジ風が何とかする」と約束したものの、あてがあったわけではない。震災一月後の四月十五日に、貿易大の学生の一人が日本留学にやってきた。段ボールに入れた鶴を抱えて。私は成田空港までそれを受け取りに行ったが、まだ宛先が決まっていたわけではない。

いろいろルートを探してみたが、全部空振り。そんなとき、会員の一人が、ルポライターの鎌田慧さんと知り合いで、鎌田さんが被災地ルポのため現地入りされると小耳にはさんだ。「鎌田さんにアジ風の話をして、どこかへコネをつけて」と会員に頼んだところ、すぐに「岩手県大槌町の避難所を支援している『岩手ゆいっこ』というボランチィア団体へ連絡を」と電話番号が届いたのが、四月二十七日。すぐ電話で了解を得て、ＮＰＯの資料を送り、同時に会員と留学生へボランティアへの参加募集をかけた。

「日本人のボランティアは珍しくない。このＮＰＯならではの留学生をできるだけ連れていく」と決めた私。夫は、「大丈夫なの？　ちゃんと調べろよ」と不安げ。もちろん。すべて新しいことをするにはリスク

があることは承知の上。

私のようなタイプはいるもので、二〇名以上の会員から申し込みがあった。留学生からも、「マスコミで報道していることが事実かどうか、この目で確かめたい」という申し出があった。結局三〇名（内一二名の留学生）が参加することになり、交通機関、宿舎、保険の手続き、マスクや手袋の準備などで奔走した。

がれき撤去のメンバー。左から３人目坂上会長、右から２人目小田晋作丹波新聞会長（丹波新聞提供）

一八名の日本人参加者の内、五名が柏原高校の同窓生ということは特筆すべきだろう。このＮＰＯの会員には、丹波出身者は二〇名ほどだから、今回のボランティア参加率は高い。「それいけ！」タイプが多いのかも。

六月五日に現地集合。千羽鶴の贈呈をはじめ二日間に亘った大槌町での活動に多くの紙面を割けないので、この団体の特徴である「留学生」の感想を中心に書いてみようと思う。

中国人学生一〇名、ベトナム人学生二名。彼らの率直な意見は、「復興が遅い」と言うこと。学生の一人が、四川大地震との比較をして皆の前で発表したが、日本の仮設住宅の設営が遅れているのは、「中国のように土地が国有でないから」、がれきの撤去が遅いのは、「遺体の捜索に時間をかけ、遺品など丁寧に探して復元したり、こまかい努力をしているから」など、など、日本人会員は言い訳をするが、心の底で「政治のリーダーシップが弱いから」ということはよく分かっている。良くも悪くも「ドングリの背比べのような日本人には、強力なリーダーが育ちにくいのよ」、と言い訳する。

ある学生が避難所に年寄りが多いのを見て、「どうして子供のところへ身を寄せないのか」と尋ねた。「日本人は子供に迷惑をかけたくないから」と言い訳をしながらも、心の底では、「昔の日本ならもっと相互依存はあったけど、今は家族でも遠慮があるのよ」と思っている。

「アジアの新しい風」というＮＰＯは、日本語を学

ぶ学生の支援活動、ということになっているが、設立時の内なる願いは「日本人の意識改革」である。私自身の体験から、「異なるものと接することにより、自分の姿を客観視する」という、異文化交流のだいご味を味わってもらいたいと、望んだ次第。

今回、留学生も「自文化への洞察」を深めたと思う。何と言ってもうれしかったのは、「日本人はきれい好き。避難所の小学校のトイレは、まるで自分の家のように清潔に掃除されている」や、「整理整頓がきちんとしていて、我慢強く、みな仲良く住んでいる」などの感想や、「こんな悲惨な体験でも、前向きにとらえている日本人を見ると、私が拘っている個人的な挫折は、つまらないものに思えた」という感想を聞いて、無謀と思われようと留学生を連れてきてよかったと、感激した。

避難所で話を聴く筆者。男性は流された大槌町長の元同僚で『一瞬の判断が生死を分けた』と話した」（藤原ひさ子さん―21回生―提供）

もちろんボランティアは、受ける側に喜んでもらえなければ、自己満足に終わるだけだが、避難所の人々は留学生の慰問を喜んでくれて、「初めて留学生と話した。話を聞いてもらえてうれしかった」というお礼の手紙が届いたり、対策本部の人たちにも「日本人が頑張っていることを帰国したらみんなに伝えてもらいたい」と喜んでもらえた。

疲れは長く残ったが、心は達成感と充実感で、しばらく余韻にひたることができた。留学生と被災者が望む限り、大槌町の復興まで、「アジアの新しい風」は被災地ボランティアを続けていこうと思う。

「うまくいって良かったね」と、現地でのビデオを見て、夫が感想を述べた。私はニヤリとして「安心・安全の日本だけど、時にはリスクを取ることも必要でしょう？」。

（昭和19年、氷上町成松生まれ／認定ＮＰＯ法人アジアの新しい風・理事長代行／東京都世田谷区在住）

ふっくらと手織りの良さ

安達佳代
（丹波布伝承館）

◆丹波布とは

「丹波布」は、江戸末頃から明治の初め頃まで、佐治地域（現在の丹波市青垣町佐治）周辺で、農家によって織られ、京都、大阪などへ売られていた。また当時は縞緯（しまぬき）、佐治木綿などとも呼ばれていた。

時代の流れとともに一時は衰退したが、昭和に入ってから民芸研究家、柳宗悦（むねよし）氏によって価値を見いだされ、その後、上村六郎氏（当時大阪学芸大学教授）や地元の有識者、担い手となる女性たちなど復興にかかわる人々の尽力により、今日まで伝承が続けられてきた。この時、柳氏によって、「たんばぬの」と銘名され、その名が全国に知られることとなる。

これらの功績によって、昭和32年、当時の文化庁より、国指定選択無形文化財の「記録作成等を講ずべき無形文化財」に認定される。その後、平成五年に兵庫

県の「県指定伝統的工芸品」の指定を受ける。

現在、古布と呼ばれる江戸から明治にかけて織られた丹波布の多くは、東京駒場の日本民藝館に所蔵され、あとは全国の古布店や蒐集家によって所蔵されており、ほとんど市場に出てくることがない。

今現在、丹波布を織る人数は増えてきているが、まだまだ生産量も知名度も、他の織物に比べると非常に少なく、「幻の布」と言われてきた。

丹波布伝承館

◆丹波布の現在

復興された丹波布は、細々と佐治の町で織られていたが、復興当時の担い手達の高齢化によって、再び後継者問題が浮上し、旧青垣町公民館が昭和四十九年から後継者育成講座を開設する。平成十年に、技術を保存継承するために丹波布伝承館を建設する。前年一年間をかけて、佐治在住の足立康子氏を中心とする講師によって指導員を育成し、翌十年七月に伝承館長期伝承教室を実施する。丹波布の伝統技術を習得し、保存、振興を目的に、二年一期制で週四日、一日六時間の長期伝承教室を開催している。全国公募で応募された方が、二年に数名ずつ丹波布の担い手として育成されている。

現在、長期伝承教室の修了生たちが丹波布の新たな担い手となり、地元だけでなく、丹波の地を遠く離れた方も織り続けている。

「丹波布」は、一度廃れてしまった布である。世の人々の手仕事への関心、環境意識の高まりに応える布として、現代によみがえった技術や伝統が再び幻とならないように後世に伝えていきたい。

◆丹波布の特徴

丹波布の特徴として、四つ上げることができる。

一番の特徴は、すべてが天然の材料である。①木綿

糸、②絹糸、③植物染料を用いて作られている。そして、④糸紡ぎから織りまでのすべての工程が機械などの動力を使わず手作業によって作られ、様々な縞（格子）模様に織られるのである。

①木綿糸

丹波布の糸は、経緯すべての糸に手紡ぎの糸を用いる。棉繰り（種と綿に分ける作業）をし、綿打した綿を糸車で紡いだ手紡ぎの糸を使用する。

伝承館の館内

糸紡ぎは、「じんき」という綿の塊を、糸車を使って綿の繊維を引き出しながら撚りをかける作業で、この糸の太さや撚りのかかり具合によって染めや織りの風合いが変わってくる。誰にでも出来る作業ではあるが、根気と集中力を要する作業である。

丹波布は、糸を紡ぐことがすべての作業の始まりと言える。

②絹糸

丹波地方で江戸時代から盛んであったのが養蚕で、昔は多くの家庭で蚕を飼い、全国へ出荷していた。そこで出るのが、出荷出来ない屑繭で、それを有効利用したのが「つまみ糸」と呼ばれる絹糸で、丹波布の特徴である。

古布や資料写真でよくみられる「つまみ糸」は、染められずに白いまま、太さも様々な絹糸である。繭を細く美しくひく技術は当時からあったのだが、使用用途のためか、あえて太く撚りをかけない「ずり出し」の糸にして使っているのも特徴的である。そして「つまみ糸」は経には決して用いず、常に緯糸として使用している。

現在、兵庫県で養蚕をされているのは、春日町で一軒だけである。伝承館にも、年に二回程、屑繭やドラ繭（二匹が一つの繭を作ったもの）を寄付していただ

き、「つまみ糸」を作っているが、現在の養蚕業は衰退の一途を辿り、現在の丹波布に用いる「つまみ糸」も輸入品に頼っているのが現状である。

③染色

丹波布の染色は、昔も今も天然の草木染めで、科学染料は一切用いない。

指導員一同

色調を大別して、茶系と藍とに分けることができる。このうち藍染めは紺屋に依頼して、淡い水色「甕のぞき」から、「浅黄」、「縹」、濃い色は「納戸」、「紺」等に数段階に染め分けてもらい使用している。

茶系は、焦茶、黄茶、赤茶などに加えて、その濃淡に染め分ける。この染色は織り手が自らが染色し、自分の好みの色を染めて縞を考案する。染色材料も、出来るだけ地元で採取し、乾燥させて保存し必要なだけを煮出しする。

染色材料は主に、「栗」、「榛の木」、「夜叉ぶし」で茶色を、「こぶな草」、「楊梅（やももも）」で黄色を染色する。

④手織り

織りは昔ながらの手機（てばた）で、形や大きさは現代の人の体型にあったものになっているが、機に上げる（織れる状態にする）までのすべての工程（整経、千切り巻き、綜絖通し、筬通し）も手作業で、一切機械などの動力を用いない。そして一連の作業も、織り手が一人で行い、その作業工程は、次の工程に繋がっているので、気の抜けない、ごまかしのきかない作業である。

そうして織り上がった丹波布は、手織りであることもあり、ふっくらとした風合いや素朴で暖かな色合いも、どこか落ち着いた仕上がりになる。つまみ糸を緯糸に使用していることや、特徴的な縞の配列パターンなどから、ひと目で他地域の木綿布と区別がつく。

代表的な稲畑人形の作品。現存する型は130種

全国に知られる郷土玩具

小田晋作
（丹波新聞社会長）

今年のエトにちなんで、稲畑人形のウサギ土鈴の絵が年賀切手（八〇円・写真）に採用されたことは、読者の記憶に新しいところだろう。五〇円切手の三春駒（福島県）と並んで、メジャーな郷土玩具として全国に認められたことを物語っている。

丹波市氷上町稲畑で幕末の頃始まった稲畑人形。天神さんやまんじゅう食いなど、素朴で愛くるしい作品は、丹波育ちの人なら一度は目にしたことがあるはず。全国の人形愛好家の間でもファンが多い。現在、生業として稲畑人形を製造するのは、創始者から数えて五代目の赤井君江さん（77）一人だけ。廃れそうになる危機をしのぎ、伝統技術を守り伝えようとしている。

稲畑人形を興したのは、君江さんの曽祖父に当たる赤井若太郎忠常。天保四（一八三三）年、稲畑の庄屋の家に生まれた。一四歳の時、京都で出会った伏見人形の魅力が忘れられず、稲畑でも良質の粘土が取れることに注目。やがて農閑期の副業として村で取り入れることを思い立ち、伏見から職人を招いて技術指導を仰いだ。

赤井家では元々、漢方薬の製造・販売をしていたので、人形は行商の手で全国に広がっていった。明治の頃の最盛期には集落で七戸が製造に当たり、二〇〇人が従事していたという。

若太郎は書や歌道にも優れ、明治維新には勤皇家として活躍。子弟教育のために「稲畑学校維新舎」を作る際には、上京して福沢諭吉を訪ね、著書の『学問のすすめ』をはじめ地理や物理の書籍を買い込んで教材にした。また家業の養蚕では、桑の苗の改良や新品種の開発を手がけ、特産粘土を使った新しい屋根瓦や学習用石板なども考案した。

年賀切手のウサギ土鈴は、中で土の球がコロコロと鳴る小さなものだが、稲畑人形には大小様々なものがある。型が残っているものだけでも一三〇種類。代表的な天神のほか、清正や金時、桃太郎など武者・昔話もの、さらには歴史・歌舞伎、福神、女、童子など。エトも大抵のものがそろい、デザイン、大きさ、彩色にも様々なバリエーションがあって、ひなまつりなど節句、年賀やお祝い事に使われてきた。

しかしながら、住居や生活様式の近代化に伴って、存亡の危機にさらされたことも幾度か。君江さんの父、若太郎直道さん（三代目）が一九五八（昭和三十三）年に亡くなり、母のみさ代さんが四代目を継いだ頃には「もうこれで終わりかも」と、かなりの型を処分してしまった。当時小学校教師だった君江さんも他家に嫁ぎ、休日に実家で手伝うなどして細々と続けていた。

「ハト笛・土鈴まつり」に向けて絵付け作業をする赤井さん

ところが、昭和四十年代になって全国的に郷土玩具を見直す機運が

盛り上がり、神戸でのポートピアに出展を求められたりした。みさ代さんが他界した翌年の1982（昭和五十七年）には、皇太子（現天皇）が丹波に来られ、五代目となった君江さんが実演をするのをご覧になった。

とは言え、小学校教師を務めながらの五代目は、製品を販売することは出来ず、「夏休みの研修」として製作。あちこちの資料館などに寄付をするなどでしのぎ、生業として復活したのは定年退職後の、ここ十数年前からのこと。

現在は、地元の公共施設で教室を開いたり、小学校の図工の時間に取り入れてもらったりしているが、後継者の育成が一番の課題。粘土を練って型にはめ、左右を合わせ、天日で何日も干してから窯に入れて、素焼きの後、数回白で塗りをして下地を作ってから絵付け。このような工程に手作りでこつこつと取り組まなければならないので、量産が出来ない。助手一人雇うにも採算が合わないという。

五代目・赤井君江さん

それでも、県伝統的工芸品、市有形文化財、同無形文化財技術保持者に指定され、「六代目ということにならないまでも、技術を継承してくれる人材は、何とか養成していかなければ」と話す。

もう一つの君江さんの夢は、「型」やその基となる「種」、さらには全国に得意先があった頃から残る様々な文書、帳簿類などをそろえた資料館を作ること。赤井家が営んでいた養蚕、薬、瓦、石板などの事業関連の資料も添えて、往時、地場産業の一大拠点だった稲畑村の様子を伝えたいという。

年賀切手の発行以来、全国の公私立の展示館や収集家から注文や見学以来が舞い込んでおり、さしあたっては十一月五～六日に「ハト笛・土鈴まつり」として、四〇種類を展示・販売する。また、「江戸から昭和のひなまつり」をテーマに、丹波の家庭で飾られてきた様々な人形を一堂に集める企画などもあたためている。稲畑人形はまさに、君江さんの一途な情熱に支えられている。

始まった学校統廃合の議論

古西　純
（丹波新聞記者）

丹波市では今、少子化による子どもの数の減少が著しく、小中学校の統廃合についての議論が始まっています。明治以来続いてきた各地域の小学校ですが、今後10～20年間に、大規模な再編があるかもしれません。丹波市でこれまで行われてきた議論の内容をお伝えします。

まず、児童数の推移をみてみますと、少子化の進み方がかなり速いことが分かります。市内の小学生の数は、今後5年間で約700人も減る見通しで、10年後にはさらに500人近く減ると試算されています。

今年度の小学生の数は3991人で、小学校の数は25校。学校規模のばらつきは大きいですが、仮に1校平均を160人とすると、7・5校分の子どもが今後10年でいなくなることになります。

影響は、すでに学校運営に現れています。市内でもっとも学校の規模が小さい遠阪小学校（今年度全校児童数57人）では、2010年度から、2学年が1学級で勉強する「複式学級」が始まりました。兵庫県では、2学年で14人以下になると（1年生を含む場合は8人以下）複式学級とする規定があり、丹波市内では初めて適用されたケースでした。小規模校には児童の個性や特性に応じた指導がしやすいなどのメリットもありますが、「複式学級」は望ましい教育環境で

児童・生徒数の推移

地域	小学校名	2010年度	2022年度
柏原	崇広	487	441
	新井	167	161
山南	上久下	82	73
	久下	189	76
	小川	120	105
	和田	285	148
氷上	南	172	110
	中央	305	147
	西	157	71
	北	259	156
	東	298	222
青垣	芦田	79	52
	佐治	162	80
	神楽	78	28
	遠阪	58	31
市島	竹田	170	63
	前山	95	80
	吉見	113	52
	鴨庄	109	49
	三　輪	104	70
春日	春日部	116	113
	大路	99	70
	進修	96	95
	黒井	196	203
	船城	84	58
合	計	4080	2754

地域	中学校名	2010年度	2022年度
柏原	柏原	316	303
山南	山南	275	155
	和田	173	96
氷上	氷上	613	433
青垣	青垣	200	132
市島	市島	346	184
春日	春日	312	266
合	計	2235	1569

※網掛け数字は、「適正規模」を下回る学校。
2022年度は出生率による試算値

はないとの考え方が一般的です。

こうした実情を受けて丹波市教育委員会は、学校の「適正な規模と配置」の基準を定め、市民の議論を進めていこうと、２００９年に「市立学校適正配置等検討委員会」（委員長＝加治佐哲也兵庫教育大学学長）を設置しました。２０１０年11月に委員会から答申が出され、市教委は２０１１年２月に適正規模・適正配置についての基本方針をまとめました。

2010年度から、市内で初のケースとなる複式学級が始まった遠阪小学校＝青垣町山垣で

検討委員会が提案した「適正規模」は、小学校が「全学年に２学級が確保できる２４６人以上」、中学校は「全学年に３学級が確保できる２４３人以上」というものです。保護者、地域住民、学校関係者にアンケートを取ったところ、小学校では「クラス替えができる規模が望ましい」との意見が多く、中学校ではさらに大きい規模の方が望ましいとの意見が多かったことなどを参考にしました。ちなみに、現在は「適正規模」より小さい学校が大半で、現状で基準を超えている小学校は、25校中５校しかありません。

横谷典幸・丹波市教育委員長（当時）＝写真左＝に答申を手渡す、加治佐哲也・市立学校適正配置等検討委員会委員長（兵庫教育大学学長）＝2010年11月

答申では、さらに踏み込んだ提案もなされています。「適正規模」の基準と、「小学校は旧町の枠を超えて統合しない」という原則にのっとり、旧町域ごとに、具体的な学校名を挙げて、統合案を出しました

＝別表参照。いずれの地域も検討対象になっており、山南、青垣、市島地域では4ないし5校ある小学校を地域で1つにするという大胆な内容で、市内の小学校は現在の半数以下の10―11校に統合されることになります。

この案は、あくまでも「検討委員会の答申」という位置づけですが、今後、各地域で具体的な案として示されれば、住民からさまざまなリアクションが起こることが予想されます。

適正規模・適正配置に向けた具体案（抜粋）

小学校	
柏原地域（2校）	①崇広小校区の一部を新井小校区に組み入れる ②崇広小校区の一部で学校選択制を導入し、崇広小と新井小を選択できるようにする
山南地域（4校）	①上久下小、久下小、小川小を統合 ②上久下小、久下小、小川小、和田小を統合 ③上久下小と久下小を統合し、小川小校区で学校選択制を導入 ④4校が連携する小規模校ネットワークを導入
氷上地域（5校）	①中央小と西小を統合。南小と東小を統合 ②中央小と西小を統合し、南小の児童数の推移を見ながら統合を考える ③北小、中央小、西小を統合し、東小と南小を統合する ④東小校区、北小校区の一部で学校選択制を導入
青垣地域（4校）	①芦田小、佐治小、遠阪小、神楽小を統合 ②幼小中一貫教育の導入 ③4校が連携する小規模ネットワークの導入
市島地域（5校）	①竹田小、前山小、吉見小、鴨庄小、三輪小を統合 ②小中一貫教育の導入
春日地域（5校）	①春日部小、大路小、進修小を統合。黒井小と船城小を統合 ②小中連携型一貫教育の導入
中学校（7校）	
①山南中と和田中は早期に統合。氷上中と青垣中、市島中と春日中を統合 ②小中一貫教育の導入（市島） ③幼小中一貫教育の導入（青垣で認定子ども園、氷上西高校も含めた連携型一貫教育、春日で2小学校と1中学校の連携型一貫教育）	

小学校の統廃合は、学校だけの問題ではありません。小学校区は、かつては「村」の単位であり、今も、地域コミュニティーの深いつながりがあります。「まちづくり」と「小学校区」は切り離せない関係といえます。まずは、子どもの教育環境の充実を最優先に考えなければならないのは当然ですが、まちづくりの視点も頭の片隅に置いておく必要があるでしょう。

地域住民の意見を吸い上げる場として、市教委は、旧町域（柏原、山南、氷上、青垣、市島、春日）ごとに「地域のこれからの教育を考える会」を住民主体でつくってもらうよう、働きかけています。

まず、緊急課題となっている青垣地域で昨年9月に設置され、次いで、山南地域で今年6月に立ち上げられました。適正規模・適正配置に向けた検討と無関係の地域はなく、今後、全ての地域で設置する予定です。

メンバーは、自治振興会（自治協議会）会長、自治会長会会長、小中学校校長、P

ＴＡ会長、認定こども園園長、保護者代表ら。地域住民の意見を吸い上げる場として設置するもので、方針の決定権はあくまでも行政（市教委）にあります。事務局は市教委が務めています。

学校の統廃合に関して、地域に暮らす住民たちの思いは複雑です。

青垣地域の考える会は、これまでに８回開かれ、６月には初めての住民向け学習会を開きました。住民や教職員ら約２００人が参加。市教委から現状や検討されている対応案などについて話を聞き、意見を出し合いました。

学習会の参加者からは「市教委の考え方は『統合ありき』ではないのか」という確認や、統合しなくて済む「小規模ネットワーク」についての質問が出され、できれば現状維持を望む気持ちも伝わってきました。

青垣地域の考える会は、夏以降、地区別学習会などを開き、来年３月に方向性をまとめる予定ですが、住民の声をどのように汲み取るのかは難しいところでしょう。

学校の統廃合―。できれば避けて通りたい重苦しい課題ですが、加速度的に進む少子化に直面し、もはや先送りできない事態となっています。

小学校区が広くなれば、通学方法も変わってきます。これまで小学生は歩いて集団登校していましたが、これからはバス通学が主流になるかもしれません。小中一貫教育が模索されれば、カリキュラムや教員の配置なども変わってくるでしょう。統廃合により、教育内容が具体的にどうなるのか、イメージを持ってこれからの方向を決めることが大切だと考えます。

市教委には、〝住民主導〟の形を無理強いせず、教育行政のプロとして、きちんと表に立って議論をリードしつつ、住民の声に耳を傾け、柔軟に対応する姿勢を望みます。

市民がこぞって議論に参加し、子どもの教育環境を充実させるという大きな目的を見失わず、この際、本当に「適正規模」をめざすのが良いのか、丹波市の子どもたちにどんな学びの機会を与えたいのか、もう一度話し合うことも大切なのではないでしょうか。

森と水に物語性を求めて

―「曲がり道」は画家の道へと続いた―

画家

笹倉鉄平さん

●インタビュアー
上　高子
岡田昌子

《プロフィール》1954年生まれ。山南町出身。柏原高校・武蔵野美術大学商業デザイン科卒業。グラフィックデザイナー、イラストレーターを経て1990年より画家として活動。以後170作品を超える版画を発表。全国の有名百貨店、イタリア、中国、パリ、ニューヨーク等で個展や展覧会に出品。海外でも活躍中。

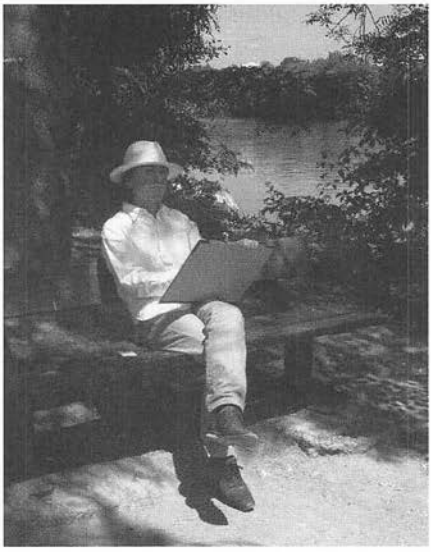
――ギャラリーのあるオフィスを訪ねました。ファンの多い東北地方の方々への支援は金銭面が有効という熱い思いと、日本の家族の団欒が戻って欲しいと願って描かれた「石割桜」が我々を出迎えてくれました。

◆丹波時代

――心に安らぎをもたらす絵として老若男女に幅広い人気の笹倉さんですが、早速、丹波での幼少期からお聞きかせ下さい。

笹倉　父が大阪の船場にある呉服屋で商売していた関係から、丹波で布を織り、家の中には図案や色それぞれに染められた糸や布が生活の一部としてありまし

て、デザインから出来上がるまでの工程を見てきました。学校から帰ると、前庭に棹が渡してあって沢山の糸が干してあるんです。その糸の色の配分が綺麗で、毎日その糸の下を潜り抜けて見ていました。仕上がるまでにガラッと配色が変わる。見ていて飽きなかったですね。小さい頃からきれいな色に対する憧れが知らず知らずの内に身についたように思います。ベレー帽をかぶって絵を描いている3歳頃の写真がありました。それと、家の襖という襖に落書きをしていたようですよ。



セーヌ河畔のベンチでスケッチ

――3歳頃には既に笹倉画伯は誕生していたのですね！（笑い）お母様に怒られることはなかったですか？

笹倉　なかったですね。男ばかり4人兄弟の3番目。5番目に五郎がいました。雑種犬です。（笑い）スピッツに代わったりもしましたが……。

――そういえば、笹倉さんの絵には動物があちこちに描かれています。動物のしぐさが見事に描写されており、とても可愛くて探すのが楽しみなのですが、特に犬がお好きですか？

笹倉　実家でも、海外の旅に出ても、犬は居るのが当たり前でしたからね！

――幼児期から絵画で賞をもらうのも当たり前でしたか？（笑い）

笹倉　絵は好きでしたが、特別な気持ちはなくて書道教室へ通っていました。ボール紙を切っておもちゃを作ったり、中学時代は友達3人と「漫画同好会」を立ち上げて漫画を描いたりしていました。だけど、ストーリーが作れない。子どもだから当たり前なんだけど、この道は才能ないと挫折を感じました（笑い）。ブラスバンドは友達に誘われてやっていた程度だけ

ど音楽は好きでしたね。高校の頃はギターを始めて、フォークソングを歌って演奏会に出演したり。ただ、音楽の才能がないのは分っていたので、将来は絵画の道と決めていました。柏校の美術の関口先生に「そういうふうに教えて欲しい」と伝えました。イラストやデザイン講座を通信で勉強したり、大阪まで絵の勉強に通ったりもしましたね。

――子どもの頃から、ご自分の職業選択について向き不向きを消去法で選別しながら、目標は絵画の道と定め、先生にもキチンと主張され、その目標に向かって着実に努力されてきた。しっかりした子どもさんでしたね！　その裏には、子どもを信頼する愛情と、必要なものには金銭的支援をするという親ごさんの自然な接し方が伺えます。素晴らしい親御さんの元で、画家になるべく恵まれた家庭環境の中で育ってこられたのですね。

笹倉　そうですね！　親からは絵を描く材料を揃えてもらったり、通信教育を受けさせてくれたり、随分と応援してもらいました。

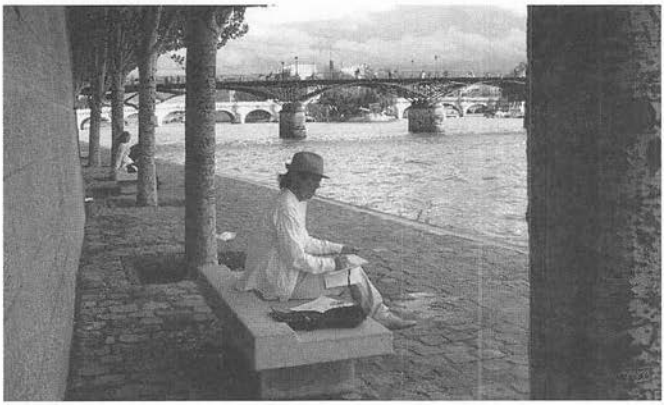
――それにしても、小さい頃から自己実現に向けて一歩一歩自らの力で歩んでこられている賢さ、精神力の強さには感心するのですが、今の子どもには見られないような逞しさです。

笹倉　僕は、文章は下手で上手く伝えられないから、絵と音楽でなら伝えられる。絵を仕事に、音楽は趣味にしたいと考えてきました。進路選択で悩んだことはないですね。だけど、子ども心に〝画家〟にはなれないだろうと思っていました。描けるのはデザイン。それで、武蔵美のデザイン科へ進学しました。

◆山南町から海外へ

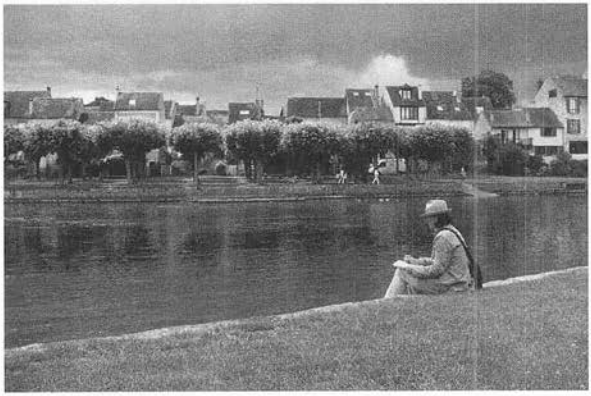
笹倉　最近出した画集にも書きましたが、ヨーロッパなどに旅をしていて「ここを描きたい！」とスケッチしたり考えたり分析する際に、「何故ここに感動して描きたくなるのか？　初めての場所なのに何故か懐かしい！」若い頃には気付かなかったことです。外国の街は隣町、満天の星空はふるさとの空、牧草地は蓮華草の田んぼ。昔感じた楽しいとか嬉しいとか心が動く時と似たようなデジャブ感（既視感）がある。育った町から隣町、そう、山南から柏原へ、柏原から大

阪や東京へ、そうやって拡がっていくのがとても楽しかった。大学卒業の頃は就職難の時代だったけれど、先輩が紹介してくれて、森永製菓のパッケージ画などを依頼された。〝小枝チョコ〟や童話風のチョコスナックの絵など10年間に２００点以上描いてきました。ターニングポイントはヨーロッパ旅行でしたね。旅が好きで、子ども時代の続き。知らないところが楽しくてしょうがない。絵に描きたくてしょうがない。イラストよりもその見ている場所を描きたいと思い始めた。毎日新聞に5年間、小さなカットイラストを



パリ・芸術橋付近にて（2007）

英国ファーソーリ村にて



モレ・シュル・ロアンにて

描いていましたが、だんだんと大きな紙面になってゆき、ついには日曜版のカラー版1ページに月1回2年間絵を描かせてもらえた。面白いと評判をいただいた。毎日新聞は大きかったですね。とにかく描かせてもらうことがとても嬉しかった。新聞に絵を描けるようになってから読者からの投書を編集者が見せてくれる。いつも、自問自答していますが、読者の声を聞いて気持ちのささくれやイライラがなくなりましたね。絵でやっていけると考えるようになりました。

◆画家への道

――画家になられました。フェルメールの絵には光の美しさとストーリーがあるといわれていますが、笹倉さんの絵にもそれを感じるのです。「TAT」という心理学の性格テストに、絵を見て物語を作るというのがあるのですが、笹倉さんの絵の中の犬の後姿や動物の動きから物語が作れ、その物語によって、その人の性格が分析できそうに思いました。

笹倉　私は昔から展覧会で暗くて恐い感じのする絵は好きではなかったので、見る人が絵の中で楽しんでもらえるような物語性が欲しと考えていたのは事実です。森を描くために7年間、軽井沢に住んで観察したり、水面観察のために海のそばに住んだりしました。森や水は物語性を伝えられるツールでもある。今でも〝水〟には強く魅かれています。

――人々にどのような影響を与えてきたとお考えですか？　また、お気に入りの絵はありますか？

笹倉　若い頃は興味関心だけで無我夢中に描いてきましたけど、今頃になってお客さんから教えてもらっていると感じることが多いです。画家にはいろいろなタイプがあるけど、僕は自分の感情を絵にぶつけることにコンプレックスがありました。だから、昔から画家は無理だと自分で決めていた。でも、画家になって思うのはイラストやデザインの道は回り道ではなかった。ここ数年、そんな思いになっています。以前は強烈な個性を持って描いている人が羨ましかったものです。好きな絵というものは人それぞれで、見ている人のどこかに引っかかるものだし、描いている側も絵は感覚で、その時の心情がベストなので、描いている絵は、それぞれがその時のベストワンです。

――東京と京都にアトリエをお持ちですが、丹波でもお描きになりますか？

笹倉　3年前に父が亡くなりましたが、母は今も健在ですので時々帰りますが、家に帰ると、どこへも出かけずにボーッとしています。丹波は安らぎ。自然の景色がある。特徴は少なくても里山の良さがある。私の想像の中にあり、絵の中に丹波のエッセンスが入っています。丹波で育ったことに今は誇りさえ持っています。こんな時代だからこそ、おおらかで優しい丹波人の感性を活かした絵で人の心を癒したい――というのが、社会への活動目標です。

ベルゲンのベンチでスケッチ

――絵画道一筋の生き方に精神力の逞しさと感性の鋭さを、絵の中に爽やかさと癒しを、感動を持って伺わせていただけました。また、鑑賞させていただくことを楽しみにしています。長時間ありがとうございました。

（文責・岡田）

――12月13日（火）～18日（日）まで、東京セントラル美術館（銀座2丁目「メルサ Ginza-2」5階）にて、100点以上の作品がご覧いただける個展の開催が予定されております。詳しくは公式ホームページ（http://www.teppei.net/）、もしくは株式会社アートテラス（☎03-3517-5755）にて、ご確認をお願い致します

追悼

村上末吉さんと郷友会

前会長　渡邊隆男

郷友会を頼みますよと、村上さんから何度も握手を求められたのは郷友会百周年の企画が持ちあがったころのことでした。このイベントだけは何としても盛大にやりとげたい、将来語り草になるような立派な行事にしたいと、当時郷友会の会長だった村上さんの熱の入れ方は尋常ではなかったものです。実行委員会が組織され、スタッフはみなよく団結してプランを練り、知恵をしぼって声をかけあい、目白椿山荘の大広間に二百五十余人が集うという、この会としては正に空前の大盛会を実現しました。平成七年暮れのことです。

村上さんはいつも口ぐせのように言っていました。僕はね、郷友会が大好きなんですよ。雑誌「山ざる」がまたすばらしいでしょう、こんなりっぱな郷土誌を持つ会なんて日本中どこを探してもありませんよ。そういえば家内もこの会が好きで、この会の会員の動静をみな憶えていたものです。利害を越えた親睦会っていいものですねと。

そのころ底をついていた郷友会の運用資金も、この百周年を契機に徐々に増えてまいりました。ありがたいことです。

村上さんは、一九一九年三月（大正八年）大路村中山（現春日町）の産、旧制柏原中学卒業（第三十七回・昭和十七年）後、新京工業大学工学部に学ばれました。太平洋戦争終結間もなく上京され、商業建築の分野をめざして、一九五一年（昭和二十六年）株式会社桂工務店を創設（社名は桂離宮に因むという）、一九五六年株式会社商店建築社を興し、雑誌「商店建築」（月刊）を創刊。以後五十

余年、我が国商店建築界に揺るぎない地歩を築かれました。しかし、ここに至るまでの道のりは順風満帆であったわけでなく、出版人だれしもが経験する辛酸をなめてこられたのでした。

「出版経験のない私にとっては、無謀と云える計画である（中略）発行してから十年間は、試行錯誤の連続であった。荒縄で縛られたボロボロの返本を多数見たとき、思わず目頭を熱くする状態であった」と、五十年記念誌の巻頭で述懐されています。

その苦難を乗り越え、この出版社が刊行した商店建築に関する文献は、創業以来一〇〇〇点を越し、さらに、中小小売業、サービス業、商業者への指導・企画・設計・監理で全国一二〇〇店舗に及ぶ実績を持ち、斯界の指導的立場を築きあげられたのでした。

村上さんは一方で業界への貢献も高く、一九八三年（昭和五十八年）に黄綬褒章、九四年には勲四等瑞宝章を受章されています。二〇一一年六月二十日逝去、行年九十二歳。ご冥福をこころからお祈り申し上げます。

村上元会長を偲ぶ

会長　坂上勝朗

第七代会長を昭和六十二年から平成八年までの九年間つとめてくださった、村上末吉氏が黄泉へと旅立たれました。郷友会の今日あるを導いてくださった先達を、また一人失ったことになりますが、これも限りある人の世のさだめとあれば、いままでのご恩に満幅の感謝を捧げるとともに、ひたすらご冥福をお祈りする以外どうすることもできません。

村上さん（失礼ながら、普段通りの敬称でよばせていただきます）との出会いは、およそ三十年前に柏陵同窓会東京支部総会が、日生会館で行われた日のことだと思います。それまで村上さんは同窓会の名簿整理、金銭出納、会議招集、会場の手当てそのほか諸々の処理を、長年にわたって引き受けておいでした。じつは、これには奥様の美知子さまの絶

大な貢献があったのですが、同窓会はそのお力添えになんのお礼もしていないありさまで、まことに申しわけなく存じております。

同窓会の集まりは、ここ数年、百人を超えるにぎわいになりました。その後を受け継いだ世代の熱意と工夫が、この成果をもたらしていることは疑いありませんが、その底辺には、通信費にすら事欠く時代をささえて、懸命に同窓の絆をつなぎとめてくださった、村上様ご夫妻の存在があったことを、忘れてはなりません。

郷友会では、すでに述べましたとおり、九年間の会長任期中、私は雑用係としてさまざまな教えをいただきました。ことに百周年記念総会を椿山荘で催したときには、おおよそ二年も前から企画立案に取りかかり、実に綿密な実施案を作って、一つひとつ問題点をつぶしてゆく、まったく気の遠くなるような作業を、いとも軽々と進める、その手際の良さ。さすが起業家だなあと、ずぼらな一介のサラリーマンたる我が身を振り返って、嘆息したこともしばしばでした。

また、村上さんは絵もよくされました。桂工務店と商店建築社の総帥として、激務をこなすかたわら、アマチュアとも思えぬ絵をお描きになりました。私は、絵については全くの門外漢なので、これ以上の評はできませんが、私の勤め先の近所にある草土舎のギャラリーで、二度ほど拝観したことがあります。

ほかにも思い出せばきりがないほど、偲ぶ材料はありますが、最後に一つ。南烏山（世田谷区）のお宅にお邪魔した時のことです。玄関で案内を乞うとガーガーとなにやらにぎやかな叫び声がきこえます。それは、まだおとなになりきらないアヒルでした。

「区役所で、雛をわけてやるというものでね……」と、そのアヒルを眺めやる村上さんの目のやさしかったこと。

最後にお会いしたのは、祝壽の花束をさしあげた十二年前の「ふるさとの会」でのこと。うかつにも年月は移ろうものということを覚えずに、幽冥界を異にするとは……。

国内では最古、曲竜類の歯の化石発見

県立人と自然の博物館は、昨年10月に篠山市古市小学校の田中飛翔己君が発見した「曲竜類の歯の化石」について、「国内では最古」と発表した。篠山層群では、これまで獣脚類、竜脚類（丹波竜）、角竜類、鳥脚類の4種が見つかっていたが、今回の発見で5種類になり、「多様なグループが幅広く産出している。今後さらに新しく恐竜化石が発見されるかも」と同博物館の三枝春生主任研究員は話している。（平23・1・9）

バウムクーヘン専門店 木の根橋そばに開店

柏原町の空き店舗活用事業で、柏原町の商店街に「バウムクーヘン専門店」が4月に新規オープンする。木の根橋にかかる大ヒノキのすぐ近くに「まさゆめさかゆめ」が開店。地場産の原料（米粉、ジネンジョ、平飼い卵、牛乳）にこだわり、いずれも丹波市内の生産者から仕入れる。「大ケヤキにちなんで、年輪に見えるバウムクーヘンを選んだ。店舗は狭いが、日本中からのお取り寄せやテイクアウトの店を目指している」と、パテシエであり、副社長の葉山さん。（平23・1・27）

"丹波は空気がきれい" なでしこの澤選手

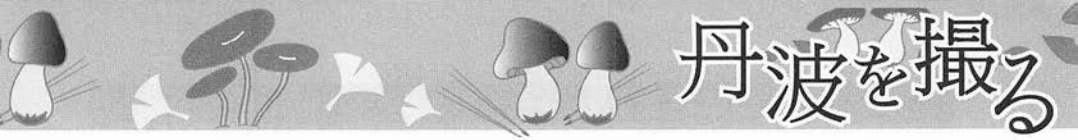
女子サッカーチーム「INAC神戸レオネッサ」は、市島町与戸の「アスコザパークTANBA」を練習拠点にしているが、このチームに、ワールドカップで優勝した日本代表の澤穂希（ほまれ）選手が所属している。澤さんはINAC神戸に移籍後は、しばしば丹波を訪れるようになったが、「丹波は空気がきれいで、ゆったりとした時間が流れている。地元の関係者の応援が大変ありがたい」と話している。「チーム結成10周年でもあり、タイトルにこだわって闘いたい」と述べた通り、5カ月後その結果を出した。（平23・2・27）

ヤマダ電機らが氷上町県道沿いに進出計画

大手家電量販店のヤマダ電機や九州に本社のあるドラッグストアチェーンが、氷上町の県道7号沿いに進出を計画している。両社とも、売り場面積が広く取れるなら（敷地1000坪以上、建物500～600坪）、近隣に既存の店舗があっても積極的に進出という。ヤマダ電機は1月末には地権者との土地貸借の仮契約を交わした。（平23・2・27）

大型商業施設進出めぐり 市会と商工会が意見交換

大型商業施設・オリックス不動産の氷上工業団地への進出に対応するため、市会と商工会は意見交換をした。丹波市は「白地地域」で、県条例上では土地利用の規制がない。また土地利用を規制する市条例もない。商工会会長は工業団地に商業施設が進出した場合の影響を指摘し、「暫定的でも、土地利用の網かけを」と規制を創設するよう求めた。市議会は、「野放しでは丹波市の商圏つぶれかねない。よい方向へ持っていけるよう努力する」と締めくくった。（平23・2・27）



青垣町遠阪今出、熊野神社の裸祭 －1

撮影：徳田八郎衛

命の神
熊野神社由緒
鎮座地　兵庫県丹波市青垣町遠阪

御祭神　伊弉册命

熊野神社は、通称「今出熊野権現」ともよばれております。
昔伝には、亀山天皇（一二五九～一二七四）の時代、今の社より二㎞奥井尻谷（心知山ともいう）の神滝より滝と言う所へ紀州の熊野神社（熊野権現）から分霊を勧請し其の後長禄三年（一四五九）九月十八日現在の地に遷座す。故に今も「井尻谷より上がる山八分のところに岩のお洞があり、お社が祭ってあります。
命の神とも崇められ、往古は、遠阪・山垣・中佐治の三ヶ村はじめ神楽谷の四ヶ村（柴村）（兵庫県朝来市山東町）から也健康長寿を願う参詣が多かった。
現在においても、各地より病気平癒をご祈願に参詣される。
丹波市の指定文化財として、十一月三日に奇行される秋季例大祭（裸祭）、平安時代の作といわれる「木彫りの狛犬」一対、「石造狛犬」一対、明治の初も大工さんが寄進した「数理の額」がある。

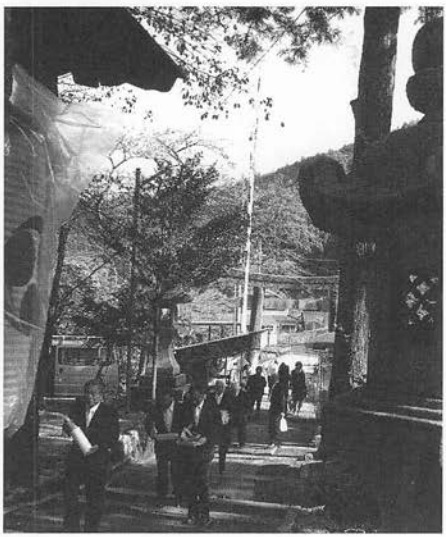
祭礼
一月一日　元旦祭
二月三日　節分祭
四月十八日　春季例大祭　桜まつり
六月三十日　夏越の祓・芽の輪くぐり
十一月三日　秋季例大祭　裸祭り

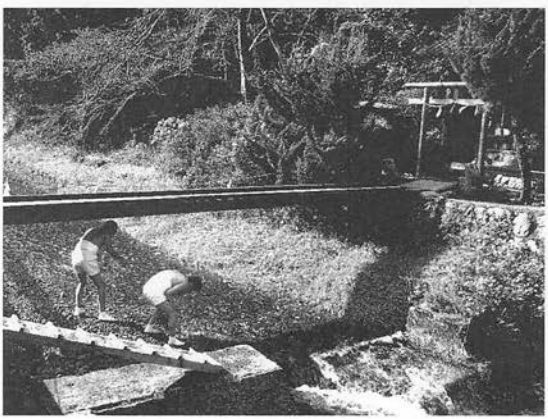
【裸祭り】
十一月三日の熊野神社秋季例大祭で奉納される。
昭和四十八年七月青垣町（現、丹波市）の無形民俗文化財に指定された。
奇祭から想像をうける人やうけた人がお礼祭りをする。
神事は、裸になり腰に晒しを巻き「ヨイサ」の掛け声明ましく、水浴と真摯な問を足踏み鳴らしながら七回半駆け足で往復し、続いて神宝奉持ち帰る。
この起源は明らかではないが、所作の中に「田踏み」を思わせるしぐさがあることからして鎌倉時代と考えられる。
裸祭り神事の後引続き「こけら御供」をやぐらの上から参拝者に撒き頒つ。
「こけら御供」
秋季例大祭を栗の木でつくった御神札一枚3センチ巾4センチ）に挟んだ「こけら御供」を授与としていただくと、除厄・風邪などに効き長生きするという言い伝えがある。

←昔の大祭は10月18日でしたが、今は11月3日です。かつては15歳の若者12名が注連縄を腰に張って素裸で奉仕したとか。

↓狭隘な谷間に広大な境内。最初は子供の相撲で盛り上げます。

↓お神酒も到着しました。



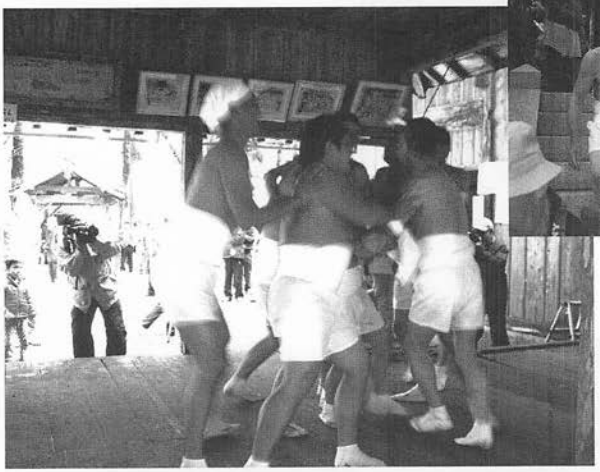


←裸祭の主役たちは、今出公民館で衣装（？）を整えた後、今出川の清流で禊（みそぎ）を行う（11月3日の冷水ですぞ！）。

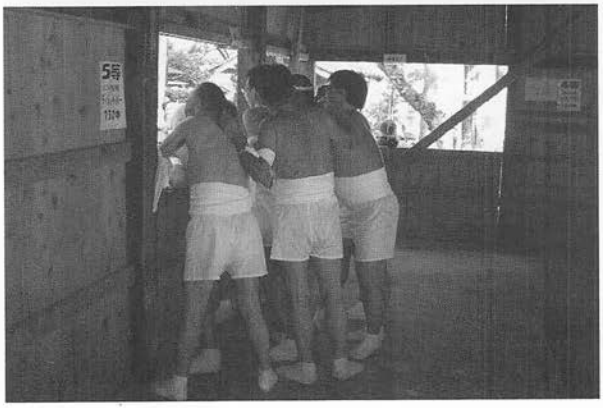
青垣町遠阪今出、熊野神社の裸祭ー2

←僅か８名ですが、元気よく本殿へ駆け登ってきました。

↓本殿と舞堂との間を７回往復。



←足踏み鳴らし、これが一番重要な儀式なのですが、解説がないとよそ者にはよく理解できません。鎌倉時代の「田踏み」に由来する動作だそうです。



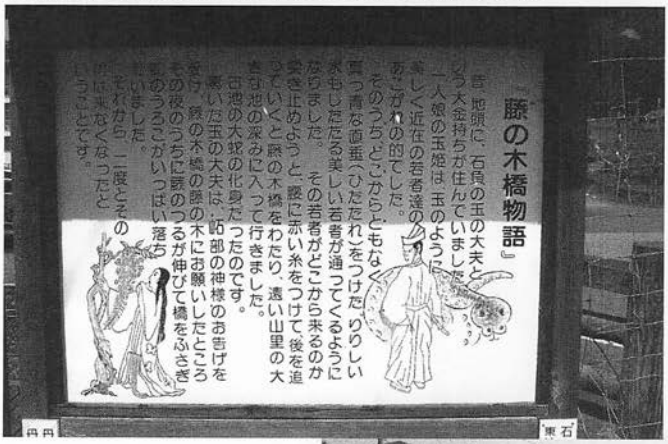
←「たんとカメラが来とる。まるでスターになったみたいじゃ」「そやかてカメラマンの方が多いというのは問題じゃ」「オーイ、そこの若い衆、安物のカメラ置いといて、裸になって上がって来ちゃないか」

氷上町石生の裏街道を往く－1

撮影：徳田八郎衛

氷上町石生の水分れ橋北詰で交わる国道175号線と176号線を石生の表街道というならば、ここで紹介する建物や地物は、失礼ながら裏街道の風景でしょう。だが今やシャッター通りと化した表通りよりも楽しい風景が見られます。

←国道沿いのバス停「領町」から山手へ上がると、立派な（だった？）工場が現れます。



←ここから北上すると、高谷川があり、これに懸るのが大蛇伝説の藤の木橋。

この下流には水分れ橋、上流には延喜式岐部神社や水分れ公園があり、遠方には向山連峰が見えます。国道が出来るまでは、この古道が黒井への街道だったのかもしれません。→

丹波を撮る

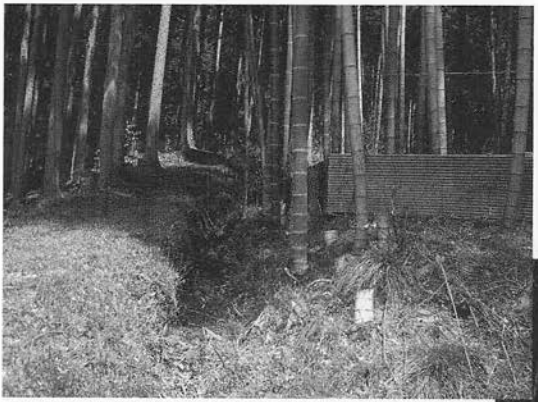
氷上町石生の裏街道を往く－2

←高谷川を越すと地頭集落です。桜のきれいな観音堂の前には、向山連峰への登山道入り口もあります。

↓茅葺の屋敷も廃屋もあります。

←ここは向山連峰から西へ張りだした扇状地です。コンコンと清水の湧く泉もありました。この道が黒井と柏原を結ぶ古道であったのなら、旅人は喜んだことでしょう。

氷上町石生の裏街道を往く―3



←写真ではよく見えませんが、向山連峰から鹿、猪が下って来るのを柵で防いでいます。おごる「竹害」に加えて獣害も深刻です（地頭）。

古代には出雲族の勢力範囲だった土地ですが、あちこちに熊野神社が見られます（北野）。→

←独裁政権が打倒された姿ではありません。東地区という表現を改め、以前の村名を復活させたのです（新町）。

←名前はグルグル替わりましたが、生郷交流会館として見事に再建されました。案内看板は２年前のままですが……（新町）

丹波を撮る

氷上町石生の裏街道を往く―4

←以前は石生駅には東口しかありませんでした。福知山線電化と駅の無人化に対応して西口が出来ましたが、正に裏街道。ところが今は逆転して表玄関に昇格（新町）。

柏原行きのバスも西口へ寄るし、イベントに応じたシャトルバスもここから発着。→

←きれいなトイレも中央分水界の通るまち「石生」のPRに努めています。

故郷づくり百年の大計

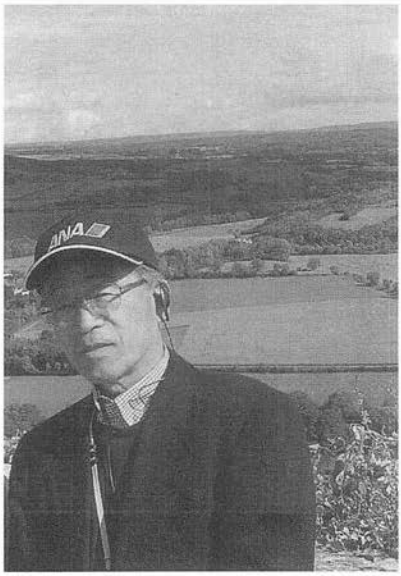
梅津浩平（柏原町）

平成二十二年版の「山ざる」誌を読んでみた。故郷の想い出を語る多くの方々の文章が郷愁を誘う。自分も柏原を離れて四十五年経つが、当時の甘酸っぱい想い出がよみがえる。苗代、かえるの合唱、ほたる、蝉の声、車も少なく、山まで緑の稲田が続いていたあの頃。しかし、今帰省してみると、昔と異なっている風景が広がっている。

この五月中旬に「フランスの田舎の美しい村を巡るツアー」に家内と参加した。新緑の季節、フランスのアルサスからブルゴーニュに至る村々は想像していた以上に美しかった。青い麦畑や黄緑の若葉のブドウ畑の中に臙脂（えんじ）色の屋根瓦に淡いベージュの壁の集落が突然現われる。数百年、あるいは千年に近い歴史をもつ村々が教会を中心にして昔の面影を残し、伝統文化を守りながら豊かな緑と共生している。

観光客も集めてはいるが、この村の産業は農業とワインであろう。その村に生まれ、育ち、あまり遠方にも行かず、数百年の昔と変わらない外観の村を愛してワイン作りや農作業で満足した一生を終える。こんな生活のイメージが浮かぶ。このような環境で一生を終えたいとも思う。

この村々と故郷丹波も含め日本の町や村の景観の違いはどこにあるのだろう。フランスの村には電信柱がない、広告板がない、家の色や形が統一されている。石の家には重厚感がある……。



フランス・ヴェズレーの丘にて

昔の柏原の町も黒い屋根瓦に白い壁や塀の武家屋敷が残り、農村部にも緑の木々の中に黒い瓦屋根と白い壁の集落があったが、近代化の名のもとに町や村は変わった。国道が走り、国道沿いには全国画一のチェーン店が並び、派手な広告が目につく。その一方、古い旧市街は寂れていく。

我々団塊の世代は貧しい少年時代だったかも知れないが、美しかった故郷の想い出をもっている。しかし、今の青年やもっと若い世代が高齢になった時に本当に懐かしみ、愛せる故郷はあるのだろうか？

美しく清潔な町や村。住んでいる人達が落ち着ける町。一生を暮らして満足できる町。このような町づくりのコンセプトは何十年も前からあり、行政も地域の人々も実現に努力をしてきたはずであるが、村づくり、町おこしは、日本では成功しているとは言い難い。B級グルメと月並みの町おこしのイベントだけでは短期的な盛り上がりで終わる気がする。日本の村で活気が溢れ、観光客で財政的にも潤っている所は多くはない。

町や村の将来は一時的な企画だけでなく、町や村の生活の基盤を何にするのか。何を産業の中心とするの

か。観光立村なら、外部から客を集める手段や客がリピータに成れるような特徴づけ、を百年単位の長期計画で考える必要があるのだろう。

毎年、数多くの日本人がヨーロッパを旅する。旅した人々が全て感じる西欧の町や村との比較論は「ヨーロッパは良かったね。美しかったね。日本は負けるよね」で終わる。日本は何故このような美しい村を作れなかったのか？　伝統文化を維持出来なかったのか？　将来は作れるのだろうか？　作るためにはどうすればよいのか？　と理論展開しなかったのが、日本の過去であり、現在である。

地形の差、資源の差、災害のあるなし。天から与えられた資産の違い、と理由はあるのだが、言い訳ばかりではあまりに悲しく、また今までの対処法では限界がある。百年後を睨み、地域の地理を活かし、過去の文化を伝えるだけでなく、新しい地域の文化も、これから計画的に創造して、長期計画で町や村づくりを行う必要性もあるのではないか。それには、その地域で満足して生活できる哲学がなくてはならない。特にこれからの子孫のためにも。

現実と理想との違いがあり、実際には現地での苦労があり、ことは机上で考えるほど単純ではない。しかし、目先の現実への対応だけに留まらず、国家百年の大計ではないが、数十年のスパンの計画で将来のために、子孫のために「ありたい町や村」「あるべき町や村の姿」を考える必要があるのではないかと思う。

みどり豊かな自然と、祖先から受け継いでいる遺産や文化を守りながら、その中で悠々と暮らせる人々はやはり羨ましいと思う。

（昭和22年、柏原町生まれ／元三菱化学執行役員・薬学博士／横浜市在住）

（いけばな・三觜拍洋）

柏原劇場の思い出

灰野悦昭（柏原町）

同級生のT君から、お前はすぐ側に住んでいたので柏原劇場について何か書けと依頼が来たが、柏原劇場についての思い出は印象に残るものは余りない。こう言うと誤解を招きかねないが、柏原劇場へ映画を見によく通ったとの思い出はないという意味である。

氷上郡出身の両親とともに柏原町本町へ大阪から家族で疎開してきたのは、私が五歳の昭和一九年（一九四四年）。それから高校三年の一八歳の昭和三二年（一九五七年）までの一四年間、柏原劇場のすぐそばに住んでいた。やぐら下に住んでいると、いわゆるビラ下という無料券をくれるのが当時あったらいしいが、それは貰っておらず、また中学・高校生時代は映画館・喫茶店へ行くことが禁止されていたので、柏原劇場へ頻繁に観劇に行った記憶はない。学校の推奨映画を年数回上映されて、団体で見に行ったぐらいである。ただ劇場の周りで良く遊んだ記憶はある。従って、映画館の側に住んでいたから大人になり映画好きになったとの多くの人たちの経験談とは違っている。

#

柏原映画劇場の建っていたのは、毎年二月の厄神祭りで有名な八幡神社のある八幡山の西の麓で、今は丹波市商工会柏原支所の建物がある場所。そこに柏原劇場（後に柏原映画劇場）があった。この商工会の建物は昭和六一年（一九八六年）に建てられている。柏原劇場はその数年前には取り壊されたのだろう。テレビの家庭への普及に従って映画を見に来る人が年々少なくなってきて、経営上成り立たなくなったためであろう。日本映画史概説を見ると、映画の最盛期は一九六〇年代までで、柏原劇場も同じ流れの中で推移して行ったものと考えられる。

#

私がそこに住んでいた時期は、戦後すぐからで、柏原劇場が隆盛期を迎える時期と重なっているように思う。断片的な記憶だが、終戦直後数年はお芝居が多く、何年か後で映画上映が主流になってきたようだ。確か

木造3階建て（？）の芝居小屋造りで桟敷席があり、正面を見て左側に花道があり、人力で動かす回り舞台もあったので、本格的な芝居小屋であった。戦後何年か後に、桟敷席の後方部分は硬い木製ベンチのいす席が設けられた。当時小学高学年だった時、何故か額縁ショウの踊りを見た記憶が残っている。素人の日本舞踊の発表会にも使われた。当時ラジオで人気のあった「二十の扉」の真似事のようなものもよく催された。「川上の赤バット、大下の青バット」の投稿をした記憶がある。勿論、こんな単純な題が採用されるはずもなかったが。

また素人のど自慢大会も盛んに開催された。空き家になっている実家へ時々帰省して当時を思い出すが、劇場前の広場で三角野球やドッジボールをして近所の子供たちと遊んだ。広場といってもちょっと幅広の道路のような狭い場所であった。隆盛期には広場の向かい側に来客用の屋根付の自転車置き場があった。芸人上がりのMさんが取り仕切っていて、確か駐輪料金を徴収していたと記憶している。夏休みの大学受験勉強中、開けっ放しの映画館の二階の窓から上映中の映画の音楽などがよく聞こえてきた。

#

このように断片的な記憶しかないので、この機会に柏原映画劇場の盛衰史を調べようと思い立ったが、地元から離れて住んでいるので、そう簡単に調べることが出来ず、結構時間がかかる作業となりそうだ。丹波新聞社のご好意で一部アーカイブスの閲覧をさせて頂いたが、今のところ終戦後からの数年しか見ることが出来なかった。今後機会があれば、さらに柏原劇場の歴史を紹介させて頂きたいと考えているが、今回は戦後数年の劇場のトピックスをご紹介させて頂く。

#

その前に、柏原劇場の成り立ちは……。

当時（昭和のはじめ？）柏原町商工会などが娯楽と文化の殿堂の象徴となる劇場を建てようとされたのだと思う。かかる本格的な芝居小屋なので、当時の関係者の意気込みが感じられる。町の古老のお話では、柏原劇場の敷地には以前、製材所があったと。そういえば劇場の東側に約五×二五メートルの池があったことを記憶している。用水池か貯木池に使用されていたの

かもしれない。

(1) 終戦後の柏原劇場は、昭和二二年には主として歌舞伎、演芸会、浪曲、舞踊会など映画以外の催しが主体で、柏原町同胞援護会や海外引揚者連盟などの主催での催しが多かったようである。

映画上映は、翌昭和二三年後半から頻繁になってきていた。「二十の扉」と映画との抱き合わせ上演が頻繁に行われていた。入場料は前売り券三五円、当日券四〇円の案内広告が新聞に掲載されている。五月には映写技師見習い募集の広告が出ている。一八～二三歳男女不問、月給一五〇〇円ぐらい（昼食付）。

また同年六月には農繁期で観客数が少ない時期に、劇場正面及び入口の改装工事を行った。柏原劇場の古風な面影は完全に消えて、劇場主の坂本真一さんの「福知山の映画館より新型にした」とのコメントを残している。終戦直後の混乱から落ち着きを取り戻しつつあり、映画を楽しみたい観客が増えてきたと思われる。

昭和二四年夏には大規模な内部改装工事を行った。映写室を一階から二階へ移設、最新映写機を装備し、客席もいす席の和洋折衷にして収容人員を六〇〇人から七五〇人に増やした。翌二五年正月からドイツ製の映写機を導入して阪神の一流封切館に劣らぬ設備を誇っていた。これから約二〇数年間、映画の繁盛期を見ることになる。柏原町及び近郷にお住まいの昭和一桁生まれの方には懐かしい思い出があるのではないだろうか。因みに、昭和二三年の主な上演映画をリストしてみた。

(2) 昭和二三年の柏原映画劇場での上演映画（邦画）

・5月＝「不死鳥」（田中絹代主演）、「懐かしのブルース」、「博多どんたく」（坂東妻三郎）、「愛よ星とともに」（池部良、高峰秀子）

・6月＝「春の饗宴」（池部良、轟夕紀子）、「今ひとたびの」（高峰三枝子）、「木曽の天狗」（坂東妻三郎、花柳小菊）、「酔いどれ天使」（三船敏郎）、「親馬鹿大将」（柳家金語楼）

・7月＝「手をつなぐ子等」、「時の貞操」、「青空に踊る」、「ミス京都楽団」、「大学の門」、「タヌキ戦士登場」（エンタツ、アチャコ）、

・8月＝「あの夢この歌」（東宝作品）
・9月＝「金色夜叉大会」、「西遊記」（長編マンガ）
・10月＝「平和への先駆者」（尾崎行雄自伝作）

(3) 昭和二三年、洋画が入ってきた。
・6月＝「謎の下宿人」、「わが道を行く」
・7月＝「荒野の決闘」、「アメリカ交響楽」、「晴れて今宵は」（フレッド　アステア）
・8月＝「ブルックリン横町」、「カルメン」、「西部をかける恋」（ジーン・アーサー）
・9月＝「奥様は顔が二つ」（グレタ・ガルボ）、「極楽お家騒動」（ロール・ハーディー）、「再会」（シャルル・ポアイエ）、「風を起こす女」（ロザリンド・ラッセル）、「ターザン」
・10月＝「民族の祭典」（万国オリンピック映画）、「ブームタウン」（クラーク・ゲイブル）、「失われた週末」、「恋愛手帳」（ジンジャー・ロジャース）

(4) その他特記すべきイベントとして、当劇場で昭和二三年七月一〇日に「北陸震災義捐金募集の映画と舞踊の会」が開催された。前売り券二五円、当日券三〇円で、一八一八人の集客を得て、約三万五千円余りの義捐金を震災先に寄付したと報告されている。主催者・観客の熱意が感じられる。

昭和二四年四月に「鐘の鳴る丘」、一一月に「青い山脈続編」などが上映され、一二月には「高田浩吉劇団」が来演した。昭和二五年一月に「悲しき口笛」（美空ひばり）、二月に「野良犬」（三船敏郎）、三月には「暁の脱走」（池部良、山口淑子）が上映され、映画時代の到来を予感していた。

#

日本映画史概説によれば一九四五年（昭和二〇年）から一九五二年（昭和二七年）まではＧＨＱの下部機関のＣＩＥ（民間情報教育局）による検閲があり、時代劇は製作出来ず自由な映画作りが出来なかった。

柏原映画劇場の隆盛期に向かうさらなる歴史について、機会があれば調べてお伝えしたいと思う。

（昭和14年、柏原町生まれ／元・日商岩井㈱（現双日㈱）勤務／川崎市在住）

軍歌からリンゴの歌へ（続編）

丸川　健三郎（市島町）

前回（「山ざる」41号）、軍歌にまつわる思い出話を少し書いたが、それから後でも、その当時のいろんな事が思い出されて、止めどがない。あの終戦前後というのは、我が国にとっても特別の時代であったので、些少のことでも記録に留めておく価値があるかも知れない。そう言う思いから、この続編を書くことにした。

なお、終戦の年、私は小学三年生だったが、この年頃は一番よく軍歌を歌った年頃だったかも知れない。従って、私も軍歌を懐かしがる世代に属するが、懐かしいと言う感情は善悪の判断とは自ずから別である。

＊戦争を歌った子供達＊

数年前のことだが、テレビで「戦争を歌った子供達」という番組を観た。私がよく歌っていた歌も出てきて懐かしいものだったが、思いがけず、子供のときに恐怖を覚えた歌にも出くわした。次に記すのがそれである。なお、前回にも書いたことだが、日本の軍歌の歌詞には「死」を思わせる文言がやたらに多い。既に死がどう言うものかを知り、死の影を敏感に感じとる少年になっていた私は、このような軍歌の文句にも怯えたのだった。

「勝ち抜く僕等小国民」
（作詞・上村数馬　作曲・橋本国彦）

今日増産の帰り道
みんなで摘んだ花束を
英霊室に供えたら
次は君等だ分かったか
しっかりやれよ頼むぞと
胸に響いた神の声

これは五番まである歌詞の中の四番である。他の部分はだいたい忘れていたのだが、恐怖心を抱いた所為か、この四番だけは今日までしっかりと覚えていたのだった。英霊室は学校の中のどこかにあって、その部屋の祭壇には卒業生か学校関係者で出征し、戦死なさった方々の位牌が並んでいるのであろう。厳かな雰囲気の部屋のはずである。そこへ花束を供える生徒達

は、勤労奉仕の農作業からの帰り道なのである。位牌に向かって手を合わせたときに、どこからか神の声が聞こえてくる。歌詞の言いたいところは、「お国のために戦場へ出て、しっかり戦って欲しい」と言うことなのだろう。しかし、私には「次に戦死するのは君だ」と指名されているように感じられた。やがて大人になれば、出征することになるだろうが、戦死し、英霊になるという運命から逃れられないと感じて、ぞっとするような恐怖に捕らわれたのである。

いま読み返して分かったことだが、この歌は他の部分も言葉使いが少々荒っぽい。例えば一番の歌詞の出だしは次の様である。

勝ち抜く僕等小国民
天皇陛下の御為（おんため）に
死ねと教えた父母（ちちはは）の……

この歌が作られたのは戦争も末期で、歌を作る人達にもゆとりが無くなっていたのかも知れない。いくら戦争中だと言っても、自分の子供に「死ね」と教える父母がいるはずもないが、この歌を私に教えたのは間違いなく学校（当時の国民学校）であり、学校教師であった。

＊軍神＊

教科書に載った歌は軍歌と言うよりは軍国唱歌とでも言った方が良いのかも知れない。それはともかく、軍歌的な唱歌はどの学年の教科書にも、必ずいくつか存在した。例えば次のものである。なお、私はこの歌を学内の音楽発表会で上級生が歌ったのを聴いている。勇壮なメロディーと印象的な歌詞が気に入って、たちまちに覚えてしまった歌であった。

「特別攻撃隊」（国民学校五年生用教科書による）

ああ大東亜聖戦に
水づく屍（かばね）と誓いつつ（注）
先駆け散りし若桜
仰げ特別攻撃隊

ここに示したのは歌の結び、五番の歌詞である。さすがに教科書だけあって、先ほどの軍歌よりは言葉遣いが上品である。しかしながら、戦死を賛美していることに変わりはない。ところで、この歌で扱われた特別攻撃隊は太平洋戦争の緒戦、つまり、昭和十六年

十二月八日のハワイ真珠湾攻撃に参加した特殊潜航艇五隻のことである。戦争末期になると、飛行機による神風特別攻撃隊が現れて、そちらばかりが注目されることになるが、それまでは特攻隊と言えば、こちらの五隻のことであった。

それはともかく、特殊潜行艇は一艇につき二人が乗る小さなもので、大きな魚雷を二本積載しているものの、航続距離は水中で数十㎞程度と短かった（フリー百科事典「ウィキペディア」による）。このため、目的地近くまでは潜水艦の甲板に固定される形で運ばれた。攻撃の後には潜水艦に帰還することになっていたが、その帰還は航続距離からしても極めて困難なことであった。このときの出撃においても全艇が敵の攻撃の下に失われた。乗組員の兵士のうち九名は艇と運命をともにしたと認められ（一名は捕虜になったことが判明）、それ以後、九軍神として讃えられることになった。上記の歌は勿論、その軍神を讃えるために作られたものである。

よく知られているように、このときの真珠湾攻撃は、日本海軍が総力を挙げて戦ったと言えるほど大規模なもので、アメリカの戦艦五隻を撃沈、四隻を大破するなどの大戦果を挙げている。この戦果の大部分は飛行機からの爆撃や魚雷投下に依っているのだが、戦艦「アリゾナ」の撃沈だけは特殊潜行艇からの攻撃の結果だったと発表された。この功績は多くの人からの賞賛を受けるところとなり、乗組員についての伝記風の小説も書かれた（獅子文六著『海軍』昭和十七年刊、中公文庫にて平成十三年再刊）。しかし、この特殊潜航艇の戦果については当時から疑問視する見方があったらしい。さらに最近では、新しい資料や調査結果があって、それは完全に否定されているようである。現在、「アリゾナ」号は真珠湾の底に沈んだままの形で保存されているが、その船体には魚雷攻撃を示すような痕跡は見当たらないらしい（「真珠湾の謎―悲劇の特殊潜航艇」、ＮＨＫ二〇〇九年十二月六日放映）。

上に述べたように、特殊潜航艇の攻撃はほとんど生還の可能性の無いものであり、実際、その通りになったのだが、このときの海軍省からの発表には、「帰還の如きは敢えて其の念頭に無かりしものと断ずる外なし」との文言がある（小説『海軍』による）。帰還し

なかったのは、潜航艇の性能のせいではなく、乗組員の判断の結果と言うのであろうか。この種の潜航艇による作戦はその後も続けられたが、さらに戦争末期では、敵艦に体当たりするタイプの特攻艇も使われ、数百を超える若い兵士の命が失われることとなった。飛行機による特攻隊の場合にはさらに多数の命が失われている。これらに参加した兵士はすべて志願によるものだと報道されているが、志願はどのようになされたのだろうか。「志願者は申し出よ」と告げられたときの若者達の苦悩を思い浮かべると、胸が痛む。

＊学校教育の戦中戦後＊

軍歌の歌われ方は世代や地域によって大きな差があったようである。私は昭和二十年六月に徳島市から丹波地方の鴨庄村に引っ越して来たが、鴨庄村の子供達の間では軍歌はあまり歌われていなかったように思う。また、鴨庄では、徳島で経験したような空襲警報や、防空壕への避難や、防火訓練などは無かったが、その代わり、いろんな勤労奉仕があった。村の外れの荒れ地、柏野（かしわの）の開墾や、農家への農作業手伝いなどであるが、ほとんど役に立たない低学年の私でも参加することは求められた。

しかし、やがて八月の終戦を迎えて世の中は変わった。よく知られているように、教科書の中の不適切な個所、軍国主義的な個所は墨を塗って削除することになった。教科書以外でも、軍事教練的なものや、勤労奉仕的なものがなくなった。そして「軍歌」は去り、「リンゴの歌」などの流行歌が歌われる時代へと移った。そればかりではない。政治社会体制も大きく変わったので、私が戦地へ出征し、「英霊」になる可能性もすっぱりと無くなったのである。

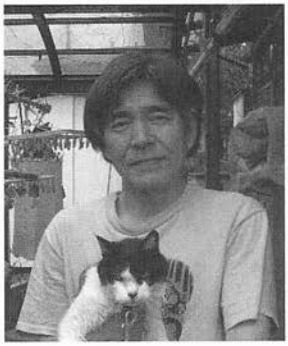
＊

終戦から既に半世紀以上を経過した今日、再び憲法改正の論もちらほら聞こえてくる。私はここでとくに軍備不要論などを唱えるつもりはないが、しかし、戦死を賛美するような教育、特攻隊をたたえ、若者がそれに志願するように仕向けるような教育だけは、今後とも絶対に永久に御免蒙りたい。

（注）戦時中に準国歌として扱われた曲に「海行かば」があるが、その歌詞に「海ゆかば水づく屍山ゆかば草むす屍大君の辺（へ）にこそ死なめかえりみはせじ」とある。

古本屋になった山ざる

前川　芳之（篠山市）



私は多紀郡（現篠山市）丹南町南八代（福知山線の無人駅）で育ち、地元中学を卒業して昭和四十七年に柏原高校に入学しました。二年生の初夏に病をえて（ウィルス性肝炎）一年留年し昭和五十一年になんとか卒業できました。七ヶ月ほど柏原病院に入院している時、同棟、同室の方が何人か亡くなられ、少なからず衝撃を受けました、入院するまでの私は、何事にも積極的で全力投入するタイプでしたが、退院してからは肩の力が抜け、時々虚無感を感じるようになり、それは今でも続いています。そんなこともあり、学業はダメで、いつも上位の人たちを支える役目でした。柏原高校時代の私は陰鬱な気持ちで毎日を過ごしていました。

その後、大阪で学生生活を送りますが、アルバイトがない時はもっぱら古本屋回りをしていました。一人で本を読むことも好きでしたが、古本を買ったり売ったりするのも面白かったです。もし、できるなら将来は古本屋になりたいものだと思ったりしました。

しかし現実はそれを許さず、私は大阪でサラリーマンになります。東京への転勤、転職を経て三十一歳の時、好機が訪れ、エイッとばかりに古本屋になりました。自営業になった私は、全てのことを自力で解決しなければなりません、必死にもがく内に商売の方もなんとかメドがつき、ようやく私は自立できたように感じました。

今になって、留年のおかげで二年分の同窓生ができたことを誇らしく思えるようになりました。

#

商売柄、毎日雑多な書籍に巡り合います。記憶に残る古本から丹波に関連したことを次に記してみたいと思います。

私の高校時代、柏高出身の有名人といえば芦田均（元首相）、佐々木恭介（近鉄球団）でした。地元出身の教師もよく口にしてました。ところが、数年前「大西瀧治郎伝・昭和三十二年非売品」を入手したとき初めて柏原中学の先輩だと知りました。大西中将が「特攻生みの親」であることは知ってましたが、まさか丹波出身だとは意外でした。素朴で純朴なイメージが強い丹波人に、こんな苛烈な人物がいたとは……。私は納得できず他の文献を何点か調べますと、特攻思想は大西中将のオリジナルではなく、最初はむしろ反対の意見であったこと（特攻は統帥の外道）、その後、戦況が決定的に不利となり、「勝てなくても負けない」戦争を目指し、下からの特攻進言を制度化したものだとわかりました。たとえ大西中将がいなくても特攻は行われたと思われます。終戦の翌日の未明、割腹自殺しながらとどめをさざず、十数時間悶絶を続けたところに丹波人の最期の愚直さを痛感しました。

当時の海軍は、日露戦争の日本海海戦でバルチック艦隊を破って以来「大艦巨砲主義」でしたが、海軍随一の飛行機通だった大西中将は航空機による戦闘を目指していました、今から思えば合理的で先見性があっと言えます。ポツダム受諾以後も徹底抗戦を主張しますが、そこには「（精神的に）国と日本人を滅ぼさない」彼なりの考えがありました。

決して飾らず、上にもズケズケ進言し、合理的思考のできた大西中将も当時の時流思想の中にいました。国家について、根本に立ち返る哲学的思索ができたなら、彼の生涯もまた別の歩みを見せたことでしょう。丹波人に限らず、既存の価値を疑ってみることはなかなか容易ではありませんが、今後はそれが必要だと思われます。私も今年、大西中将の享年と同じになり、先輩への感慨もひとしおです。

#

次は、「青山通り」について。

丹波出身者は、東京青山の地名は江戸時代の丹波篠山の殿様（青山氏）に由来していることで少なからず「田舎者」コンプレックスを解消したのではないでしょうか？　私も子どもの頃からそう聞かされていました。

ところが、ある日入手にした書籍によると、篠山青

山氏の江戸屋敷は今の万世橋の近くにあったと記されているではありませんか。先ごろ取り壊された交通博物館の隣辺りです。そこで調べてみると、青山通りの青山氏は岐阜県郡上の青山氏（篠山とは姻戚関係）であったと判明しました。

故郷を訊かれ、私が「丹波篠山」と応えますと、何も知らない人はポカンとしてますが、少し地理歴史に詳しい人は明智光秀と波多野氏の攻防を挙げます、でも総じては田舎の代名詞として記憶されているようです。また、一部のマニアックな人に言わせると山の民であった「サンカ」の故郷として丹波篠山を思い出すそうです。これは三角寛による一連のサンカ小説のせいだと思われます。

#

もう十年も前、私は三田でレンタカーを借りて丹波入りしました。東日本の山々に較べると丹波の山は丸く穏やかに見えます、東より西日本の方が土地が古いためらしいですが、気持ちも穏やかになります。これからも静かで平和な土地であり続けて欲しいですが、ひとつ気がかりなのが、福井県の原発です。今年三月の福島原発で一発大逆転を食らって以後、唯一の心配事です。純朴・素朴だけではいつ危機に陥るかも知れません。世の中の動きに順応するばかりではなく、時には批判的な見識を持つことが大事な故郷を守ることになるようにも感じます。

加古川を別名「氷の川」と呼び、その上流にある氷上郡は教育郡でもあります。学業を成就され社会で活躍される人材も多いですが、時には自分の立ち位置を意識され、故郷の丹波を、さらに国と日本人の安寧を考慮して頂けるようお願い申上げます。最後は少し大袈裟になりましたが、関東で奮闘されている丹波人の皆様のご健康と活躍を願ってやみません。

（昭和31年、多紀郡丹南町生まれ／現・古本屋「ねこや」
〒350―1151川越市今福1024―26☎049―257―5780／ホームページ　http://www5d.biglobe.ne.jp/~furuneko/）

「山ざる」41号を読んで

岡原東光（柏原町在住）

山梨在住の叔母、鈴木和栄（柏女四四回）からの電話で、「山ざる」41号が出た旨の連絡を受け、早速、谷書店より取り寄せて一読、そこには旧柏中四八回、高一回の懐かしい同級生の名が見いだされ、ともに傘寿に達したことをしみじみと実感、ご同慶の至りと存じますと共に、諸兄ますますのご健勝ご多幸を祈念致す次第です。

また、ページを繰っていきますと、徳田八郎衛氏の市島町前山地区の写真と記事「丹波を撮る」が見いだされ、叔母が購入を勧めた意図の一つが判明した思いを持ちました。

実は私、写真にあります大原神社、折杉神社の宮司を務めています。祖父の代から数えて三代目ですが、祖父は旧柏原中学にて大正末期から昭和八年ごろまで教職にあり、退職後、戦時中の神職不足の状況下、老齢にもかかわらず、請われて神職資格を取得、昭和十五年、旧前山村（市島町徳尾）大原神社宮司に就き、また父も旧中二二回卒、晩年に宮司を継ぎ、私も教職のかたわら、父の没後すぐに宮司に任命され、既に三十年を超えました。今回、徳田氏により貴誌に取り上げていただいたこと、まことに嬉しく光栄に存じます。

また、荻野巨舟氏の「柏中34回生の思い出」の文中54ページ下欄11、12行に出ております「岡原尭鉄」とあるのは、まぎれもなく我が祖父のことであり、自他共に許したその見事なまでの光頭は、しっかり「多少見劣りはしますが」と私が受け継いでおります。ただし、遠坂出身と書いてありましたが、市島と誤認されたのかもしれません。ただ出身に関しては、実は肥後熊本の出で正真正銘、純粋の肥後モッコスであります。53ページ上欄10行目の「教諭陣も全国的でした」とありますように、祖父も熊本の旧制中学から福岡県、山口県、和歌山県、兵庫県等転勤を重ね、教員生活の最後を旧制柏原中学で締めくくり、卒寿を迎えて丹波人になりきって帰幽いたしました。

私が早大在学中の昭和二十六年か七年であったと記憶しますが、郷友会が東京駅ステーションホテルで開かれ、おずおずしながらはじめて参加させていただき、政界の雄であられた芦田均先生のお話を直接に聞く機会を得、大きな感銘を受けました。その席上、出席者それぞれが自己紹介の時、私などへどもどしながらやっとの思いでしたが、小田富士夫氏（高二回）が、鍛えた弁舌で実に堂々たる自己紹介、挨拶をされ、周囲にホホーといった称賛の雰囲気が漂ったことなどを懐かしく思い出します。

愚弟、岡原裕泰（高十一回）がフジテレビを退職し、神職の資格取得、所沢神明社に権禰宜としてご奉仕、三年前病気にて帰幽いたしましたが、その前年でしたでしょうか、貴誌に彼の原稿が載せられていたのを読むことができましたのも、うれしい思い出の一つであります。

現在、関東には埼玉県加須市に妹、足立敦子（高十六回）、私の長女、前園雅子（高三十二回）が横浜、港南台に居住していますが、郷友会の話題を聞かされたことがない状態ですので、ぜひ参加させていただくよう働きかけてみたいと思っています。

駄文を弄しました。お許しいただきたく存じます。

末筆ながら、貴会ますますのご盛栄と会員諸氏のご健勝ご多幸を祈念申し上げます。

懐かしや丹波の自然

中江悦子（柏原町）

十六年前に阪神淡路大震災の惨状を見つつ、胸塞がれる思いだったのに、又しても東日本大震災の惨状を知ることとなり、地震国日本の宿命のなのかと思いながら、地球時間だと十六年というのは直ぐだったのでしょうか。七十年近い人生で二度も大災害を経験しながらも、我が身には災難も降り掛からず、少々怖い思いもし、身内の安全にも気遣いながらも、いつものように穏やかな日を送らせて頂いており、災害に遭われた方々にはお見舞いを申し上げつつも、何かに感謝したい気持になります。

一瞬にして生命、家族、財産を地震や津波で失い、そして洪水・台風等の天災の繰り返しに、長い歴史の中で人々は無常観を持つようになったのでしょうか、日本人は諦めが良いというか、独自の感性が育くまれたのかと思いを馳せています。振り返れば穏やかな丹波地方に生まれ育ち、冬には校庭で雪合戦、休み時間には陽当たりで押しくらまんじゅう、軒先の氷柱も二〇、三〇センチ位になることもある寒さながら、炬燵か火鉢で暖をとるのみ、便利なガス調理器具もなく、おくどさんでの火起こしなど、昔の人は（母を見ていて）大変だったな、と今思えば懐かしさも募ります。

春には、童謡に「朧月夜」という曲がありますが、その歌詞は丹波地方の景色を歌ったものかと思うほどで、夕方から出る霧にすっぽり包まれていく町を、窓からよく眺めていたものです。

夏には蛍狩り、縁台で団扇をハタつかせながらの夕涼み、井戸水で冷やしたまくわ瓜、夕方には、蜻蛉が群れをなしてスイスイと飛んでいて、その中に手を差し出していると、鬼ヤンマかな、手に当たって一瞬かまれて痛かった。

小学校の校庭での映画会。トラックに乗せて貰って（今じゃ出来ないけれど）、成松の花火大会に連れて行って貰って、仕掛け花火が綺麗で、その迫力に歓声を上げていた。

また盆地特有なのでしょうか、夕方の雷の凄かったこと。音（ガラス戸が震えていた）、稲妻、それ以降そんなに迫力のある雷雨は知らないような気がします。子どもの頃、土砂降りの雨の中、番傘を差しながら、お寺の軒先で人を待つ間、あまりの降りで傘の役目をなさずズブ濡れになり、心細い思いをした思い出があるのですが、さて、誰を待っていたのかを思い出せません。（余分に一本傘を持っていたので、人待ちには違いないのですが……）

秋は収穫の時期、栗、枝豆、松茸等々がありますが、運動会の昼食に家の者と食べる枝豆ご飯のおにぎりの美味しかったこと！　竹の籠を背負って、子どもながら松茸狩りに一緒に連れて行って貰い、それなりに沢山穫れて少し自慢気でした。その反動ですかね、その後は豊作の話をあまり聞いた覚えがありません。よく穫れてたとはいえ、子どもの口に入るのはくず松茸（笠

の欠けた部分とか）と昆布の佃煮。それでも香りが良くて、鼻腔をくすぐったものですが……。

今、時々口にするのは輸入もので（国産の松茸は高くて、当然口に入らず、どころか手に入れることも出来ません）香りもなく、歯触りもなく、がっかりで、一生分を子供の頃に食べたのだ、と妙に納得するしかありません。

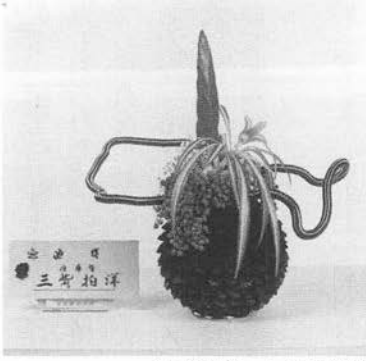
書き切れないほど、丹波の自然の恩恵を受けていたのだと、今になってつくづく感謝ですが、若い頃は田舎の窮屈さから逃れたくて、進学も、結婚も、その術で親許から当然のように離れていき、夢中で東京・大阪での生活を送って来ました。それなりに楽しく、疲れ知らずで頑張ってきて、人生の白秋から玄冬の時に突入しつつあり、平凡な人生でありながら、身の丈に合った幸福と、これからの長くない残りの人生を、あまりくよくよすることなく、〝鈍感力〟でストレスをストレスと感じず、少欲で静かな人生を閉じられればと思うこと頻りです。

これを書くことに、ためらいがありましたが、良い機会と捉え、思い出を少しばかり綴ってみました。孫達とも離れて暮らしていますので、子供の頃の話、とりわけ丹波の良さを話す機会等もなく、自分の成り立ちの基礎、バックボーンを語ることもせず来ました。

この先、孫達とどのような話しをし、接していけるか、楽しみでもあるのですが……。

この先の日本という国が未曽有の困難をどう乗り越えていくのか、若い人の肩にかかってきます。どうか良い国に生まれたと思えるよう祈りたいですね。私は日本人で良かった！

（昭和17年、柏原町古市場生まれ／専業主婦／東京都板橋区在住）



（いけばな・三觜拍洋）

庭上の一寒梅

大野義昭（山南町）

庭上一寒梅
笑侵風雪開
不争又不力
自百花占魁

「庭前の寒梅が、寒さに耐えて花を咲かせたのに思いを寄せての作。わが庭の一寒梅は、従容風雪に耐え花を咲かせた。争うことなく、また特に努力することなく、それでいて自然と百花の魁をしている。辛苦に処するには、まことにかくありたい。」が大意とある。（新島襄作『新編和漢名詩選』みづほ出版㈱）。勤めを離れ、自分は如何であったかと内省しつつ、この意に想いを巡らせる昨今である。

◆企業での四十二年

親会社本社での合同入社式以来四十二年余勤務の関連企業の顧問を二〇一〇年六月に退任した。入社時、寮同室は柏高四年先輩、隣室は五年先輩、又、当時海外駐在中の三年先輩もおられた。この三年先輩の方は親会社で経営トップの重責を担われている。大学の就職課の紹介で入社したが、心強いスタートで人の縁の不可思議さを想った。営業経験豊富な商社出身の上司の指導の下、一貫して海外部門を担当し、良き先輩にも恵まれた。

四十二年間を振り返ると、一九七一年のニクソンショック、一九七三年の主要国の変動相場制への移行・第一次オイルショック等を経、一九七四―一九七八年のハンブルグ駐在時代には多く内外の知己を得、幾人かとの交流は今も続いている。一九八〇―一九九〇年代初頭、アジア経済急成長期にトップに随行して、アジア諸国・オセアニア地域、欧米に度々出張し、ビジネス拡大に東奔西走、この間、一九八九年ベルリンの壁崩壊、また大手商社の案内でゴルバチョフ大統領の下、ペレストロイカ推進中に訪問したソ連邦も一九九一年に崩壊し、東西冷戦時代は終結した。一九九七年のアジア金融危機、一九九九年の欧州統一

通貨ユーロ誕生があった。技術知見、海外経験豊富なトップや外為業務に精通した上司のもと、二〇〇〇—二〇〇五年には東京・香港でのDisney Projectに取り組み、香港Disneyの敷地内で台湾人、香港人、中国人、日本人の混成チームで親会社の関係台湾企業と共同で運営のwork shopに度々出向きDisney米国本社の現地施工管理責任者と折衝を重ねた。その間、中国各地に足を伸ばし、市場開拓に腐心した。

二〇〇八年夏のリーマンショックからの立ち直りのため、その年秋から二〇一〇年前半は西アジア・中東・アフリカ地区の市場開拓等に努め、新興国経済の成長の中、市場の拡大と多様化で急激な需要回復と、諸先輩時代からの各国の代理店との良好な関係にも恵まれ、比較的早期に回復し、後に残る人達に襷を渡すことが出来た。

オランダ、ドイツの取引き先にて

入社四年目の販売合弁会社設立時、事前交渉でハンブルグ、アムステルダムのパートナー企業訪問時の写真である。商社出身の上司を通じ、親会社の社長に随行する機会に恵まれ、警咳に接し、「取引先との関係も、信頼関係をベースとした人間関係を基本に置くよう」薫陶を受け愚直にこれを実践して来た。このハンブルグ企業との取引は今も継続している。

順風満帆とは言えないが、経済環境が激変するなか、企業の一員として四十二年余、一企業で働けたことは、企業の現状を見るに、それなりに実りある企業人としての時期を送ることが出来たかと感謝している。

◆故郷の山南町上滝

十歳上の兄、神戸の叔母夫婦の養女となった七歳上

の姉、面倒見の良い四歳上の姉に続き、父桃太郎、母なつゑの四人兄弟の末子次男として、一九四四年八月に生を受けた。祖母ふでは、多くの諺を暗記しており、「上滝には過ぎたるものが三つある。薬師の鐘に、たぎの豆腐、まだも過ぎたる〝りす〟のかか」と言っていた。

祖母の解説では、第一の薬師の鐘は上滝説宗寺の鐘である。二〇〇六年の丹波竜発見に先立つ二〇〇五年三月、同寺境内で龍の形の龍魂石が発見された。昔の鐘は戦時中に供出され、檀家の手で立派な鐘楼が再建されている。第二は、実家は約一〇〇年余兼業で豆腐屋（一九七〇年頃廃業）を営み、たぎさんの豆腐の味は格別であったらしい。正月、盆、秋祭には家族総出で豆腐を造り、私も父の後から自転車の荷台に父手製の豆腐運搬箱を乗せ配達していた。第三は、利助さんと言う方が、稀に見る美人の妻を娶られたと言うことのようである。

父（前列中央）と上滝の同級生

父の上滝同級生は、各家持ち回りで夫婦での同級会を開き、旅行にも行っていたようで、写真前列中央のマント姿が父、その右隣が兵庫県会議員、山南町長を勤められた友井さんで、同氏が町長の時、上久下地区の一部がダムに沈没という話が出た折、責任を持ち阻止すると言われ、地域の人々は安堵した。昨今の震災後の混乱を見るにつけ、政治や地方自治で上に立つ人は斯くあるべしと思う。父の同級生のご子息に兄と同年輩の方もおられ、親子二代続けてお付き合い戴いていた。

上滝子供会の水泳場のあった篠山断層の岩場で発見された丹波竜の話題で持ちきりの上久下地区や上滝を見る時、父が話していた先人の叡智を想う。

①農業用水路活用の上久下村営上滝発電所が大正年

間に設置され、一九六三年まで関西電力傘下で運営された。まさに地域振興の魁である。

②福知山線敷設時、篠山から鐘ケ坂を抜け柏原へのルート案もあったようだが、春は桜、夏はキャンプ場で風光明媚な上滝川代公園に沿い、急峻な山裾に線路を引き下滝、谷川に駅が出来たのは当時の地域の人々やリーダーの熱意で、山南町の多くは陸の孤島とはならなかった。鉄道は文化を運ぶ道でもあり、大切な資産である。

③実家は、谷合の山水を生活用水とし使用していたが、兄の時代に周りの一〇軒弱の家庭の共同生活用水（飲料水以外）として共用を始めた。

父は毎朝、新聞をよく読み、政治経済にも関心大であった。小柄ながら黙々と働き、初代として家業の桧皮業を興し、京都山間部の山林所有者や、京都の屋根師や寺社建築業者と友好な取引関係を作り、花を開かせた二代目の豊に引き継ぎ、現在三代目の甥、浩二が真摯に桧皮材料採取の仕事に加え、桧皮葺師として技を磨いている。

母なつゑは、綾部の「郡是（グンゼ）」に勤めたのち嫁ぎ、寡黙に働き昭和を生きた。母が私のドイツ駐在前に柏原八幡神社で求めてくれたお守りは、駐在時代の欧州諸国はじめ、アジア諸国、北アメリカ、旧ソ連邦、インド、ナイジェリア等も含め、ほぼ四〇ケ国への都合一八〇回前後の旅の安全を守ってくれ、今も持ち歩いている。

◆敬愛する兄、豊のこと

上滝山口神社に聳える巨大な古木千年杉の前に立つ兄と子供達の正月参拝時に私が撮った写真である。この神社の屋根は桧皮職人発祥の地に相応しく桧皮葺で、生前の兄によれば、当時区長の藤原さん等のご支援で桧皮葺が継続出来たようである。収穫祭には青壮年団の獅子が舞い、結構強かった私も参加していた小中学生の奉納相撲や餅撒きがある。

また、生前兄が案内してくれた柏原藩陣屋の玄関屋根の桧皮葺材料は兄が納入させて戴いたと言っていた。あと五―十年、「国の指定する桧皮採取技術保存保持者」として、長男、浩二や若い人達を指導しながら、人生を楽しみつつ暮らせるよう家族一丸となり、

入院以来三ケ月余看病にあたった。しかし、二〇一〇年五月に七十六年余の生涯を閉じた。菩提寺説宗寺での告別式にお参り戴いた約八〇〇人の参列者や、ご挨拶、ご弔電等を通じ、故人への心温まる賛辞や家族への励ましを聴きながら、浩二の関係の消防団員の方々の葬送敬礼に見送られ、故人も満足し彼岸に旅立ったことと思う。

兄と子供たち

自分に厳しく、六十年に亘り桧皮師として京都御所、大宰府天満宮、室生寺等、全国の多数の神社仏閣の桧皮屋根材を納入し、日本の伝統文化保存の担い手として仕事に誇りを持ち、後継者、浩二や多くの若い人達を育てた。厳しいながら情があり、進取の気象に富み、戦後の4Hクラブ活動を通じ、花卉栽培、養鶏、また当時流行のバイクやギターをいち早く購入したり、氷上郡の弁論大会で優勝したり、演劇、浪曲等と多芸・多才でロマンのある人であった。

一九九九年六月に「国の指定する保存技術保持者」に文部科学大臣より認定され、二〇〇九年十一月「旭日双光章」叙勲の栄に浴し、親族としても誇れる人であった。家庭人としては、三子を授かり、六人の孫を得て充実した生涯を送った。桧皮師として初代桃太郎、二代目豊、三代目浩二は出雲大社へ桧皮を納入させて頂けるようになり職人の系譜は継続し、文化財保護の仕事をさせて頂いている。

私には、①ドイツ駐在中に「君が選び、青春を賭けた仕事だ。悔いのない仕事をするように」と手紙を書いてきたこと、②役員就任時、会社勤めの経験の殆どない兄が「いつでも辞める覚悟でやるように」と責任を持って勤めるよう忠告されたこと等々が思い出される。

◆おわりに

この3・11の大震災に遭遇した宮城県金華山に近い島の網元の娘と縁あって丸の内界隈で出会い、結婚して三十年余になる。農耕民族の息子と度胸のある漁労民族の娘と、気質は違うが、良き幕賓であり、糟糠の妻として、仕事以外眼中に無かった私を支えてくれている。多謝！

人生は人との出会い、信頼をベースとした人間関係から成ることを強く想うこの頃である。多くの人達に支えられ、幾分でもお返しの出来る形で、世の中のお役に立てるような生き方が出来ればと考えている。

3・11の震災で亡くなられた方々のご冥福を祈り、被災地の復旧・復興の堅調な進行を祈念しつつ！

（昭和19年、山南町上滝生まれ／埼玉県三郷市在住）

丹波Uターン一年

足立　静雄（青垣町在住）

丹波に帰省してから一年余りになります。まだまだ、落ち着かない日々を送っています。

毎朝早く起きて、近くの野山を散歩していますが、丹波の良いところも悪いところも分からず、まだ半分は東京にいるような気分です。50年間いた環境記者会に、ところかまわず電話して、煩わしい人間だとの印象を与えているのではないかと、思っています。

丹波では夏祭りなど何かイベントがあれば、必ず見に行って丹波の雰囲気に早く溶け込もうと思っていますが、まだまだです。やはり50年余り住んでいた東京に強い親しみを感じるこの頃です。

丹波で生活しようと思えば、多くの人は田んぼを持っていることが基本になっていますが、その基本となる田んぼが私にはありませんので、丹波に溶け込んで生活するには相当の時間がかかるようです。

丹波市の図書館

徳田　八郎衛（柏原町）

本誌37号に記したように、転勤で丹波へ転入した人々の大きな悲しみは図書館の不備であった。これは水洗便所と同じで、一度その恩恵に触れた人には耐え難いものである。言い換えると、恩恵に触れたことのない人には理解してもらえない問題ともいえる。だから一億円ばら撒きのバブル期に至っても改善はなかった。

その頃、兵庫県の肝煎りで丹波の森公苑が誕生し、いわば氷上郡と多紀郡を代表する施設として「丹波戦国史」「久下村史」などの郷土史や行政・産業・教育・自然環境関連の資料が集められ、ここが郷土に関する図書館の役目を果たすのかと期待したが、同公苑の任務と役割が明確になるにつれ、生物や地学関連の図書しか陳列されなくなった。あの豪華な郷土資料は、どこへ移管されたのか、今も残念でならない。

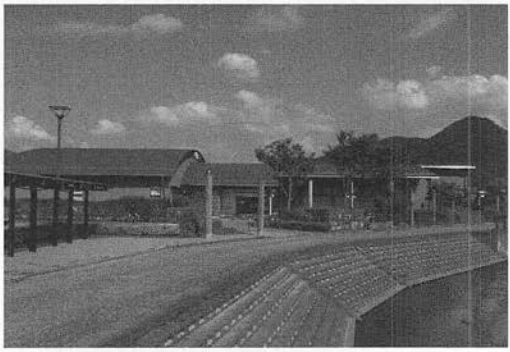
ところが、バブルも弾けた平成九年、氷上町は先進的な、いや、平成の世としてはごく当たり前の図書館を開設する。電子化されて検索も予約も容易になり、立派な施設も新設された。どの町でも、図書館というよりは公民館の一室を利用した図書室であったが、晴れて図書館と呼べる建物、いやシステムが氷上町に登場したのだ。財務当局や議会の説得に当たった十倉昭三町長と勝川浩幸館長の奮闘の賜物である。

氷上町・市島町以外の他町では、残念ながら「室」のままであったが、それが丹波市誕生で一転する。六町合併当時は「市役所をどこに置くのか」が大問題であったが、図書館については文句なしに氷上町図書館が中央図書館になった。他の町の図書館は、分館とは名乗らないが機能的には分館となり、共通の電算機システムで結ばれた。

今や全体の蔵書は三三万冊を超え、専従職員は一六名。その半分が司書というのは、都会では当たり前であろうが田舎では珍しい。中央図書館には六名、他の図書館には二名ずつの勤務である。主要な週刊誌、月刊誌や官報も読めるようになった。

これは、どこの図書館にも共通の悩みであるが、す

べての良書を購入する予算はないし、購入しても永久に保管するスペースがない。それらは県立図書館に期待することになる。ところが、丹波市図書館の場合は、郷土すなわち旧氷上郡に関する資料なら何でも集めている。「郷土資料」だけでなく「郷土の方の著作」という書架も設け、古くなっても県の図書館へ移管したりはしない。重複して入手したら中央以外の図書館で保管する。



中央図書館と書架

そこでシニア会員にお願いします。貴方の亡き後、所蔵されている貴重な郷土資料や「郷土の方の著作」はどうなりますか。配偶者やお子さんも丹波への興味を共有しておられるなら重宝されるでしょうが、そうでなければ単なるゴミとなります。是非ここへ、ご寄贈下さい。出来れば、ご生前に……。書籍の体をなさない生の資料の場合も、教育委員会にリレーしてくれます。住所と電話番号は次の通りです。

〒669-3602　丹波市氷上町常楽233

☎0795-82-7100

＊　＊　＊

本誌「山ざる」も全図書館から切望されています。第2号、3号など古いものはとびとびで在庫がありますが、31号以降は38号を除いて全くないのです。「市役所へ寄贈されているはずだから、それを貰って下さい」と伝えましたが、市役所にもないそうです。

〈寄稿者の連絡先〉
TEL：047-351-7567／FAX：047-380-1181
hatch.tokuda@nifty.com

大震災 被災地からのお便り

関東氷上郷友会では柏陵同窓会東京支部との連名で、東日本大震災の被災地に在住の会員に対しお見舞い状をお送りしましたが、以下は、特に災害のひどかった地域の方の返礼を掲載させていただきました。紙面の都合により割愛部分がありますが、ご容赦をお願い致します。

（五十音順）

◆芦田一郎様（仙台市在住）

早速に温かいお見舞いのお便り、まことにありがとう存じます。

ご心配いただきましたが、わたくしどものところは幸い海岸からは離れており、津波の心配もなく、また建物も耐震がしっかりしていましたので、被害といえば、すべての部屋の家具から物が落ちたり食器がこわれ散乱した程度でした。ガスの復旧やガソリン不足はまだ当分かかりそうですが、現在のところ怪我もなく家族一同元気にしております。まずはご安心ください。

（3・23）

◆足立正美様（浦安市在住）

震災お見舞い有難うございます。

幸い建物器物の破損等の被害は免れましたが、十日ばかり断水でエレベーターのない五階建て四階に住んでおり、一日に十回以上バケツによる水の運搬で、老夫婦二人ぐったりとなりました。家の周りは液状化がひどく、今も泥の埃に悩まされております。まずはお礼と会の発展をお祈りします。

（4・2）

◆足立徳子様（千葉市在住）

このたびはご丁寧に震災をおたづね下さってありがとうございました。誠に驚くような大地震で東北の方々はお気の毒でした。幸い強い揺れに驚きましたが被害はなくて、ほっとしています。

私達のお仲間（内村鑑三系統）が交代で現地にお手伝いに行ってくださってジカにひどい状態のお話を聞き、亡くなった方、行方不明の方、家を流された方、本当にお気の毒です。

行ってくださった方々は、夜半に発って二、三日精一杯片づけて夜半に帰ってこられます。私達で応援しました山谷えり子さんから非常事態のステッカーを出していただき、警察で発行していただき、新潟まわりで何組も（関西からも）仙台へ行ってくださっています。

余震がテレビで映ると、きょうだい達が丹波から、九州から（九州本籍地で）電話をくれました。

お見舞い状厚く感謝申し上げます。埼玉も震源地の時がありますようで、どうぞお気をつけくださいますよう。

（4・3）

◆荒木輝雄様（牛久市在住）

東日本大震災、本当に大変な被害が出て、毎日報道を見ております。

お見舞いのお手紙をいただきありがとうございました。毎日余震はありますが、同じ茨城県でも水戸、高萩はかなり被害はありましたが、我が方は少

し南寄りのため被害はありませんでした。

（3・31）

◆五十嵐寛子様（我孫子在住）

拝復　4月に入り、ようやく暖かく春らしい陽気になって参りました。

思いがけず今回の大地震へのお見舞いをいただき心より感謝しております。被災地のあまりにも悲惨な状態を連日テレビにかじりついて眺めております。

我孫子市は、一部の地域に集中した液状化が起こり、数百棟に甚大な被害が出ました。その昔、沼であった地域を埋め立てて住宅地にしたとか報道されています。私の自宅は、幸い地盤は元山地、加えて数年前に数百万円かけて耐震工事をしておりましたので、建物への被害は無く、庭の大きな灯篭が倒れ、近くの物を壊した位で済みましたが、当日はかなり揺れたらしく（幸か不幸か東京で帰宅難民として一夜を明し、留守にしておりました）、ご近所の方々は恐ろしくて外へ飛び出されたそうです。屋根から瓦が落下するのを見たり、少しは難れた地点では液状化が起こり、水が吹きだすのを見たり、数は多くありませんが、全く住めなくなった家もあります。玄関に亀裂が走り、道路が沈んだり壁にクラックが生じたりと軽微なものまで含めると、それなりの被害が報告されています。大部分の住民はお陰様で無事暮らせておりますので、ご安心くださいませ。

当日はPM2時46分、銀座で歌舞伎を観劇中にすごーい揺れに遭遇、何度も襲って来る余震に、当日の舞台は三分の二ほどで打ち切りになり外へ。近くの会社のビルから社員多数がヘルメットをかぶって屋外退避しており、道路は人で溢れておりました。帰宅のため、JR有楽町駅へ歩いて向かいました（とても地下鉄に乗る勇気は出ないので）。そのわずかの時間に、公衆電話（数少ない）の前に延々と人々の列が出来、レストランや喫茶店の内外に人々が集まり、数少ないこの地域のコンビニから、お茶・パン・オニギリ等が姿を消したようでした。

メインの道路を救急車、消防車が警察官たちの笛に整理されて走り、すでに異常なムードが漂い始めました。道路沿いには警官が立っていて、JRはストップしていることを知らせてくれました。全交通機関ストップ状態だったようです。JR有楽町駅に行きましたが、構外へ立ちのくようアナウンスが流れていました。致し方なく近くの交通会館ビルの中へ入ると、既に多くの人々がその階段に1階から上階へと座り込んでおりましたので、わずかの空白地に座らせて頂き、結局そのままPM4時から夜中まで固い階段に座って過ごし、少しずつ開通する交通機関に従い人数が減っていき、これによって生じた空白地へ、階段で知り合った女性達と一緒に、閉店したテナント（店）の前に、わずかな量のダンボールを敷いて築地市場のマグロの競りの

ように横になり、余震激しい中、トロトロと仮眠を取りました。ライフラインはストップしておりませんので、開き直って、とにかく明日の交通機関の再開を待ちました。

近隣の商業ビルでは閉店と同時に退去を命じられたようですので、この会館のシャッター閉じた後も、在館する人々はそのままOK。退去したい人は、防災センター横の唯一の出口からどうぞ、但し二度と入館は不可、の処置に心より感謝致しました。電灯もそのまま、地下にある防災センターの係員がNHKテレビによる地震、交通情報等を逐一、館内放送でアナウンスして下さり、加えて「このビルは安全です」の一言で、心安らかなうちに思いがけない体験を少し楽しみ、いろいろと学ばせて頂きました。

携帯メールで家族の皆とお互いの無事と交通情報の交換が出来、通話は難しくともメールでつながる安心を経験しました。公衆電話に行列することも不要でした。「安全」と「トイレ」「暖房」「電気」「多くの仲間」に守られての本当にラッキーな帰宅難民体験でした。

帰路は通常一時間で帰れる距離を六時間余りかけて、やっと我が家へ帰ったら、棚等から落下したガラス、本などで散乱した部屋々々が歓迎してくれましたが、ご近所でTVが壊れた方もあり、大半は元に戻せばいい程度で済みましたので、ご安心ください。在宅していても防ぎ切れないのならば、主人とも不在であったのは、ある意味で恐ろしい思いをしなくてよかった分、幸せだったと思っています。

本当に何もかも失われた方々、一瞬で落命された方々の多さに圧倒されて早速義援金を振り込み、風評被害に苦しむ茨城・福島産の野菜などをせっせと食べて差し上げることで、ささやかな支援を……と思っております。

我が家へのお見舞いを心より感謝しつつ、とりあえず全員の無事とささやかな体験をお伝えしておきます。

原発が無事解決しますこと、従事する人々の無事を心より祈っています。

（4・2）

◆石川喜久子様（千葉市在住）

震災お見舞ありがとうございました。

私の方は無事被害も無しです。三週間過ぎた今も暗いニュースばかりです。スーパーには品物なし……。いつまで続くのか心配ですが、世の中が同じです。今日一日元気で過ごせたことに感謝して、マイペースで自分の生活をしています。あたたかいお便り本当にありがとうございました。

丹波からの電話も二、三日通じなくて心配かけましたが、今は無事通じています。一日も早く、元の生活が出来るよう祈るばかりです。（4・1）

◆岡田充利様（習志野市在住）

お見舞いのお手紙、本当にありがとうございました。

我が家の周りでは下水管破損のため、未だ水道が使用できない地区がありますが、おかげさまで当方はランプ一つの被害ですみました。

ご心配頂き、ありがとうございました。（4・4）

◆陶山笑子様（潮来市在住）

この度の東日本震災の被害のお見舞いありがとうございます。

毎々大規模災害のテレビ、新聞報道を悲しい思いで見ております。私達茨城県南部は一部被害の大きいところもありますが、我が家はお陰様で被害も少なく、水も電気も割と早く復旧し、うれしく思いました。

遠い柏原を出て50年余、関東へ来て40年近く、老境（75歳）に入り、同郷の方からのお見舞うれしく、ありがたく思います。しっかり大地に足を踏ん張って生きてゆくつもりです。ありがとうございました。（4・1）

◆辻田　昌様（福島市在住）

この度の東日本大震災及び福島原発の放射能の被害に際し、お見舞を頂きまして、有難うございました。厚くお礼を申し上げます。

お陰様にて、私どものところは、避難することもなく無事で何とか生活出来ております。取り急ぎご配慮に感謝申し上げます。（4・1）

◆椿原昭三様（市原市在住）

この度の東日本大震災で、早速ご丁寧なお見舞い状をいただきまして、誠にありがたく厚く御礼申し上げます。

お陰様で多少の食器が崩れ落ちた程度の被害で済み、喜んでおります。

それにしても、いまだに毎日続く余震の多さと、東北の広い範囲の被害の大きさに驚き、津波の恐ろしさを痛感している次第です。

関東にも、いつこのような大きな地震が来るかも知れず、普段から準備、対策を心がけておきたいものと、しみじみ感じているところであります。

同窓会の仕事大変でしょうが、お体に気を付けてご活躍をお祈りしております。取り急ぎお礼まで。（4・1）

◆仲　一聰様（仙台市在住）

東日本大震災のお見舞い、ありがとうございました。

3月11日（金）M9・0、震度7・0の地震は、私の部屋の書棚の本を全部掃き出し、台所の食器を一斉に掃き出してしまいました。

整理に1週間をかけて、一段落と思っていたら、4月7日（木）23・32に余震があり、M7・5、震度6強でまた本が飛び出してしまいました。また、最初からやり直し、気がつけば、地震発生から1ヶ月を過ぎていました。

電気の復旧は3月14日、水道の復旧は3月15日、ガスは4月10日でした。丁度、1ヶ月でした。

しかし、新聞によれば、まだ余震M

8クラスが発生する可能性が、震源の東側海域で予想されています（4月18付日本経済新聞）

私は、昭和19年から昭和33年までお世話になった丹波での生活を思い出しました。今でも家が残っていますが、その当時、停電は毎日あり、水道はなく、毎日ガッチャンポンプで水を汲み出し、プロパンガスはなく、薪を風呂・炊事に使っていました。

こんな生活から解放されたのは、昭和33年高校を卒業し、東京に出てきた時でした。皆さん方の温かいご支援をいただき、感謝いたします。

◆平岩基一様（内）（我孫子市在住）

此の度は、お見舞いのお便りを頂きありがとうございました。御心配頂きましたが、幸いにも我が家も家族も無事でございました。

当人は10年に及ぶ単身赴任をしておりまして、唯今は海外におります。家人も留守にすることも多く、日頃お便りを頂戴しながらご連絡も致しませず、ご無礼をおゆるしくださいませ。

日々の不安の中、心暖まるお言葉を頂戴致しまして、本当に有難うございました。

（4・7）

◆諸江節子様（水戸市在住）

ご親切なお手紙いただき、ありがたく御礼申し上げます。

私事ですが、大正12年、関東大震災のあった年の2月に春日町黒井（旧姓船川）で生まれました。主人は石川県金沢市生まれの人間で、県立水戸工業高校で土木工学の教員をしておりましたのと、ほんの一回の見合いで結婚し、ほんの1・2年だけとの話で水戸へ来て、とうとう今日まで至っております。主人は平成4年に亡くなりましたが、私は88歳の今、こんな大きな地震に遭うとは夢にも思っておりませんでした。今でも膝から下がふるえて、たかがトイレに行くのにも「アレッ、また地震かな？」と立ち止まりながら行くことがあります。

セキスイのタイル張りで、地震に強いという3階建てを建て、親・子・孫・ひ孫5人で住んでおります。おかげ様で建物はびくともしておりませんが、お風呂の給水器が倒れ、水が溢れて驚いて水道栓を止めたり、そのあと市の水道が止まりトイレも流せず、飲み水にも困り、息子がポリタンクで水を運んでくれたり、いやというほど水のありがたさを知らされました。

今まで買い集めた食器もメチャメチャにこわれ、これもがっかりしました。でも、東北の方々の亡くなられたお人、行方の分からない方々にくらべれば、ぜいたくなことです。普段食べる食器はあれこれありますので、困ることはありません。お風呂も湯屋へ車で行ったりしてましたが、4月5日にやっと給湯器の新しいのが入ることになりましたので助かりました。

水戸でも屋根瓦がほとんど飛んだ家、高塀がこわれた家（これが大谷石）

がほとんどです。ブロック塀はあまり倒れてません。職人さんが間に合わないので、どこを見てもビニールシートがかけてあります。

東北の方々には申しわけありませんが、今の世の中、物の有難味を忘れるほど物が溢れ、これがまずい、あれはおいしいと、選り好みの出来る世の中に馴れる私達に、きっと神様がこのへんでひとことの思し召しのような気も致します。しみじみお水の有難さを、身をもって知りました。

もうそう長くない命だとは思いますが、心して一日一日を大切に暮さねばと感じ入りました。（4・1）

◆山本直子様（取手市在住）

この度は御見舞をいただきまして有り難うございました。おかげ様で、家、家族無事でございます。関東氷上郷友会、柏陵同窓会の皆様にお心遣いをしていただきまして厚く御礼申し上げます。お見舞いをいただき郷里の皆様のお心の温かさに感謝申し上げます。まだまだ大小の余震が続いております。どうぞ皆様ご自愛くださいませ。有り難う存じます。（4・1）

◆若森敏郎様（取手市在住）

本日はご丁寧な御見舞いのお便りを拝受いたしまして有難うございました。3月11日の地震当日は大きな揺れで実際には1分位のものを数分にも感じました。然し棚のものの落下も少なく、内壁が少々損傷した位で済みました。また、瓦のずれもなく助かっております。しかし、その後、毎日のように発生する余震で落ち着かない毎日を過ごしておりますが、大津波で家ごと家族を攫われた方々、また避難所で不自由な生活を送られている方々のことを思うとなんでもありません。

また、福島第一原子力発電所の損壊は全く予想外のことでした。地震と共に発電は予想通り停止したものの、原子炉の冷却が電源喪失で行われず、原子炉は予熱で高温となり、燃料棒の被覆冠の溶断で放射性物質の外部放出という大事故になったと推定されます。

中越地震では、柏崎・刈羽原発も原子炉自動停止に至りましたが、幸いにも電気系統は健全で原子炉の冷却は支障なく維持出来たので、大事故に至らずに済んだものと想われます。この夏の東京電力の設備出力約６４００万kWの15％以上に相当する１０００万kWの電力不足が想定されますが、柏崎・刈羽原発の一日も早い完全復旧が切望されます。また、福島第一原発の放射能漏れが一日も早く終息することを願うものです。

本日は、御見舞いを頂き有難うございました。皆様と共に東日本震災で犠牲となられました多数の方々のご冥福と、被災されてご不自由な避難生活を余儀なくされておられる方々のご安泰を心より願わずにはおれません。ありがとうございました。（4・1）

俳壇……

初期の句は家族を詠んでいました。その中から五句を引いてみました。句集に載せた句です。

足立和信（青垣町）

子の寝顔母が見てをり蚊遣香
瓜食んで子どもら日照雨見てゐたり
モーツアルト聞いて柿剥く子に妻に
児の肌着たたみをる妻小鳥来る
亡き父の眼鏡を母や毛糸編む

足の骨を折り杖で歩いておりますので吟行は出来ず、以前の句です。

谷垣恵美子（氷上町）

鬼灯の立枯れし実はそのまゝに
梵鐘の余韻いくたび桐の花
鳥翔けて地の蟷螂を銜え去る
嫋々の風の穂草に試歩の刻
蜂鈍く巣に固まりて秋の雨

今日旅行より戻りました。一人で本を手本に楽しんでいます。

島津和子（山南町）

空蝉や白壁落ちし村の寺
蔓（つる）の先おっかけごっこ天道虫
天の川村に伝わる七（なな）つ井戸

前略、おどろきの五句　坂上勝朗（氷上町）

喫茶店（さてん）ではフラッペといふかき氷
じいじ見てアリンコ並んでどこ行くの
節電のクセを残して夏の往く
男超へ女子サッカーの夏終る
荒川のかもめへうへう秋迎ふ

（戸田橋のたもとにて）

「夏」という暑くてもどこか心地よい爽やかさを感じるあの夏は次第に懐かしい思い出になっていくのでしょうか。

道（氷上町）

日傘さえさえぎり切れぬ日射しかな
ペットボトル散らばる部屋に西陽射す
ジャスミンの香にむせかえり　熱帯夜

黒蝶の風に抗う岬はな　（出雲にて）
夏薔薇　葉裏に巣食う虫のある
鈴虫の鳴く音かすかに銀座裏　（初秋）
交差点手向けの小百合しおれおり
通夜の客知らぬ同士の廻し香
息吸えば緑に染まる心地して　（新緑の高尾山）
白木蓮他人の庭の春めでつ
ひとひらの桜衣に朝帰り　（身替り座禅）

先日、丹波に帰って作りました。初めての句作です。「美春子」は母と父の名を借りました。

美春子（柏原町）

残暑開け行く道開けても茨道
戻り梅雨いつまで続く涙雨
緑濃く夏空青くも祈るのみ
（東日本大震災によせて三句）
心癒ゆ丹波の朝寝蝉時雨
墓石にて殻脱ぎ捨てて蝉発ちぬ
（丹波にて蝉を詠む二句）

詩座……

時には自己と対峙して

上　高子（氷上町）

都会の喧騒とインターネットから逃れ来た
八ヶ岳の山麓。
夜中に目覚めて、漆黒の闇に眼を凝らす。
林住期（老後）の私の生きざまは
これでよいのか。
胸の奥深くの想いを自問自答する。
何かちがう。
どこかちがう。
自画像と他画像のギャップ
理想と現実のギャップ。
明日は都会へ戻り、もう一人の私を再起動する。
無数の情報を受けて、瞬時に反応をくり返す、
俊敏な私を。

歌壇……

先週、年来の友人達と蓼科高原へ行って来ました。メンバーの多少の出入りはあっても、もう二十年の余の夏の一日を過ごしています。

坂上勝朗（氷上町）

蓼科の雲居に集ふ友垣の年を数へて笑ひざゝめく
毎年のこの山荘にはじめ来しときはいつかと互に問ひあふ
高原の陽をこもれ日にして咲く卯木さびしき色といま覚へけり

丹波に帰ってもう数年。関東に戻ることも考えながら、家守りをしています。足立美都子（柏原町）

容赦なく時計は進むとろとろと朝のまどろみ醒めやらぬうち
枯草を押し上げのぞくふきのとう摘み取る指にしみる春の香
八十の誕生日来てことさらに過ぎ去る日々の速さ身に沁む
我が家にて蝉を詠む　美春子（柏原町）
ベランダの壁にすがって蝉時雨すわ一大事と愛犬吠ゆる
愛犬が吠えるを聞いて尻向けり　発蝉時雨愛兎緊張

大地震で毀れたのか節電かはたまた放射能か近くの子供プールは閉鎖のまま。賑やかな歓声の響かぬこの夏は命を考えた日々だった。

原谷洋美（山南町）

人差指軽くふれれば両側に大きく開く扉にひとり
我が出でし後の数秒我が影の出づるを待ちて静かに閉づる
指染めて色水遊び　露草のふかむらさきの染みならよきに
青紫蘇を喰みたるバッタのあさみどり少しかげりてやはらかに飛ぶ
朴の木の繁み伐られて西空に豊旗雲の輝くを見つ

謎の恐竜「テジノサウルス」歯を発見

県立人と自然の博物館は、恐竜化石第5次発掘調査で、篠山層群下部層から国内最古の「テリジノサウルス類」（獣脚類）の歯の化石が見つかったと発表した。種類が少なく、謎めいた恐竜だったが、日本では、熊本県で歯と脳函が出土して、今回の歯の発見は国内2例目である。また、竜脚類（丹波竜）の化石は、胴椎一点が新たに見つかった。

（平23・3・31）

滞在して農業体験観光、観光協会が取り組む

丹波市観光協会は、今年から農業体験観光に取り組むことにした。丹波市に一日滞在してもらうには、いわゆる観光だけでは難しい、として田舎の持ち味を生かした農業体験と組み合わせて売り出す」ことを考えた。秋の観光シーズンには「丹波丸ごと味覚フェアー」を柏原市街地で開く。丹波観光協会の事務局長は、「たとえ一点でも丹波の食材にこだわった〝ほんまもん〟の食べ物を売ってもらいたい」と期待を込めている。

（平23・4・28）

丹波市役所、移転新築を調査特別委で意見出る

庁舎統合に関わる調査特別委員会が開かれ、8会派がそれぞれ意見を出し合ったところ、「新たな場所に建設」が最も多く、他は「現状のまま」と「本庁舎か分庁舎に統合」と別れた。一方、氷上地域の商業者有志グループは、「丹波市役所を氷上工業団地に移転新築する」ことを求める要望書を、丹波市長、市議会議長に提出した。辻市長は、「中身をよく精査して対応をこれから考えたい」と応じた。

（平23・6・19）

県立柏原病院循環器内科の医療充実、手術増える

県立柏原病院循環器内科は、2004年に内科医不足が顕在化してのち、同科の診療機能が低下していたが、2008年度に年間5件しかなかった手術件数が、翌年度から増加に転じ、2010年は98件の手術を手がけた。柏原病院が取り組んできた医師の充実が実現したため。今年のゴールデンウィーク明けからは、5年ぶりに平日夜間を含め24時間体制で心疾患患者の受け入れを始めた。収容率は今年71％にまで増え、さらに拡大する。（平23・6・23）

「お江」ゆかりの丹波人に徳川秀忠の乳母

NHK大河ドラマで放映されている話題の「お江」周辺の丹波人が、またひとり氷上に住んでいたことが分かった。「徳川秀忠の乳母が氷上に住んでいた」ことを、郷土史家の細見末雄さん（故人）が「丹波史・9号」の中で、明らかにしている。元は但馬八鹿町の城主大名・別所吉治は徳川秀忠の乳母刀歳（とせ）の甥にあたり、徳川攻めに加わったため家康から所領を没収されて流浪で途絶えようとしていた。刀歳が別所家を立て直してほしいと秀忠に願い出たため、いったん刀歳におくられた領地を吉治に譲り渡したもの。吉治は北由良に居住していたということは確か。刀歳は由良の付近だろう、という。（平23・7・10）

私の職場

アメリカ留学が転機に

東京大学大学院農学生命科学研究科
八木信行（氷上町）

◆農水省に就職したが

現在、母校の大学で教員をしております。

元々私は、研究者として職歴をスタートさせたわけではありません。大学卒業後は、一旦、農林水産省に入省しました。当時は食料や地球環境に関する仕事がしたいと漠然と考えて、進んだ道でした。しかし、入省四年目にアメリカに留学したことで、日本は今後、はたして大丈夫なのか、と懸念を抱くようになりました。今から思えば、これが、後年、大学に職を移し、教育に勢力を注ぐ問題意識の萌芽となっていたように思います。

アメリカへの留学は今から二〇年も前（一九九二年）になります。当時から、人事院は、農林水産省や経済産業省、財務省などの中央官庁に所属するキャリア官僚の若手に英語のテストを課し、上位者を留学させるという制度を有していました。そのテストでは、私は農林水産省で何とか一位の成績を確保しました。帰国子女ではないのですが、柏原高校時代から英語は不思議と点数が取れる科目でした。担任して頂いた谷垣喬一郎先生のご指導が大きかったと思いますし、また、ケント・メリディアン校から青垣町に留学していたアメリカ人学生と自転車を並べて駄弁りながら高校に通学していたせいかもしれません。

さて、こうして私はアメリカに官費留学できることになり、そこでＭＢＡを取ろうと考えました。ＭＢＡとは、経営学修士号の英語の頭文字を取ったもので、アメリカのビジネス界で生きるためには重要な資格です。投資銀行や、戦略コンサルティング会社などで幹部になろうとすると、ＭＢＡを有していることが条件となっているといっても過言ではないでしょう。

私は留学先をペンシルバニア大学ウォートン校にしました。アメリカで「ペン」といえば、全員が知っている学校です。「ペン」は、ベンジャミン・フランクリンが創

立し、アメリカで一番古い総合大学です。ハーバードやエールの方が創立そのものは古いのですが、これらは昔は神学校で、総合大学ではなかったのです。「ペン」は、東部アイビーリーグの学校で、昔、首都であったフィラデルフィアに位置し、私が在学していたときも、ウォートン（注：ペン大のＭＢＡコースの愛称）は経営大学院で全米ランキングが一位でした。なお、私の感じでは、ＭＢＡコースで全米ランキングの五位くらい、すなわち、ハーバード、スタンフォード、ペン（ウォートン）、シカゴ、マサチューセッツ工科大は、かなり拮抗しています。そこで、留学時代の二年間、経済学の基礎と、アメリカ流の資本主義をみっちりとたたき込まれたわけです。

ウォートンは世界から学生を集めるだけあってレベルは高く、東大時代の学友よりも優秀な者がゴロゴロしていました。そのような仲間に囲まれて、目からウロコが落ちるような経験を頻繁にしました。

例えば、翌日の授業に備えるために、三〇〇ページくらいある本を一冊読む必要があることがよくありました。私が慣れない英語で本と格闘していると、学友のユダヤ系のアメリカ人が、「ちょっと待て、三〇〇ページある本をアタマから読み始めても一晩では終わらないぞ、まず、文中の図表だけを見て、その部分を理解するのだ、そして余裕があれば結論部分を読んで、更に余裕があれば序文を読むのだ、そのほかの部分は読まなくてよい」などとアドバイスをくれたりします。そして、更に、手分けをして読解する方が速いということで、五人ほどのチームを組んで、一冊の本を分担して読み解く、といった作業もよくしました。

このように、作業を効率化しながら、更には自分だけ得をするのではなく、人にも十分に分け前を与える（つまりリスクの分散）といった作業を、ピザを食べながら難なくこなす連中が揃っていたように思います。今はジョークを飛ばしあっている彼らが、もしも日本をカモにしようと本気で向かってくれば、結構手強いだろうな、と思ったものです。

留学の二年が終わり、アメリカ人の学友は、次々とマッキンゼーや、ゴールドマン・サックスなどに就職します。私が、日本に戻って役所に復帰する計画だ、と学友達に述べると、一様に驚いて「公務員なんか辞めるべきだ」という反応です。「ＭＢＡコースで我々はリスクを管理することを学んだ

はずなのに、なぜリスクがない公務員になるのか」とか、「大きな組織にいると他人の都合で仕事をさせられるようになる、自分の意見を通しやすい小さな組織を目指せ」などと口々に言います。

そのような忠告を無視して、一旦、私は霞ヶ関に戻り、その後、一九九九年から二〇〇二年までワシントンにある日本大使館に一等書記官として赴任しました。このような経験を積みながらも、日本で、せめてウォートン並みの教育をしないといけない、という考えが更に強まっていました。

そのような時期に、かつての指導教員や研究室の関係者から、「八木君、君も、東大教員の空きポストの公募に応募してはどうか」との話がタイミング良くもたらされたのです。

◆環境破壊のメカニズムを研究

大学教員は、研究を行い、研究業績を上げる必要があります。私は、二〇年間研究から離れていたブランクがあります。初めから大学で研究を続けていた同年代の研究者と比較すれば、研究業績の数が相当少ないという状況です。これを今から追い上げなければいけないわけですから、相当段取りよく研究を行う必要があります。

研究の内容は、環境経済や漁業経済の分析です。なぜ環境が破壊されるメカニズムが生じるのか、またそれを防ぐためにはどうすればよいのか、といった分野です。

環境が破壊されるのは、人間のモラルが低いからだとか、「もったいない」と感じる精神が足りないからだ、などといわれますが、環境経済ではそのように考えません。むしろ、環境が破壊されるのは、人間が何らかの経済活動を行うときに付随してそうなるのであって、予防するためのコスト負担（またはペナルティー）が適切に設定されていれば、環境破壊は防げる、と考えています。そのコスト負担構造がどうであるとか、ペナルティーのかけ方にはどのようなものがあるとかを分析することが、私の研究内容です。

研究の題材には事欠かず、環境省や農林水産省、更には国際機関などから、「課題があるので、君のところでやってくれないか（少し研究費回すから）」といった話が結構来ます。

例えば、国連食糧農業機関（ＦＡＯ）が実施する国際研究プロジェクトがある、これを君がやってくれ、と言われて、今年の前半はそれに忙殺されました。写真上は、ＦＡＯの彼らが昨年年末に

私の研究室にやってきて、そのプロジェクトの国際会議を行ったときに撮影したものです。写真下は欧州議会の議員であるイザベラ・ロービンさんを招いての勉強会の模様です。

また、研究と並行して、講義を行う必要もあります。私が現在受け持っているのは、大学院生を対象とした講義科目が毎週二コマ、学部生を対象とした講義科目が毎週一コマです。いずれも三〇人前後を対象としたもので、内容は、開発経済、環境経済、漁業政策などの分野です。

幸せなことに、私が担当する学生には、やる気がある者が多く、教室内でもかなり議論が盛り上がります。国際的に通用する日本人を育成するという作業は割合とはかどっている感がします。

よく、役人の時と比べて仕事が忙しくなったかどうかを聞かれますが、これは似たようなものです。ただし、役人の時は、国会で大臣が読み上げる原稿を書いたり、国際交渉で大使が読み上げる英文原稿を書いたり、といった仕事が多く、その発言の効果があるのかどうか分からないような仕事が多かったのですが、現在は、研究も教育も、成功と失敗がよりはっきりと、しかも早く分かる状況になっています。

その意味で、仕事はより面白くなったと感じています。

（昭和55年、柏原高校卒業／東京大学大学院農学生命科学研究科准教授）

セクレタリアット

金出一郎（春日町）

一九七三年から六年間、石炭の開発・取引担当としてニューヨークに駐在した。

折しも第一次石油危機に遭遇、一九七四年の日本の粗鋼生産は史上最高の一億二千万トンを超える活況を呈し、石炭需給は極度に逼迫する一方、価格は狂乱的に高騰した。そんな状況下、私は日本製鉄各社の旺盛な買い注文に応じるため、文字通りブラック・ダイヤモンドと化した石炭を求めて米国の産炭地を隈なく駆け巡ったものだ。

その一環でケンタッキー州レキシントンを訪ねた時のこと。地元の名士でもある親友のジョージが「今日は石炭のことは一時忘れて馬でも見に行こう。クレイボーン牧場にはあのセクレタリアットがいるよ」と誘ってくれた。

米国の競馬界についてはほとんど無知の私ではあっ

たが、一九七三年のケンタッキー・ダービー、プリークネス、ベルモントの三レースをすべて圧倒的な強さで制覇した三冠馬で、不世出の駿馬とうたわれたセクレタリアットの名前だけは聞き及んでいた。

ジョージの誘いを快諾し、早速、クレイボーン牧場に赴いた。セクレタリアットは今や現役を退き、種馬として此処で飼育されていた。使用人の口笛の合図に応えてセクレタリアットは、私たちが待ち受ける柵際に向ってギャロップで颯爽と現われた。慌てて写真を撮ろうとする私たちを気遣ってか、彼は暫時身じろぎもせず、ポーズをとってくれたが、その姿は実に堂々として威風辺りを払う王者の風格が漂っていた。

二分ほど経った時、彼は用済みと判断したのだろう、突如、素早く反転し再度ギャロップで風の如く去って行った。今は自身が次世代の名馬の父親になる夢に生きるセクレタリアットの余生に思いを馳せながら、私はこの時、彼に限りない愛着を感じた。

#

時は移って、一九九〇年の十一月。豪州出張でメルボルン入りする日が、たまたまメルボルン・カップ（世界三大競馬レースの一つ）の日に当り、客先よりフレミントン競馬場に招かれた。メルボルンが所在するヴィクトリア州では毎年カップ・デーは祭日で、レースに事寄せたパーティーや催しが各地で行われ、喧噪なお祭りムードに街は沸き返る。

この日の早朝シドニーに着き、メルボルンに向う機中、新聞のレース特集を頼りに、賭け馬の検討に入った。カップ・レースは二十四頭出走のビッグ・フィールド。全く予備知識のない出馬の中から目当ての馬を選ぶのは〝闇夜に鉄砲〟に等しい。自分の誕生月日の数字にでも張るかと半ば諦めかけた時、キングストン・ルーラーという馬についての寸評が私の注意を引いた。血統の項に、父親はセクレタリアットと小さな文字で記されているではないか！　十七年前にケンタッキーで対面したあの馬の息子がメルボルンに！　よしっ、これで行こう！　メルボルン空港に着いた時には、私のレース予想はキングストン・ルーラー一頭に絞り込まれていた。

フレミントン競馬場に急ぐべくホテルを出ようとした時、可愛い受付嬢が「どの馬に張るの？」と質問し

てきた。躊躇なく「キングストン・ルーラー」と答えるまでに、この馬への思い入れはエスカレートしていた。

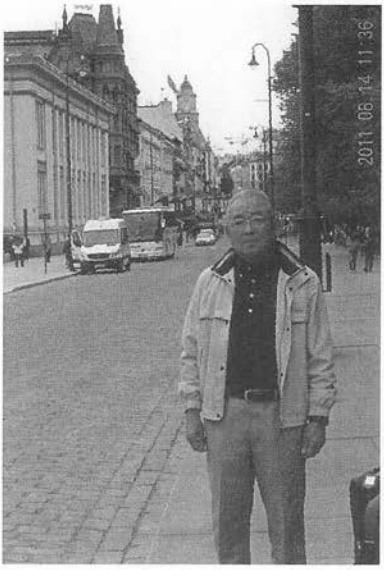
競馬場に着いてからも、殆ど挨拶代わりのように「どの馬に？」と多くの人から訊ねられたが、その度ごとに「キングストン・ルーラー」の返事を繰り返した。

レース直前、「キングストン・ルーラー」の賭け率は十対一。私は迷わず単勝一本で張った。

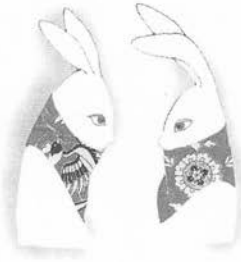
観衆の興奮と喚声に包まれる中、レースは大詰めの最終コーナーで満を持したキングストン・ルーラーが一気に先頭に踊りだし、ホーム・ストレッチでも執拗に追いすがる他馬を振り切って見事に優勝を遂げたのである。快哉！

十七年という時の流れを経て、北半球のケンタッキーと南半球のメルボルンを結び付け、正に時空を超越した奇縁が絡む楽しい思い出を私に残してくれたセクレタリアットに感謝したい。

なお、セクレタリアットは一九九〇年春、病魔に勝てずクレイボーン牧場で生涯を終えた。息子キングストン・ルーラーの栄冠を知ることなく。



ノルウェー・オスロにて（平成23年8月）


（上田道代・画）

（昭和10年、神戸市生まれ／終戦後6年間、春日町（旧大路村栢野）に移住／元・伊藤忠商事勤務／東京都港区在住）

皇居の森～皇居勤労奉仕に参加して～

堀　博　之（市島町）

昨秋、友人の誘いで皇居勤労奉仕の団体に加わり、今まで一度も足を踏み入れたことのない皇居に入った。〝皇居勤労奉仕〟というのは、ご存知の方もあろうが、一般国民が皇居に入り、除草、清掃、庭園の手入れなどの作業を行うボランティア活動のことである。

私がこの勤労奉仕に興味を持ったのは、これに参加すれば一般には立ち入りが許されていない皇居内に入り、今まで実際に見たことのない宮殿、宮中三殿（賢所）などの建物を見学し、また、都会の真ん中に今なお残る野趣溢れる大自然に接することができると考えたからである。

奉仕作業は、平日の連続の四日間（うち一日は赤坂御用地）で朝八時から午後四時までと決められている。かなりの重労働にみえるが、その実、作業は一日に三時間程度で、あとは、作業地への移動と休憩、そして宮内庁職員の案内による皇居内の建造物、庭園等の見学であり、労働より見返りのほうが大きく、〝エビ鯛〟のようで何か申し訳ない気持ちであった。

都心にある皇居は三四万坪と、その面積は広大であり、大きく吹上、旧西の丸、東御苑の三地区に分かれている。そのうち、江戸城の天守閣や本丸があった東御苑地区は一般に公開されているが、あとの二地区は正月や天皇誕生日の一般参賀などに立ち入りが許される旧西の丸地区の一部を除き、非公開である。

今回の奉仕作業では霊気漂う賢所、天皇お田植えの田圃、樹齢六〇〇年の盆栽など期待通りいろんなものを見学できたが、特に印象に残っているのは、巨木が密生する鬱蒼とした吹上の森、天皇皇后両陛下がお住まいになっている御所、そしてなんと言っても、今回の奉仕作業のクライマックスとなる天皇皇后による奉仕団への〝御会釈〟である。

吹上地区は、道灌濠を旧西の丸地区と挟み込むよう

な形で位置している。ここはほかの2地区と異なり、ほとんどが樹木に覆われており、その中に宮中祭祀を行う三殿(賢所)、昭和天皇が住まわれた吹上大宮御所、そして現在の天皇のお住居である御所などの建物が存在する。

三日目の作業は、ここ吹上で行われた。西の丸地区から吹上地区に入った途端、今まで開かれていた大空は鬱蒼とした樹木によって閉ざされ、辺りが急に薄暗くなり、気のせいか空気がひんやりとする。森の奥に向かって砂利道が一直線に走っている。道の一方の側は生い茂る樹林と築地塀が接し、もう一方には草木が覆う道灌濠が接し、覗き込むと水面が静かな佇まいを見せている。大都会のビルや街路といった人工の美と対極にあるスケールの大きな自然がここ吹上の森にはある。思い描いていた以上に野趣に富んだ森である。

十二月初めで、まだ紅葉が残る季節であったが、深山幽谷を感じさせる道灌濠に沿って枝を張るもみじの紅葉は空を覆い、木漏れ日を通して見るその色は、まことに鮮やかで、土手と水面を覆う落葉と合わさり、辺り一面を真っ赤に染めていた。昭和天皇の考えで吹上の自然には出来るだけ手を加えない方針が採られたが、今もその方針は守られており、例えば、森の中で年月を経て朽ちた老木も撤去されず、土に戻るまでそのままに残される。道に積もった落葉も掃き集めたあと焼却場に捨てたりせず、腐葉土にするため、すぐそばの森の中に戻される。吹上の森の土壌を調べたところその自然の豊かさは、高尾山や奥多摩と同じレベルということで、動植物学的にも貴重な場所と言われている。

このような場所が東京のど真ん中で、大手町や丸の内の直ぐそばに存在するとは信じがたい。吹上には昭和初期に九ホールのゴルフ場があり、ゴルフ好きの昭和天皇はよくそこでプレーされた。昭和十二年、日中戦争が始まるとともに、天皇はゴルフを中止し、芝生の手入れを一切止めるよう指示された。それをきっかけに、吹上にある他の庭園も一部を除き管理を中止し、自然の成り行きに任せるようになった。そして、天皇の希望により武蔵野に生育する植物が移植され、その結果、そこには武蔵野の自然を思わせるような野生種の植物が繁茂するようになった。

奉仕作業で次に印象に残るのは、落ち葉の清掃をするために天皇皇后両陛下のお住居である御所のすぐ前まで近付けたことである。御所は両陛下のお住居であり、毎日ここで生活されている。そのようなプライベートな場所であるから、通常は奉仕作業ルートから外される。我々は落ち葉のおかげで、そこに入れたわけで全く幸運であった。不謹慎ながら、この感激を妻と共有したいと思い、御所を目の前に見ながら電話し、自慢げに今どこにいるか報告した。更には、記念に、と落ちている松ぼっくりを三個も失敬してしまった。

そして、今回の奉仕作業で最も印象に残るのは、両陛下の奉仕団に対するねぎらい（宮内庁ではこれを天皇による〝御会釈〟と呼んでいる）の場で、両陛下にお目にかかれたことである。両陛下に直に、しかも一メートルほどの至近距離で対面すると思うと本当に緊張する。奉仕団全員が整列する建物に両陛下が車で到着され、我々の前に立たれた瞬間、その緊張感はピークに達し、心臓が早鐘のように打つのを感じた。奉仕団の各団長の前に近寄られ、慈愛に満ちた眼差しで言葉をかけられるが、我々の団長は、両陛下の質問に答える際、感極まって言葉が出なくなってしまった。私はその情景を見て更に感動した。他の団員も全員そう感じたことであろう。

私の知人が葉山の海岸を夫婦で散策していた折、御用邸から散歩に出てこられた天皇、皇后両陛下が二人に近づき、言葉を交わしたという話を聞いたが、なかなかそんなチャンスに巡り合うことは難しい。しかし、一五名以上の団体を作り、皇居の勤労奉仕の申し込みを宮内庁に申請すれば、このように容易に両陛下にお会いすることができる。

私にとって今回の勤労奉仕は、皇居の自然や建物を見せてもらい、全国から参加した大勢のボランティアや宮内庁職員、皇宮警察官と親しく話すことができ、結構楽しく満足すべき四日間であった。もし機会があれば、もう一度、こんどは桜または新緑の季節に勤労奉仕に参加し皇居の森に入ってみたい。

戦いの日々

三浦　宏（山南町）

東京は日本橋に創業１８６９年のＭなる洋書の輸入販売店がある。数年前からは東京駅の丸の内側にもモダンな自社ビルを立てて営業している。私が専門関係の洋書をここで求め始めたのが二十代の頃からだから、そろそろ半世紀にわたる付き合いになる。Ｍは洋書の販売だけでなく、主としてイギリス製の生地による誂え紳士服や洋品も扱っていて、書籍の購入のついでにこれらも買い求め始めた。他店に比べて割高な感じはあったが、当時の私は独身貴族の身であったし、まだ輸入品への貴重感やあこがれがあった頃である。

このＭで一本の洋傘を買ったのは、かれこれ今から三十年ほど前になる。当時の値段で五千円ほどしたと記憶しているが、良いものを長く使いたい心づもりであった。木製の柄にsince1869と刻印された金属プレートが木製の柄にねじ止めされていて、他の輸入洋品と違ってＭのオリジナル商品らしい。この折りたたみ傘は、見た目はいかにも上等品の面構えであるが、やがてとんでもない代物であることが分かってきた。

まず、石突（いしつき）がすぐとれてしまう。石突とは傘の先端についている部品で、この傘の場合は木製で、傘の中心骨部分に切ってある雄ねじにねじこむ構造である。この石突が木製のせいでどうも相手の金属に負けて減ってきて緩み、いつのまにか取れてしまうらしい。石突は傘中央部に落ちてくる雨が本体の骨を伝わって中にしみこむのを防いでいて、これが無いと困る。Ｍにスペアの石突を求めると、ほかのお客からも同様の要求があるのか、石突だけがたくさん用意されている引き出しがあって、そこから一つを取り出してきた。

これだけなら日用品のよくあるクレームの一つであるが、これからしばらくすると、傘の骨が錆び出してきたのだ。これも本を買うついでに苦言を呈すると、「使用後はよく乾かして保管してください」とのことである。Ｍの傘だけを邪険にあつかっているわけではないのにこの傘だけが錆びるのはなぜか？、と聞いた

が取り合ってくれない。そして、ついに決定的な事故が起きた。ある雨風の強い日の朝、出勤のためにバス停に傘をさして並んでいたときのことである。折からの強風でこの傘は柄の中央部から真っ二つに折れて、約三十センチの柄を私の手に残して、空中高く飛んで行ってしまったのだ。本体の無いこの短い柄を捧げ持つ私を見て、行列後続の若いＯＬがもらした失笑が、未だ若かった私をいたく傷つけ、これで私のＭに対する戦いが始まった、といっても過言ではない。

今度は、この用件だけのためにＭへ行き、以上のいきさつを説明して「since 1869 とあるが、１８６９年以来、御社はこんな粗悪品をつくっているのか、だいたい御社は１８６９年から洋書を輸入販売はしているかも知れないが、オリジナル・ブランドを製造販売し始めたのは最近のことで、これに since 1869 と貼り付けて販売するのは商法違反ではないのか」と続けた。怒っているから声が大きくなり、「商法違反」を聞きつけて、責任者と法務関係者が出てきた。この場がどのような結論に終わったか明確には覚えていないが、Ｍに不具合品を作っている自覚が感じられず、先方の形どおりの謝罪で終わったと思う。

しかし、Ｍとのことは、これで一件落着とはいかなかった。洋書を含む書籍は相変わらずＭで買っていて、Ｍへ行くと、ついでに洋品・服飾のフロアーにも足を延ばしていた。自分ではそれと気がつかないでいたが、いかにも頑固で長持ちしそうなイギリス製の紳士グッズと書籍全般が嫌いでない私は、この店の雰囲気とともに、これらが一度に見られるＭの一種のファンであるらしい。眼鏡は永らくＭにお世話になっている。

ある年の初秋に買ったライナー付ベージュ色のハーフコートがその次の問題の一品であった。これも先の傘と同じで輸入品でなく、Ｍのオリジナルものである。この場合の問題点は二シーズンほど着用すると、襟やポケットなどが薄青色に変色してくることだ。これはＭで買ったベージュ色のコーデュロイのシャツにも見られた現象で、Ｍのこの色の染料あるいは染め方に問題があると思われた。横浜消費者センターを巻き込んだこの問題のいきさつは長くなるので割愛して、この時、私に対応したフロアー・マネージャーなる四十代

と思われる男性店員に言った苦言をかいつまんで紹介する。

「どうも御社は、お客が持ち込むクレームを真摯に受け止めて、これを製品工程にフィードバックする回路が無いように感じる。大声を上げると責任者と法務関係者が出てくるが、本来、このような場合は製造責任者が出てきて、お客の話を聞くのが筋であろう。世で名を成したブランド品のメーカーは、お客のクレームを愚直に聞いて、これを製品に反映することを長年繰り返して、そのブランドの地歩を確立したのであろう。ブランド力とは、すなわち品質力のことである。近年、日本のメッキ工程のほとんどが東南アジアでなされていて、しかるべき管理をしないとメッキ厚さはほとんど表面を覆う程度で、傘の骨などの日用品の場合はすぐ錆びてしまう。客受けする商品企画だけがあって、お客の声を真摯に聞く態度もなく、製品工程の管理も無い製品に since 1869 と貼り付けているがごとき商法ではやがて、貴殿も職を失い、貴家が路頭に迷うこと必至である。マックス・ウエバーを持ち出すまでもなく、良い製品によって、お客が満足した代償として利潤を得る、いわゆる天職義務が会社の根底になければ結局、会社は存続できない」

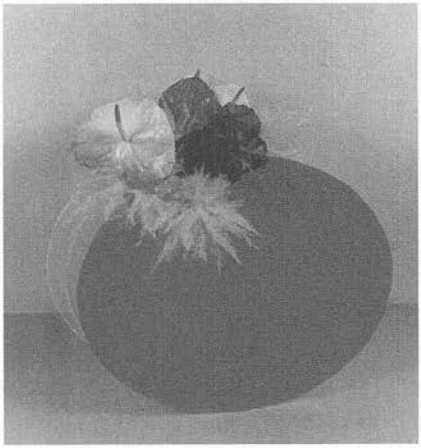
私の予感は不幸にも的中して、これから程なくしてMは、すべてのオリジナル服飾洋品部門から撤退し、東京駅前の中央通りにあったこの関係専門の高層ビルは、ビルごとこれらとは無関係の会社に売り払われたのか、模様替えしてしまった。

私は自分がクレーマーであるとは思っていない。現代のような大量生産の消費材を多くの大衆が買う場合、私が不満に思ってこれにクレームをつけるとき、この世には少なくとも数十人が同じ思いをしてクレームをつけていて、この中には私よりもっと激烈なクレーマーがいることを、私は今までの経験から知っている。したがって、Mの洋品部門が淘汰されたのは、以上の私のクレームが多少は影響したかもしれないが、私以外の激烈クレーマーに与るところが大であって、私のせいであるとは思ってもいない。

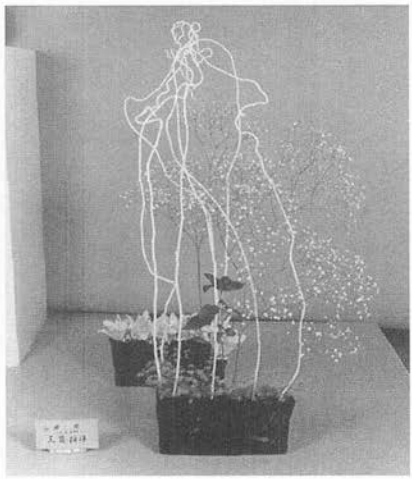
また、これだけ海外旅行が盛んになった現在の日本では、洋書や海外ブランド品は現地に行った時につい

でに買ったほうが断然安い。すなわち、輸入品への貴重感やあこがれは、これらが手に入りにくかった一昔前の人間が持っていた感情であって、これらの感情に依存して商売していたMは、Mのファンである私を含めて今や絶滅品種となった、とするのが正しいのかもしれない。

かくて、戦いすんで日が暮れて、Mで私が買って手元に残ったのは数十冊の和洋の専門書とイギリスのGieves & Hawkesの傘、輸入生地で仕立てた冬物ジャケットとJames Lock & Hatters（こちらはsince 1676！）の帽子のみである。これらはすべて十年以上は使っているがびくともしない。傘の骨は錆びないし、傘の布を止めている糸もほつれたことがない。彼我の品質の差は歴然であって、日本はもはや食糧を含むすべての物づくりをやめて、これから行方も果てしもない経済立国の旅に出るのだろうか。それにしても、このような良い見本の輸入洋品を身近で扱いながら、これらからなぜMは学ぶことがなかったのかが、私の大いなる疑問である。



（いけばな・三觜拍洋）



情報とデータ

北山素純（春日町）

一、東日本大震災・津波・福島第一原発事故・放射線の被害

これらは、各メディアで報道され、種々のレベルの情報やデータが我々に届いている。情報やデータが作為的に取捨選択されていないことを願うが、あまり期待できない現状。そのことが、疑心暗鬼、ないしは風評被害という新造語に繋がっているように思われる。

加うるに、原発・放射線の情報・データの難しさや、一般の市民には即断し難いような用語が記者会見などで飛び交う有様である。

そこで、自分は化学が専門で、これらの分野は門外漢だが、放射線について若干触れることにする。

二、放射線に関する用語の非常に簡単な説明

① 放射性元素

＊放射性ヨウ素

正確にはヨウ素一三一。その半減期、分かり辛い用語だが、放射線が放射性物質から出て来る量が半分になる期間。ヨウ素一三一の場合は約八日。つまり、ヨウ素一三一が存在しても放射線は約八日で半減、その後の約八日でまた半減する期間。

半減期という点では比較的安全な放射性ヨウ素だが、ガス状のために吸い込むと肺にまで達し易く除去し難い。一方、放射性でないヨウ素一二七は、喉のところから出る甲状腺ホルモンという、成長に深く関与する極めて重要で、そう複雑でないホルモン物質一分子に四個もヨウ素が結合しているという必須の元素。日本は生産上世界第二位で、主に千葉県から世界の生産量の四分の一も産する稀有な資源で、含む海草類も豊富。成長障害に繋がる可能性は全くないと言われる。

＊放射性セシウム

正確には、通常問題になるのはセシウム一三七。半減期はなんと約三十年。キノコに高濃度に濃縮されていることが判っている。筋肉に蓄積されて放射線を出し続ける量が約三十年でやっと半分になるのが怖い。

＊放射性ストロンチウム

正確には、主にストロンチウム九〇。半減期は約二十九年。カルシウムとイオン半径が近く、カルシウム蛋白質や骨などのカルシウムイオンと同様に蓄積される。しかも、骨での存在期間は三・四ないし六・七年とされていること。更に、人体への取り込みと保持率は、成人よりも幼児の場合に五ないし七倍大きいとされていることが最も危惧される。

ストロンチウム九〇は、骨の癌や白血病の原因になるということが判っている。ストロンチウム九〇が人体に入るルートは、飲料水や食物などによる内部被爆で、特に海草・魚・ミルクに蓄積し易いとされている由。

② 内部被爆と外部被爆

専門家・学者・政治家も原発推進派、原発から利権・恩恵を受けていると言われる人々は安全と言い、不信の募る人々は胡散臭さを感じる。

その大きな原因の一つは、内部被爆を重視していないこと。内部被爆とは、体内に空気・飲料・食物を通して入り込み、蓄積・固定されると、汚染地域に居ない時でも体内から放射線を浴び続けること。が、一部に報道されるのみ。

外部被爆を測るには、比較的安価な個人線量計だが、内部被爆を測るには、全国に一〇六台しかないと言われる高価なホールボディカウンター。

もう一つの原因は、厚労省が設けた放射線量の安全基準。暫定と付けたり、例えば、学校の被爆線量の安全基準の通知をしておきながら、保護者らの強い反発を受けて二〇分の一に変更したりと、場当たり的な対応では不信感も払拭出来まい。

安全基準は、人間を対象に研究するというにはいかず、過去の不幸な目に遭われた方達のデータを蓄積・解析された結果で、疫学調査の結果とも言うべきもの。従って、携帯電話や高圧電線下の人間に対する影響の如く、確定的な値ではない。

③　想定外

非常に都合のいい言葉。「すべて想定外だった。津波の高さが最初気象庁から発表された3メートルでなく、15メートルだった。大勢の人が、これくらい避難すれば大丈夫だと思って、時間の余裕があったにも拘らず15メートル以上の高台に上らず溺れて亡くなった」

このことは、想定外として、責任の所在も明らかにされずに、天災として済まされようとしている。それでいいのか？

厄介なことには眼に見えぬ放射線が人体や土地・農畜産物に蓄積されると、チェルノブイリの原発事故のように、人体の被害や田畑・住宅地・商業地、すべての死の街化に繋がる。贅沢に消費してきた電力や経済を理由に推進すべきか議論を要する。

あらゆる危険性を普段から予測して対応するリスク管理や、国際原子力機関（ＩＡＥＡ）に指摘されて、やっと作成した事故報告書の内容に明記されているとかいう「情報提供」、「非常時を想定した対応」、「関係者の意思疎通」が必要。加えて、責任や原子力利権で固まる政官財のトライアングルや批判勢力の所在の明確化、原発推進派でムラ社会を形成しているという専門家・学界の問題点の根絶、今後の原発計画の、実質的で国民が納得出来る議論を分り易く公開することが必要である。

三、おわりに

では、我々はどう対応すればいいのか？　先ず、原発ありきの専門家・学者・政治家などの原爆推進派の発言や意見や論述を信用せず、それらの方達の情報に惑わされないこと。

次に、身の対処の仕方は、飲料・食物は安全と言われる物でも疑わしいと思った時点で避けること。お茶や牛肉のみならず、放射線汚染は今後拡大すると思われる。

（昭和22年、春日町野上野生まれ／㈱ブリジストンを経て
現ケミテックテクニカル㈱に勤務／入間市在住）

折々の記(8)

井本義一（柏原町）

○―執筆を担当した1月23日活動日記（能ケ谷西緑地だより2月1日号）より―

1月23日（土）快晴参加者12名。お花見広場の耕地掘り起こし作業9日に続き第2日目。もともとはテニスコートの予定地として整備された所なので土質が固すぎ（場所により拳位のガラも出てきて）て、スコップの首のところまで掘り下げるのに毎年泣かされている。みんなでそれぞれの力に応じて掘り起こす人、その起こした土塊を細かく砕いて悪名高いチガヤの根を取り出し排除する人など、全員汗だくでの一致協力の結果、日当たり最高のこの広場のコア（中核）の畑地が整備完了したことを全員で喜び合った。

さて、あとに何を植えるのかの問題について、まだ方針が決まってないとのことなので以下私見を提案。できればバラとか果樹を植えるのは止めて欲しい。畝を作って野菜など農産物を育成して欲しいのです。花樹畑地にすると、どうしても空地を人が踏み固めることになり、固い土質を好むチガヤの根を又もや蔓延らせて、結果はイタチごっこになるからで、毎年の徒労は繰り返したくないから。空気を一杯取り入れた畝から野菜作りなど、参加会員全員で食べきれない野菜類は、町内の一人住まいの高齢者優先で、希望者の方に採れたてを召し上がっていただくとか、実現には困難もあろうが、楽しい夢を膨らませた、（22・2・1日）

○今朝より深夜便「明日へのことば」を聞き終えて4時50分、早朝ウォークへ出発、日常生活に戻った。今月26日～29日、非日常活動は実家へ墓参と、27日柏原中学校卒（１９５０年）後、60年記念同窓会（於喜作）出席帰省で。60年経過すれば何人くらい出席するのだろう？　登録名簿人員数１０９（男49・女60）、うち現住所不明者9（男5・女4）、出席者28（男15・女13）、出席率28％、因みに判明せる物故者計32（男17・女15）。61年ぶりで（2年で転校した）T氏との再会が特に嬉しかった。90分にわたる全員の自己紹介、現況報告は、それぞれがある面において、自分との闘いの厳しい生

きざまを聞かせていただき、明日からの活力にと受け止めた。

1月25日、幹事の矢田貝氏より開催通知を受けると旧友に出会う嬉しさにじっとしておれなくなるのだ。即矢田貝氏あてに回答ハガキ出状で足らず書状送付2通に始まって、年賀状交換の会友を中心に出席勧誘活動を。電話先1件、ハガキ、手紙出状先9通。そのあと札幌と秋田の残念ながら欠席者をはじめとする往復(わたしからは複)書簡6通出状した。当日までの来る日来る日の頭の中に、みんなとの出会いのことがチラツイテ離れないのだ。とにかく一通の開催通知が友恋し、故郷恋しにつながるのだ。当日、わたしは出会ったときから別れのときまで、男女を問わず元気をいただき、またあげるべく握手をして回った。みんなと語りきれるものではないし言葉は要らないと思った。

矢田貝氏への出欠回答ハガキ「60年母校への思いについて」との質問について、こみ上げる思いのままに1月26日夜作成して、同氏へ1回目(28日)下記出状した。対象を母校、会友、ヒトのみならず敗戦後2年目、民主主義教育移入に大忙しのかいばらという社会、当時の山川草木などにもイメージした。

60年前の「愛しき日々」に寄せて

あのころみんな　青く若かった
燃えていた　元気だった
新しさを求めて　一途だった
新しい学び舎に　魂を
汗をかいた　苦しい日もあった
一丸となって　駆け抜けた
「好きだ」「ありがとう」を
言う間もなかった　青春だった

翌28日は午前中、小松、矢田貝氏の説明で、織田藩陣屋跡と新装なった中学校を見学、同校正門左に同窓会友が植樹してくれた、梅檀の大木下で8名全員の記念写真撮影が嬉しかった。午後1時からは柏原駅構内の喫茶店で女子2名、男子4名による毎度の自由放談会も楽しかった。26日夜も2人の親友と夕食会もしたし、わたしにとって、これからの人生に価値ある出会いの連続であり、濃密な非日常活動だった。

(22・3・30日)

○4月21日付わたしの受信から始まる本誌編集部複数幹部氏との2回にわたる往復書簡の機会（わたしの既投稿文―某月某日分を省略し短くとの依頼の件）があり、2回目わたしからの返信時に便乗させていただいて、同部が本誌をコミュニティ（地域社会共同体）同好誌に舵を切る企画（郷里出身有名人の旅立ちの記を掲載されるとか）をされていることについて、場外より、とお断りして、以下私見を提言させてもらった。

折角の企画も、当時と時代は変化しており、メール、携帯等の万能の世の中にあって、読み手、書き手の意識も変わってきており、興味をもって読んでいただかないと、うわすべりとなり、冗費も嵩むので、諸企画実行と並行してアンケートを実施し、その結果を選択と集中をもって企画実行に反映されたい。貴重な会費納入済の会員の投稿予定スペースを、会費非納入の有名人のそれに占有されることは許されない。現況精査及びアンケート例として①新規入会会員動向（男女別、年齢別など）②寄稿者の年齢別寄稿動向、この10月、本誌配布時に回答ハガキアンケートを同封して③（企画に反映させていただくと断って）読者層分析項目、男女別、年齢層分析項目、又複数回答を可として④必ず読んでいる、また見ている箇所ベストスリーとかを記入してもらう⑤今後の期待企画として、参考にし、注目する関連記事について列記していただく。多いものから編集部が中に入って、会員中の専門家に寄稿してもらうなどなど。わたしの年齢層からの声としては、世界的に誰も経験したことのない超高齢化社会に突入しようとする世代への生き方目線を忘れない編集方針、企画であって欲しい。本日同部へ出状。

（22・5・3日）

○19年前の本誌6月号に、わたしは「ジーパン（ジーンズ）がよく似合う壮年でいたい（足が短く太いのでこれは無理か？）……」と認めた。悲願ともいうべきこの思いは、毎年真夏のハーフパンツ時期を除き、平時、年がら年中穿いている。たかがズボンされどズボンへの若い時からのあこがれは、戦後マカロニを含む西部劇映画と、その後輸入された刑事ものの主人公のジーンズ姿が嚆矢だ。6年前、長く堅い勤務生活から解放された反動からだろうか、わたしにはかっこいい、しなやかなしっかり感に、寒期は暖かく、暖期はさらっ

とした冷たさを感じる穿き心地がたまらなく好きなのだ。

ネクタイを締めることも少なくなった昨今、布地に使用色むらのある、ありのままの普段着の魅力があり、退化していく体力、体形に合致したズボンだと思う。コンビニ前や公園の花壇の縁石に腰を下ろす時などジーンズのほうが様になると思うのだ。

毎日繰り返す何げない、ささいな普通の生きざまのなかで、いつまでも忘れないおしゃれ心が明日へのわたしの活力のひとつだ。妻から先ず背中を伸ばすことだよと言われながら、今日、書中見舞い専用ハガキ30枚目出状最終日。（22・6・24日）

○今春購入した座右の銘研究会編の「座右の銘」に、スウェーデンのことわざ「貧乏人とは、少ししか持たない者のことではなく、たくさん欲しがる者のことである」に注目した。この補足説明に、「物質的にどんなに豊かになっても、精神的に貧しければ、人間として貧乏だ」と。さらに中国にも老子の「足るを知る者は富む」言葉もあると。

立川昭二氏『養生訓に学ぶ』より、貝原益軒は知足の理（ことわり）に「……足る事をしれば貧賤（貧乏で身分の低い様子）にしても楽しむ。足る事をしらざれば富貴をきわむれども、猶あきたらずして楽しまず。かくて富貴ならんは、貧賤なる人の足れる事をしれるにははるかにおとれり。」（以上、この項原文のまま）

さらに今日、買ったラジオ深夜便9月号に、分子生物学者福岡伸一氏が誌上対談で「……私たちの体は作り出すことより壊すことに熱心で、壊しては作り、壊しては、また作りの自転車操業を、常に危ういバランスをとりながら一生懸命やっているんです。つまり環境の変化や病気など、条件が変化しても変わらずにいる努力をしていること」以上の動的平衡論解説から説き起こされて、チョウの禁欲に学べで「……欠乏を恐れるあまり、食べ過ぎているんですね。……人間は、いわゆる足るを知ることが非常に苦手な生物となってしまいました」。そして結語として「……人間の営みもその中の一つなのですから、もう少し反省して、自分たちが作り変えたものに責任を負わなきゃいけない。人間も生物である以上、分をわきまえ、足るを知り、あまり強欲になってはいけないということです」と。

以上3冊（掲出文言）の共通のキーワードは「足るを知る」だ。異常気象環境、食糧、水をはじめとする諸資源の枯渇化と共に進行する地球、地球全生物への危機（それは将来必ずやってくる）を見聞する今年10月、日本で国際生物多様性年（ＣＯＰ10）が開催される。地球上の生物の中で我欲のままに君臨する人間は、今こそ、共生共存、分かち合い（シェア）の精神を発揮すべきと考えた。

（22・8・21日）

○スポーツクラブの大浴場や休憩室にて。3年位前から外語大卒の85歳の知人と、日常見聞する初めて出会った熟語や、面白いなと思った言葉を、お互いに「言葉遊び」をして友好を深めており楽しい。先ず回文から。「タケヤブヤケタ」「ヨノナカバカナノヨ」「ニクノオオイオオノクニ」「ミカズキズカミ」「カンサイジイサンカ」「ウツイケンシハシンケイツウ」など覚えやすいので、記憶力増進、脳内活性化に加えて、孫たちにうけ売りしている。

最近二人で交換し合った未知の言葉より。「地ローじぐち」。成句だけや単語の「もじり」ではなく、ことわざなどを同音あるいは、似た音を別の語に変えて表現する洒落。江戸時代に作られた鰤（ぶり）が通らば道理引っ込むは、「無理が通れば道理引っこむ」だ。わが国に近い大国の行動を評した「よみうり寸評」より。「包摂―ほうせつ」。ある概念をより一般的な概念の中にとり入れること。あれこれと政策概念を選択するにあたって、「手作りの多数を目指すしなやかな包摂の力こそが、いま求められる……」。

今月の朝日一面解説記事より。こうした遊びをしていると、諸記事の中で意味不明の言葉に、例えば「桎梏」しっこく（手かせと足かせ＝束縛）、「規矩」きく（人の行為の基準となるもの）、「宿痾」しゅくあ（痾は病気、長く治らない病気のこと）などに出会った時は嬉しい。好奇心が直ちに国語辞典に導いてくれて、ページを繰るのがとても楽しい。その他、スペイン語「セ・ラ・ヴィ」（それが人生）。仏語「エ・アロール」（それがどうしたの）。米語「テイク・イット・イージーイ」（気楽にいこうよ）など、記憶力持続、単語カードの作成活用と、談笑中にタイムリーに使い合って、いい気持ちになっている昨今だ。イチロー10年連続２００本安打達成日。

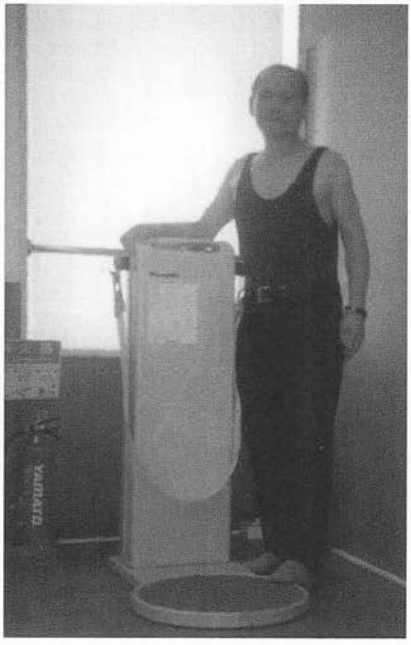
（22・9・23日）

○今年喜寿を迎える。わたしが毎朝乗車駅へ歩く途中、家からたまたま出てこられた見ず知らずの某老婦人と顔が合っての挨拶で、「お気をつけて」と声をかけられるようになったのは昨春からだ。それも二人から。60歳到達時から痛めている左足のふくらはぎの筋の痛みに加えて、腰の曲がりから来る歩き方（友人からは尻が出てるよ言われてる）を見てのことだと自己分析して謝辞を言う立場になった。そんな年になったのかと情けないが、歩けないよりいいかと諦観している。足の筋を傷めると大股で歩けなくなり、グイグイと引っ張るように歩いていた健常時と正反対に、今は妻の歩調について行くのが精いっぱいだ。今のところ左足の痛みは我慢出来るが、曲がっていく腰が許せなくて自分との闘いの毎日だ。階段の上りはそうでもないが、下りがつらく自称ガラスの左足として、慎重に仲良く付き合っている。それにしても労りの優しい言葉は嬉しい。

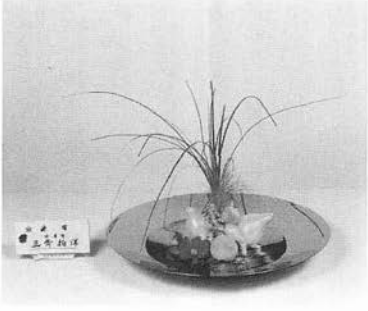
庭の紅・白・桃色の椿花が葉影から浮き出してきた送稿日。

（23・1・9日）

（昭和9年、柏原町生まれ／前・金融機関他勤務）



22年11月スポーツクラブにて



（いけばな・三觜拍洋）

◆浅野　智哉さん
先輩方にお会いしたく思っておりますが当日は仕事があり、今回は欠席でお願い致します。ご盛会をお祈りしております。

◆芦田　和代さん
当日は絵画勉強のため清泉女子大学に出掛けることになっています。申し訳ありませんが、宜しくお願い致します。いつもお世話になり有り難うございます。

◆安達健一郎さん
元気に暮らしております。講演を楽しみにしております。皆様のお世話でこのような機会を持てることに感謝しております。有り難うございます。

◆足立　明子さん
ご案内と山ざる誌うれしく拝見し、お骨折りに感謝致します。昨年は私事ながら両陛下の結婚50年祝賀会にお招きを受け、豊明殿で謁見させて頂きました。お優しい眼差しに接し、五十年を共にした一人として唯々頭が下がりました。この会にお伺いできますことを幸せに存じ楽しみにしております。

◆足立　敦子さん
当日他用がありまして失礼させて頂きます。ご盛会を祈っています。

◆阿部　穏子さん
主人が6月末に退職し、8月から住みなれた東京から新潟県へ引っ越しました。今回は欠席させて頂きますが、盛会をお祈り致します。

◆飯田　光雄さん
懐かしい丹波弁が飛び交う「ふるさとの会」楽しみにしています。

◆生田　清弘さん
ご案内有り難うございます。最近足の調子が悪く欠席させて頂きます。ご盛会と皆様の健勝をお祈り致します。

◆石田　勝彦さん
毎年ご案内を頂きながら失礼しております。何分遠路故ご了承願います。

◆井手　梅野さん
傘寿のお招きいただきありがとうございます。近年は失礼ばかりしておりますが、この度は喜んで出席させて頂きます

◆井本　宏行さん
いつもお世話になっています。持病のある愛犬と二人（？）暮らしでなかなか出掛けられません。

◆植木十和子さん
ふるさとの会のお知らせを頂き有り難うございます。今年も懐かしい皆様にお会いできますことを楽しみにしています。

会・員・だ・よ・り

◆榎本　康子さん
いつも欠席ですみません。ぼけ防止にペン習字等しています。今は今月14日の作品展に向け、作品に取り組んでいます。

◆大江　範子さん
いつもお世話様。そして「山ざる」を有り難うございました．懐かしい青垣町佐治の写真、柏原への通学路を思い出しました。足が最近悪い（と言っても骨折ではありませんが）ので、当日は欠席させて頂きます。ご盛会をお祈り申し上げます。

◆大垣　忠男さん
公共の施設で中高年を対象に社交ダンスを指導して20年になります。お蔭さまで健康です。

◆小笠　勝啓さん
会長より傘寿のご招待状を頂き有難く厚くお礼申し上げます。今年も11月27～28日に同期会が決まっており申し訳なくお詫びいたします。

◆荻野　哲男さん
18歳で上京し、無我夢中で働いてきて、ふと頭を上げると75歳になってしまったのが現実です。これからは少し郷土の人達とも会ってみたい気持ちも大ですが、今回は予定があり残念ながら欠席とさせて頂きます。

◆上村　邦子さん
ご無沙汰しております。いつも郷友会のためにお世話になっています。長野に住んで15年余りですが、根っこは丹波です。おかげで元気に暮らしています。皆様の良い時を祈っております。

◆河本　幸子さん
ご案内有り難うございます。村上氏の講演も拝聴したいところですが、当日音楽会に当たり、誠に残念ですが欠席させて頂きます．盛会を心よりお祈りしております。皆様に宜しくお伝え下さい。

◆菊池　洋子さん
欠席ばかりですみません。「山ざる」は大変興味深く拝見しております。

◆喜田　綾子さん
「山ざる」楽しみに読ませて頂いています。年のせいか思うように身体が動いてくれません。どうぞ皆様もくれぐれもお体を大切にお暮らし下さい。

◆木寺　昭三さん
今夏、義母木村つた江が肝細胞癌で亡くなりました（享年91歳）。10代で上京し波乱の人生でしたが、自らの意志で一度も入院せず自宅で最期を迎えました。自立という言葉にふさわしい義母でしたが、郷里の方々とのお付き合いをいつも楽しみにしており、また心の支えでもあったと改めて思い起こしています。会長さんはじめ皆様のご

厚情を感謝し厚くお礼申し上げます。

◆絹川　正さん

今春、知人より郷友会のことを知りました。是非「ふるさとの会」に出席させて頂きたいと思っていましたが、残念です。来年は出席させて頂きたいと思っています。

◆久保　知義さん

お招き有り難うございます。年のせいで体調思わしくなく欠席させて頂きます。盛会をお祈りしております。

◆久保　良雄さん

当日はどうしても出なければならない会合があり、申し訳ありませんが欠席させて頂きます。皆様に宜しくお伝え下さい。

◆小谷　崇さん

10／19に旧柏中44回の同窓会が柏原であり行くつもりです。私達は戦争の影響を真正面から受けた世代です。若い世代に「戦争は絶対にしてはならない」「平和憲法9条を守ろう」という思いを伝えたい気持ちは共通と思います。

◆斎藤　陽子さん

いつもお誘い有り難うございます。毎日元気にしております。当日は小学校の同窓会で丹波へ帰省中となり、残念ですが欠席です。皆様に宜しくお伝えくださいませ。

◆坂上　五朗さん

いつもご配慮感謝致しております。ふるさと丹波のことはパソコンで情報を得ています。便利な世の中です。ご盛会をお祈りいたしております。また事務局の皆々様のご健勝を祈念いたしております。

◆坂上　登さん

「山ざる」を手にした日、奇しくも氷上町の竹馬の友より「丹波栗」を頂いた。秋の夜長、ふるさとの味覚を堪能し、ふるさとに思いを馳せながら「山ざる」を拝読する。郷友会編集委員の諸兄のご精励とご健勝を心から祈念申し上げます。

◆笹倉　鉄平さん

当日は長期出張中のため伺うことが叶わず残念です。ご盛会をお祈りいたしております。

◆笹倉　良正さん

毎年「山ざる」誌をなつかしく拝読しています。都合で欠席させて頂きます。盛会をお祈りしております。

◆里　收さん

「ラジオビタミン」は気持ちが良く、村上様のお話は聞きたいのですが、当日別件があり欠席させて頂きます。

◆澤田みさをさん

いつもお世話になり感謝しておりま

す。会には残念ながら出席出来ませんが、会誌を懐かしく拝見しております。ご盛会をお祈りします。

◆正呂地　悟さん
ご盛会をお祈りいたしております。「山ざる」毎号楽しく拝読させて頂いています。

◆鈴木　和栄さん
「ふるさとの会」へのお知らせ、嬉しく存じます。今年は是非出席させて頂くつもりです。楽しみに致しております。村上氏の講演とのこと、毎朝お声を聞いていますので身近にお目にかかれることを楽しみにしております。

◆勢　正彦さん
事務局様いつもご苦労様です。ご案内有り難うございます。残念ですが予定が入っており欠席致します。益々のご発展ををお祈り致します。

◆瀬々　妙子さん
随分ご無沙汰してしまって敷居が高かったのですが、従姉のすすめで決心しました。前田和市さんや可部さんと同じ精進をしています（足許にも及びません）。遅刻しますが、宜しくお願い申し上げます。

◆大録　和代さん
毎年お便り本当に有り難うございます。高校生の息子の行事に参加のため残念ですが、今年も欠席させて頂きます．毎年不参加で申し訳ありません。

◆高田美佐子さん
近頃めっきり階段の上り下りが難儀になりました、年は争えないと諦めたくありませんが、諦めざるを得ません。

◆高橋世志子さん
お誘い頂き有り難うございます。足の具合が悪いものですから欠席させて頂きます。皆様に宜しくお伝えください。有り難うございました。

◆竹中紀代子さん
ふるさとの益々のご発展をお祈り申し上げます。お世話してくださる方々いつも有り難うございます。

◆田中　清昭さん
仕事の関係で出席出来ず。幹事さんご苦労様です。

◆谷　敬三さん
当日は法事が有り、どうしても調整が付きません。皆様に宜しくお伝え下さい。

◆谷垣恵美子さん
土曜日はあいにく都合が悪く欠席致します。

◆谷垣　邦夫さん
なかなか公私ともに忙しく、今回も

都合が付けられません。申し訳ございません。

◆千葉　淳子さん
いつもお世話様でございます。郷友会の発展と皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

◆常岡　幹彦さん
ご招待有り難うございます。折角のご案内ですが、不本意ながら欠席させて頂きます。ご盛会を願っています。

◆鶴田ゆき子さん
所用のため欠席致します。ご盛会をお祈り致します。

◆出町　京子さん
岡山県で開催される国民文化祭や神奈川県の舞踏会など、秋は行事が多くて今年も出席出来ず残念に思います。亡くなられた吉住様、木村様に心よりお悔やみ申し上げます。

◆富田　貞子さん
いつもご案内頂きまして有り難うございます。今回は都合が付かず欠席させて頂きます．皆々様のご健康とご盛会をお祈りしております。

◆西川　宣孝さん
古稀を記念して佐治小学校の同窓会（昭和30年卒）を東京で1泊2日で催しました。26人が童心に返り、東京タワー、浅草など都内観光を楽しみました。機会があれば「山ざる」に同窓会裏話など寄稿したいと思っています。

◆野村　節三さん
東京から三陸へ移住して34年、すっかり当地に溶け込んだ毎日です。今年は数年ぶりに出席、会員の皆様に会えるのが楽しみです。

◆畑　雅樹さん
「山ざる」41号拝読しました。懐かしく故郷を思い出しました。有り難うございました。所用があり、欠席させて頂きます。

◆浜田美代子さん
3人目の孫が生まれて何かと忙しくしています。日ごろのお稽古の発表会がございまして……。つくづく年を考えるようになりました。

◆廣瀬　安伸さん
いつもご案内有り難うございます。今回は家内ともども知人達と千葉へ旅行に行っています、申し訳ありません。10月23日、銀座での笹倉鉄平版画展に家内と行って来ました。素晴らしかったです。

◆藤岡　洋子さん
毎年「山ざる」をお送り頂いて有り難うございます。今年こそは出席させて頂こうかと思っていましたが、都合が悪くなり残念に思っております。

◆藤田　徹さん
いつもお世話になります。不景気も極まり生き残りをかけて合併しました。一兵卒にて頑張ります。会社広告も止めてすみません。

◆古川　悦子さん
昨年、長女の近くに転居しました。

◆古谷　浩樹さん
いつも「山ざる」を楽しく拝読させて頂いています。

◆細川　倫夫さん
他用と重なり欠席させて頂きます。小生変わらず元気に過ごしております。

◆細見　充彦さん
お世話になります。今年も楽しみに参加致します．本年3月末に36年勤めた会社を早期退職し、現在充電（兼放電）中です。

◆本城　英明さん
いつもお世話になり有り難うございます。今年は下肢静脈瘤の手術を3回行いました。まだ遠出は出来ませんが、当日は出席したいと思っています。

◆前田　軍次さん
11月に逝去しました。生前のご厚情感謝致します。（奥様より）

◆前田　和秀さん
最近は心不全、腰部脊椎管狭窄症で歩くのが苦痛になり、車で行けるところだけ出席しています。久しぶりで今回は出席してみようかと思います。車で行きます。

◆前田　武彦さん
都合により欠席いたします。宜しくお取り計らいください。ご盛会を祈っています。

◆水谷　正寛さん
ふるさとの会が盛会のなりますよう、そして会員の皆様のご健勝をお祈りします。

◆森本　浩さん
「山ざる」誌を拝読させて頂き、誠に有り難く思っています。編集委員の方々のご苦労は大変と感謝するのみです。遠くにいながら故郷の様子ほんとに懐かしく、今回は前山村の様子にびっくりしました。私も大原神社の直ぐ下に住んでいました。今後とも宜しくお願い致します。皆々様のご健康をお祈りします。

◆八木　信行さん
お世話になっております。当日は学務の関係で欠席させて頂きます。

◆安原三智子さん
急に寒くなり驚いています。残念ながら当日、地域の防災訓練があり、救護衛生班の班長なので欠席できません。失礼させて頂きます。皆様に宜し

くお伝えください。

◆山岸　幸子さん

ふるさとの会の参加を楽しみにしております

◆山口　和久さん

近況はマイブログ「山ちゃん5963」に詳しいですよ。来年は定年です。それからは丹波に帰り、在郷会員として頑張りますので、宜しくお願い申し上げます。

◆山口　敏之さん

母が一人なので年に4～5回帰省しています。望郷の念は益々強くなっていきます。ふるさとが有ることが幸せであると強く感じるこの頃です。

◆吉住　政子さん

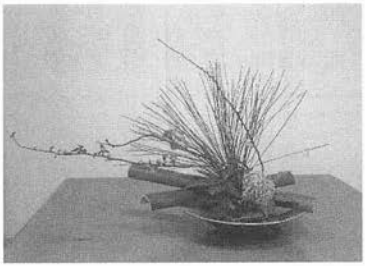
生前はいろいろ御世話になり本当に有り難うございました。主人重造逝去に付き総会に一人で参加できませんので、退会をさせて頂きます

◆吉竹　覚さん

ウオーキングの役員をしておりますので申し訳ありません。例会とバッティングしなければ出席します。

◆若森　敏郎さん

「山ざる」41号を拝読しました。編集の充実ぶりに驚いています。小生も本号会員便りで表明しました米寿になったら何か書こうとの意欲を新たにしております。



（いけばな・三觜拍洋）

◆訃報

平成22年10月から23年8月までに事務局にご連絡いただいたものです。掲載して謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

足立　勲平　平成22年12月14日4
石井　　弘　平成20年
大川　貞子　平成19年
岸本　眞輔　平成18年
久下　泰子　平成21年
椙田　廣子　平成22年9月30日
曽野津美恵　平成23年1月
高畑　八郎　平成22年4月7日
田中久仁彦　平成22年11月16日
長沢　淳子　平成22年3月
前田　軍次　平成22年11月
松本　雅子　平成22年
松本　一也　平成22年
村上　末吉　平成23年6月19日
山中　秀雄　平成23年3月27日

◎寄附者芳名

兵庫県東京事務所殿　一〇、〇〇〇円
渡辺　隆男殿　一三、〇〇〇円
岸本　勲殿　一〇、〇〇〇円
村上　末吉殿　一〇、〇〇〇円
足立　和孝殿　八、〇〇〇円
梅田　重二殿　五、〇〇〇円
岡林　逸男殿　五、〇〇〇円
荻野　武殿　五、〇〇〇円
谷口　捷殿　五、〇〇〇円
中居　篤子殿　五、〇〇〇円
渡辺貴美子殿　五、〇〇〇円
芦田　拓雄殿　三、〇〇〇円
足立　明子殿　三、〇〇〇円
足立　吉雄殿　三、〇〇〇円
生田　清弘殿　三、〇〇〇円
上野　重喜殿　三、〇〇〇円
大野　義昭殿　三、〇〇〇円
大録　和代殿　三、〇〇〇円
岡本　昌子殿　三、〇〇〇円
荻野　巨舟殿　三、〇〇〇円

絹川　正殿　三、〇〇〇円
古倉　徹夫殿　三、〇〇〇円
笹倉　鉄平殿　三、〇〇〇円
高見嘉都司殿　三、〇〇〇円
谷垣　尚殿　三、〇〇〇円
谷口　浩章殿　三、〇〇〇円
鶴田　宏・ゆき子殿　三、〇〇〇円
南部　光殿　三、〇〇〇円
野村　節三殿　三、〇〇〇円
藤田　千治殿　三、〇〇〇円
藤田　純殿　三、〇〇〇円
三浦　セツ殿　三、〇〇〇円
山口　和久殿　三、〇〇〇円
吉竹　覚殿　三、〇〇〇円
渡辺　昌彦殿　三、〇〇〇円
足立美都子殿　二、〇〇〇円
井出　恭子殿　二、〇〇〇円
久下　誠殿　二、〇〇〇円
小林　和子殿　二、〇〇〇円
時里　孝子殿　二、〇〇〇円
畑　雅樹殿　二、〇〇〇円
山口　泰男殿　二、〇〇〇円

稲岡　俊一殿　一、〇〇〇円
植田　茂樹殿　一、〇〇〇円
大坪　則夫殿　一、〇〇〇円
岡田　充利殿　一、〇〇〇円
小松　京子殿　一、〇〇〇円
坂上　勝朗殿　一、〇〇〇円
坂上　豊殿　一、〇〇〇円
正呂地　悟殿　一、〇〇〇円
勢川　武彦殿　一、〇〇〇円
高見　秀史殿　一、〇〇〇円
田中登喜子殿　一、〇〇〇円
原　利充殿　一、〇〇〇円
本庄　孝行殿　一、〇〇〇円
本城　英明殿　一、〇〇〇円
三浦　宏殿　一、〇〇〇円
村上　高廣殿　一、〇〇〇円
徳田直三郎殿　六〇〇円
上　高子殿　五〇〇円
大石佐代子殿　五〇〇円
小糸　イキ殿　五〇〇円
塩見みつゑ殿　五〇〇円
千葉　淳子殿　五〇〇円
安原三智子殿　五〇〇円

■会員が書いた本

浅野智也著『TAJOMARU』

講談社発行

二〇〇九年秋、この題名の映画か封切られるや、ヤングの行列が東急系映画館前に出現した。カッコイイ主人公の（新）多襄丸に、少年時代から歴史物TVドラマで活躍してきた小栗旬、中年のオッサン足利義政に、新聞の社会面を度々賑わしてきた萩原健一を配した中野裕之監督によるこの作品は、室町時代を舞台とするハードボイルド活劇だ。勝利の栄冠は、正義でも権威でも市民運動でもなく力によって勝ち取られる。米国映画には掃いて捨てるほどあるシナリオだが、最近の邦画では暴力はイカンと自粛の対照に。

この名画の封切りを前にして、よりよき理解のために講談社から「ノベライズ」されたのが本書であり、「キン肉マン2世」や「怪傑蒸気探偵団」のライターとして一世を風靡する浅野さんに著者としての白羽の矢が立った。しかし、著者といっても自由奔放に書けないので難しい仕事である。シナリオは市川森一・水島力也の原作で出来上がっているから逸脱は許されない。

基本となるのは芥川龍之介の「藪の中」で、その前後の物語を大胆に創作した脚本である。足利将軍を支える管領職を務める畠山家の次男は、資産家である大納言の一人娘を許婚として楽しい毎日を送っている。家督は兄が継ぐはずだし、奪う意思も無い。ところが大納言から「お小遣い」を貰っている義政が、「同家の娘を娶る息子を畠山家の世継とせよ」と内政干渉してきたので、ややこしくなる。

悪人どもを切り倒し、彼女を庇いながら都から逃れた次男は、どうやら丹波らしい山中で盗賊、多襄丸と出会い一戦を交えるが簡単に負けてしまい、樹に縛り付けられ、最愛の彼女も「強き者」の腕に身をゆだねる。あまつさえ「あの男を殺して下さい」と盗賊に懇願するではないか。さあ、我らの主人公の運命は……。

男女ともに十代で結婚する時代に主人公が二十代の許婚とデレデレしていたり、「武者」ならぬ「武装兵」が現れたりで、伝統的歴史書を愛読してきた方には違和感があるかもしれませんが、強き者を称えるハードボイルド本の久しぶりの刊行と若き著者の健筆を称えようではありませんか。

（徳田八郎衛）

■郷土について書かれた本――

竹内正浩著
日本の珍地名
文芸春秋／定価本体790円

誰も読めない難解な地名や、誰もが笑いだす珍地名を扱う書籍や解説は、明治大正時代から枚挙に暇がない。だが本書は、オーソドックスな意味での珍地名ではなく、平成の大合併で登場したひらがな地名や難解地名を取りあげ、その命名の背景を探っていく。その決定過程を心情的には理解しながらも、名前の内容や決める駆け引きに呆れかえり、最近のゆきすぎた「地方性善説」に基づく地方分権論に警鐘を鳴らす。そして、これら市町村合併劇に出てくる低レベルの話や地方のボスが行政を牛耳る方向が進むのではないかと案じる。

あれと似たような本だなあ、と本誌38号の小欄を想い出して下さる読者がおられたら感激である。そう、今尾恵介著『「平成の大合併」で日本地図に大異変！』とほぼ同じ内容である。だが本著ならでは、の解説もある。なぜ、ひらがな地名が続出したのか。それは合併する相手に遠慮し、天下に名の通った霞ヶ浦町や芦原市、竜野市等が、かすみがうら町、あわら市、たつの市と改名し、合併相手に「併合ではないよ」という態度を見せたからだ。

また米原（まいはら）市を取りあげ、国鉄の駅名が「まいばら」とされてきたのは、現地確認を怠った明治時代の行政の過ちであると指弾する。旭川市に旭川（あさひがわ）駅が存在し、本来は「かまこおり」と呼ばれてきた土地に蒲郡（がまごおり）駅が登場するのも、行政の調査怠慢によるものだ。仕方がないので昭和の市制施行で蒲郡市は「がまごおり」を正式名に採用する。福知山線の丹波大山駅や石生駅も、この類だろうか。地元では「おやま」、「いそ」と短く発音する。また谷川駅は、「たにかわ」と命名されているが、地元では濁音で呼んでいるようだ。

丹波町も合併相手に遠慮して京丹波町と変名したのだが、この解説で丹波市が紹介され、コテンパンに叩かれる。「丹波市の誕生が、京都府をはじめ、全国的な反発を買うという〝事件〟があった。（中略）兵庫県側の丹波は人口・面積ともに旧丹波国の二割にも満たない。にもかかわらず国名をそのまま名乗ったのが兵庫県側だったことで問題がこじれたのである（後略）」実は評者も京都府下で公然と非難されたことがある。

（徳田八郎衛）

■郷土について書かれた本――

週刊新潮
二〇〇九年九月二四日
『わが街日常遺産』

以前にも記したが、本欄では読者が入手できる商業出版の、原則として単行本を紹介している。雑誌では時宜を逸すると中々入手できない。だが天下の「週刊新潮」であれば、近隣の公共図書館で閲覧できるかもしれないので敢えて紹介する。

柏原の木の根橋を紹介した書籍は本欄でも幾つか取り上げてきたが、「週刊文春」に次いで発行部数の多い「週刊新潮」で、しかも日常遺産として紹介されたのはご同慶の至りである。

実は終戦の年から翌年にかけて多くの児童が親戚を頼って柏原へ疎開していた。いわゆる縁故疎開である。崇広小学校卒業者に「こんな人が居たのを知ってる?」と訊ねても、たいていは「そんな子が居たかなあ」と冷たい返事が返ってくる。

だが、疎開児童の方は柏原を忘れていない。この「週刊新潮」を読むように知らせたら、「懐かしくて涙が浮かんだ」人もいた。母親が奥谷川で洗濯していたのを想い出した人もいた。柏原育ちよりも愛着があるのかもしれない。

（徳田八郎衛）

丹波市

近くの神社境内から見たカヤキ

わが街日常遺産 ㉑ 木の根橋

兵庫県の中東部に位置する丹波市柏原町は、東西と南の三方を山に囲まれた穏豊かな城下町だ。柏原藩を治めた織田家ゆかりの陣屋跡など、江戸時代の史跡が残る町の中心に、樹齢100年と推定される大ケヤキが枝を広げている。樹高はおよそ21㍍。見上げるような大木だが、驚くのはその根の形だ。地面から真横に向かって伸びた太い一本の根が、すぐ下を流れる幅8㍍ほどの奥村川をまたいで、対岸の地下に食い込んでいる。根が橋のようになっていることから、「木の根橋」と呼ばれる。

どうしてこうなったのか、一説には何百年もかけて大ケヤキの根が伸びていった後に、根の下にかしずっくのはその根の形だ。地面から真横に向かって伸びた太い一本の根が、もいわれる。ケヤキは水を好む性質なので、水辺で大きく育つことはあるが、このように水面で根が伸びた例は全国的に見ても珍しいだろう。

昭和45年に県の天然記念物に指定されたが、同時期から樹勢に衰えが見え始め、日本樹木保護協会による治療が実施され、その助言に沿って路面を透水性のあるものに変え、また、もともと川に流してあった土機に沿って、根が少しずつ伸びたと一部が撤去。この活動がきっかけになって、翌年、柏原町で第1回「巨木を語ろう全国フォーラム」が開催された。これは今年で23回目を迎える全国規模の活動となっている。その後も枯れ枝やコケの切除、樹木医による治療や支柱の設置など、さまざまな努力が続けられた結果、現在、樹勢は回復、町のシンボルとして今後も大切に守られていくに違いない。

第13回 芥川賞受賞!
磁崎憲一郎
終の住処
ついのすみか
妻はそれきり十一年、口を利かなかった。
現役商社マンの著者が覚醒した眼差しで描く、リアルで不可思議な時間。
*定価1,260円(税込)
大増刷!!
三十を越してから結婚した男女の、淡く儚たなまの歳月。ガルシア=マルケスを思わせる感覚で、人の至不幸を刺繍して流れてゆく時間を、この世の理不尽とあるがままに描ききだす。受賞第一作「ペナント」収録。
新潮社

平成23年度柏陵同窓会 東京支部総会・懇親会開く

平成23年度の柏陵同窓会東京支部総会・懇親会は平成23年6月25日(土)「八重洲富士屋ホテル」にて開催されました。3月11日の未曽有の東日本大震災により長年利用していた「九段会館」が使えなくなり一時は開催が危ぶまれましたが、幸い新しい会場も見つかり、無事開催することが出来ました。

今年の担当幹事は昭和40年卒・17回の皆様。予期せぬ東日本大震災の発生で総会までの間大変苦労されたようですが、皆さんのご努力で当日の柏陵セミナーは大変意欲的企画で、懇親会も大いに盛り上がりました。

谷口支部長挨拶

当日は母校の深田校長、同窓会本部芦田会長、石川副会長、阪神山下・東海畑・京滋山名各支部長・代理、東兵庫県東京事務所長、今年も沢山のお酒をご恵贈頂いた西山裕三西山酒造場会長、荻野丹波新聞社社長のご来賓、他支部からの参加者を含め総計130名と昨年より多くの懐かしい顔が集まりました。平成に入ってからの若い卒業生が初参加の2名を含め4人も参加してくれました。

梅津浩平氏のセミナーに熱心に聴き入る出席者

総会では冒頭この度の東日本大震災で亡くなられた方及び会員でこの1年間に亡くなられた方に「黙とう」を捧げました。支部長挨拶では東日本大震災被災地在住会員向けに同窓会本部芦田会長名で素早く安否確認の手紙を出していただいたことに感謝するとともに、東京支部としても関東氷上郷友会と連名で被災地会員176名宛にお見舞い状を出したこと、幸い今までに会員で亡くなられたとの情報はないことを報告いたしました。

今年の総会は決議事項がなく会務・会計報告が異議なく承認されました。

恒例の柏陵セミナーは「カルチャー三題」と称して①幹事学年17回生　元

三菱化学執行役員で薬学博士の梅津浩平さんから「バイオ医療分野における現状と課題」と題した講演、②同じく17回生　頼澤豊さん作曲の現代音楽「デカルコマニー」のフルート演奏（演奏は三田学園・東京芸大卒でプロのフルート奏者　増本竜士さん）、③同じく17回生　写真家　木下修さんの「ふるさと柏原」と題する写真展が開催されました。

山下阪神支部長の乾杯の音頭で始まった懇親会は途中に「ふるさと近況」と題して石川同窓会副会長・兵庫県会議員と荻野丹波新聞社長からスピーチいただいたほか44回生　ライターの浅野智哉さんから東日本大震災被災地支援のために出版された自身も含め17名の「わたしの3・11」と題する本の紹介、初参加で57回生　オペラ歌手大槻朱里さんの自己紹介等を挟んで時を忘れた4時間の最後は校歌・応援歌・一本締め、思い出の1ページとなるテーブル毎記念写真を手に、来年の再会を約しての解散となりました。

来年度の総会・懇親会は6月23日（土）の開催です。より多くの同窓の皆様のご参加をお待ちしています。近年関東に来られたご友人・お知り合いがおられましたら事務局までお知らせください。

なお、柏陵同窓会東京支部のホームページを、この6月リニューアルしました。是非ご覧ください。

（支部長・谷口浩章　15回生　氷上町出身・記）

同好会

◉氷上ゴルフ同好会、回を重ね次回は123回目を迎えます！

年4回開催で実に31年の歴史を誇る我が「氷上ゴルフ同好会」。熱心な会員の皆様に支えられ、どんどん記録を伸ばしています。どのゴルフ場も歴史

第120回大会の参加者

のある氷上会に驚きの声でご協力を頂き、いつも胸を張っての開催です。

現在会員数50余名（グロスは70点代～130点代といろいろです）。例会は名門ゴルフ場での安いプレー代を心がけ、茨城、千葉、埼玉、神奈川等と会場を回りながら年4回の開催で、各回の参加者25名前後で推移しています。

丹波他の地域にお住まいの同好者にも声を掛けながら、他地域との交歓も更に進めていきたく思っています。このところ参加会員数が減少傾向にあり、若い会員の増強をお願いしているところです。

丹波弁が楽しいゴルフ会です。都合の良い会場の時だけでも参加されませんか。新会員大歓迎です。気楽にお声を掛けて下さい。

この1年の成績は次の通りですが、大会の雰囲気のスナップや成績は下記のホームページを御覧下さい。

○第120回　平成22年9月10日／水海道ゴルフクラブ

優勝　塚口　恭一
2位　赤井　紀男
3位　藤田　純

○第121回　平成22年12月3日／阿見ゴルフクラブ

優勝　荻野　智司
2位　山田　良一
3位　近藤　仁司

○第122回　平成23年3月10日／森林公園ゴルフ倶楽部

優勝　松岡　昭宏
2位　堀　博之
3位　安達　健一郎

○第123回　平成23年6月／東日本大震災により流会

http://www.pcc-taiyo.co.jp/hikami
又は「氷上ゴルフ同好会」で検索して下さい。

氷上ゴルフ同好会事務係　岡　吉明
電話　048-460-1601

展覧会

◉可部美智子陶展

本誌「山ざる」の表紙を毎回飾っている可部さんの作陶展が、この7月27日～8月2日まで、新宿小田急百貨店「アートサロン」にて開催された。

「万葉の頃から今に至る子供の情景を創り続けて個展50回を重ねました」と書かれた案内状を手に会場を訪れ、まず驚いた。すっかり作品に溶け込むようにして笑顔でお迎え下さった可部さんは、矍鑠としていらして80歳を目前にした方とは到底思えない。

沢山の作品はどれも、ふっくらとしてあどけなく、みな上を向いている。どうしてなのかと伺うと、「うつむきのは人は好まれないから」とか。見上げる目の先にあるのは、希望か、祈り、それとも悲しみなのかと、あれこれ想像を巡らせてしまう。中に一体、坂上会長にそっくりな童が。坂上さんの幼い頃に思いを馳せるとつい頬が緩む。

同時に展示された多くの食器は、どれもモダンで若々しい。お話し中、美しい笑顔の歯に話が及ぶと、全部ご自分の歯であるとのこと。中は空洞なのに十分重い作品を（私には重すぎて抱き上げるのも一苦労）、成形し焼成する行程を、全部お一人でこなしていらっしゃる原動力が判明。その上、若さを保つお化粧法まで伝授して頂いた。

心身ともに今も乙女のような可部さんにあやかりたいと願いつつ、晴れやかな心持で会場を辞した。

（藤原ひさ子・記）

丹波なた豆茶

なた豆のお茶で健康づくり

丹波産なた豆 100%のなたまめ茶

腎臓機能回復やアレルギー症状を和らげるお茶

こやま園

丹波市春日町黒井 1972　　TEL 0795-74-2152

http://natamame.jp/

今、求められている

新しいスタイルの物流トータルサービスをあなたに

情報誌・ＳＰ販促物などの梱包・発送管理、ＤＭ発送
データ入力等の情報処理、コールセンター、
事務局代行、在庫管理など一連業務を代行いたします

いつでもよりよいサービスを

BTS 株式会社ベターサービス

代表取締役　絹川　正（山南町池谷）

本社：〒262-0003 千葉市花見川区宇那谷町 1501-2
TEL：043-257-0414　FAX：043-257-2865
http://www.betterservice.co.jp
e-mail：kinugawat@betterservice.co.jp

❖ 本誌にご協力有難うございました

① 丹波新聞　嘱託記者「丹波人ＮＯＷ」のコラムニスト
http://tanba.jp
② 認定ＮＰＯ法人アジアの新しい風・理事長代行
http//www.npo-asia.org

上　　高　子（氷上町出身）

〒 154-0016　東京都世田谷区弦巻２－１８－２２－４１４
TEL ／ FAX 03 － 5426 － 6714
e-mail　takako-ue@t05.itscom.net

①在京の丹波人をインタビュー取材しています。取材対象についてお心当たりの方はお知らせ下さい。
②アジアの有名大学で日本語を学ぶ学生を支援する NPO です。
国税庁によって認定 NPO に認定されました。当 NPO への寄附金は、確定申告をすることで、税額控除の対象になります。
すなわち、寄付総額から2000円を差し引いた金額の40％が税額より差し引かれます。**ご入会者ならびに寄附金募集中！**

akeland

エクステリア専門商社

株式会社 トコナメエプコス

代表取締役　広 瀬　寿 和（山南町和田）

〒160-0003　東京都新宿区本塩町23 第２田中ビル
TEL 03－3354－0211　FAX 03－3354－7767

柏13回・はくとみかい

柏高 昭和36年卒　氷上ゴルフ同好会会員

安達　巧
上野　忠明
大賀　勝恵
大野　冨士夫
岡　吉明
荻野　智司
山田　良一

あなたの町の「石屋さん」
そんな石屋をめざしています！！

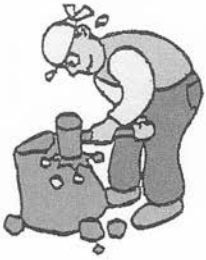
墓石・霊園・建築石材・造園石材

(株) 丹波総合石材

代表取締役　堀　公二　柏高 昭和36年卒

いしやは　ここよ

0120-1480-54



工場・事務所　TEL 0795-72-3032
FAX 0795-72-4343

丹波市柏原町母坪425　http://www.tanba-sekizai.com

❖ 本誌にご協力有難うございました

自動車補修部品販売

株式会社　京　浜

代表取締役社長　上武　正次　柏高 昭和 36 年卒

本　社　〒292-0826　千葉県木更津市畑沢南 1-2-37

TEL 0438-36-2111(代)
FAX 0438-36-2107

営業所　市原営業所・千葉営業所

株式会社　アイ・ケイ・アイ　I.K.I co.,LTD

株式会社　ホームワールド

Urban Cocoon 「風を感じる時」

暮らしに潤いと幸福感を提案・都市生活者のオアシスの店

インテリアブリックス・アパレル・雑貨全般

輸入卸＆生産管理　＆　小売り

代表取締役社長　岸田　勇　柏高 昭和 36 年卒

東京都中央区日本橋人形町 3-7-10 Doll3

TEL 03-3249-5261 / FAX 03-3249-5262

本誌にご協力有難うございました ❖

みんなで作るから楽しい

みんなの掲示板

読者どうしで情報交換。
▽譲ります・譲ってください
▽メンバー募集▽ボランティア募集ーなどなど。

自由の声

あなたの主張やメッセージ、「ちょっと一言」など、どしどしお寄せください。

ふるさとクイズ 丹Q

丹波地方に関するクイズです。

ケータイでパチリ

ケータイカメラで撮った“あなたのベストショット”写真を紙上に!!。家族、ペット、花、身近な風景…などなど、コメントと一緒に『Let's 送信』。
アドレスは patiri@tanba.jp

同窓会ひろば

同窓会でのひとときを紙面で紹介します。簡単な文章と、写真を送って下さい。
いい記念になりますよ。

関東からのご応募を歓迎します

丹波新聞社

〒669-3309 丹波市柏原町柏原201
tel.0795-72-0530 fax.0795-72-1956
Web http://tanba.jp E-mail tanba@tanba.jp
週2回(日・木)発行 1ヶ月1,220円(郵送料200円)

あなたの本つくりませんか

自分史 ・評伝 ・記念誌 ・小説 ・エッセイ ・句集 詩歌集 写真集

弊社は長年、自分史の制作を手がけております。
自費出版のご希望がございましたら、お気軽にご相談下さい。

安価で明瞭な35万円システム

少部数でも費用は安心！
A5判 100ページ・100部の印刷で

判 型：A5判 (タテ21cm．ヨコ14.8cm) 頁 数：100ページ
部 数：100部／組み方：10ポ×40字×16行 (標準・1ページ640字)

時代と共にあなたの歴史
自分史年表
書く・読む・調べる便利な歴史年表
定価 1,800 円 (税・送料込)

これから書き継ぐ生活ノート
メモリー50
1年2頁、50年間書ける気軽なメモ帳
定価 1,800 円 (税・送料込)

株式会社 ホンゴー出版
〒247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町1-1-1
TEL045(895)2712 FAX 045(895)4338

❖ 本誌にご協力有難うございました

ふるさと丹波での少年時代の感動を
ヨーロッパの風景画にたくして…

笹倉鉄平 ヨーロッパ旅の画集

全国書店にて取り扱っていただいておりますので、
ご高覧いただければ幸いと存じます。

昭和49年卒 ／ 画家 笹倉鉄平

公式ホームページ　http://www.teppei.net/

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますよう願い上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、〝丹波のきずな〟の強さを思います。

（山ざる編集部）

本誌にご協力有難うございました ❖

芦田重秋

足立かをる

あだち眼科院長／医学博士
順天堂大学眼科　非常勤講師
足立和孝
〒347—0015
加須市南大桑字下鳩山一六二〇—一
TEL〇四八〇—六五—五九八八
FAX〇四八〇—六五—六〇九七
E-mail : kazu358@pastel.ocn.ne.jp

東京都渋谷区日中友好協会理事
日産労連・エルダークラブ幹事
広範な国民連合・東京世話人
EMネット埼京理事
足立和巳
〒183—0051
東京都府中市栄町一—一五—二七
TEL・FAX〇四二—三六四—七二二七

株式会社ナレッジリンク
足立国際会計事務所
代表取締役
税理士・米国公認会計士(Certificate)
足立知佳子
〒152-0035
東京都目黒区自由が丘一—一三—四 藤タワービル六〇二
TEL〇三—三七二八—八〇四七 FAX〇三—三七二八—八一四七
E-mail : cadachi@ala.gr.jp

足立静雄

❖ 本誌にご協力有難うございました

飯田光雄
〒285—0025
佐倉市鏑木町九八一—一—一〇四
電話〇四三—四八五—〇五〇三

生田清弘
東京都世田谷区成城一—七—七
電話〇三—三四一五—一八九三

井本義一

上野重喜

氷上郷友会監事
臼井小五郎
（丹波市氷上町絹山出身）
〒275—0025
習志野市秋津二—一—四—五〇二
TEL〇四七—四五三—八八五七

有限会社 PPC大洋
岡吉明
〒351—0014
朝霞市膝折町四—四—三〇
TEL〇四八—四六〇—一六〇一
FAX〇四八—四六〇—一三九七
http://www.ppc-taiyo.co.jp

本誌にご協力有難うございました ❖

岡田昌子

岡林逸男
〒177—0051
東京都練馬区関町北二—七—一七

荻野哲男
〒350—1331
埼玉県狭山市新狭山三—一〇—三二
電話〇四二—九五三—八五七一

梶原清
やす子

金出一郎

木呂子恵美子

❖ 本誌にご協力有難うございました

久保春雄
〒300—0031 土浦市東崎町十三—二—六〇四
電話〇二九八—二二—二九七八

栗田功

近藤仁司
〒112—0012 東京都文京区大塚二—四—八—五〇一
電話 〇三—三九四三—九一一五

坂上勝朗

坂上登
山口泰男
仲一聰
仙台市在住

合唱指揮者
笹倉強
〒352—0014 新座市栄四—五—二五
TEL・FAX 〇四八—四七七—五六四〇

本誌にご協力有難うございました ❖

高見嘉都司
〒173—0025 東京都板橋区熊野町四〇番十一号
電話 〇三—三九五六—〇六〇〇

高見秀史
いい眠りと健康の為のNPO法人
http://www.sas-j.org/

谷口浩章
「柏陵同窓会東京支部」で検索いただくと
東京支部ホームページがご覧いただけます。

株式会社シードコーポレーション
代表取締役 千種倫幸
〒104—0061 東京都中央区銀座一丁目二一—九
電話 〇三—三五六七—九七〇〇

日本画家
常岡幹彦
〒357—0205 飯能市白子一七三—七
電話 〇四二—九七八—一〇九八

鶴田宏

❖ 本誌にご協力有難うございました

日本舞踊　西崎祥
端唄　根岸妙
〒224—0027　横浜市都筑区大棚町五〇〇—八
電話　〇四五—五九一—六六五五

西山裕三
〒669—4302　兵庫県丹波市市島町中竹田一一七一

原谷洋美

青葉山八王子　真照寺　青葉霊苑（都立八王子霊園隣り　第二期墓地分譲案内中）
住職　堀井隆川
〒193—0821　東京都八王子市川町四九三—二
電話　〇四二—六五二—二〇一一
FAX　〇四二—六五二—二〇三三

山口和久
恵理子・賢一・寧々・藤吉郎秀吉・由佳・愛々・茶々・凪人・愛莉・思温
〒196—0031　東京都昭島市福島町二—一〇—二七
電話　〇四二—八四八—四〇五五
http://plaza.rakuten.co.jp/yamaguchi 0330/

渡邊隆男

編集後記

★久し振りに従姉妹と出会った。叔母の短歌冊子を編む相談である。西脇の長期療養病院に月1回お見舞いに帰るとき、A4に引き延ばした家族写真を持っていくのだけれど、自分の夫だけはいつも忘れず慕わしげに「お父ちゃん」というのよ、と亡母の妹である習字の上手だった叔母のことを聞かせてくれた。切ないけれど佳い話である。さて、自分はと考えると語尾が尖っているな、きっと。

文芸欄への寄稿、ありがとうございました。丹波人の底力と文化の高さ広さを改めて確信いたしました。充実の誌面になりますように、たくさんの皆様からの投稿をお待ちいたします。（原谷）

★「ふるさとトピックス」を担当。丹波竜と医療とUターンという従来のトピックスにまじって、新しい視点は大型商業施設や量販店の丹波進出かな、と思う。日本がグローバル企業の攻勢を受けているのと同様、丹波の商業も中央の進出にさらされている。こういう状況では、ただ規制や排除という対抗策ではいつまでも続かない。「丹波ならでは」の特長を生かした商業で対抗しなければならない。そのためには、「丹波の特徴、丹波の強みと弱点」と棚卸しなければならないのでは、と東京から見ていて思う。（上）

★被爆国としてその苦渋を充分過ぎる程味わった日本から放射能が漏れ出しました。地震国の日本では回避すべき原発ではなかったかと悔やまれてなりません。人々の叡知を結集し安全な生活が営まれる日々を願うのみです。被災された方々の哀しみや苦しみは鎮まることはないでしょうが、その想いを忘れることなく、今やれることを精一杯やっていきたいと思います。投稿して下さった方々、読んで下さる方々に感謝申し上げます。来年もどうぞよろしく！（岡田）

★3・11の際の液状化被害で多くの郷友から乾電池等をお送り頂き感激しましたが、一番有難かったのは、親を看取った後、不要になったという大人用オムツでした。下水道使用禁止の35日間、これで簡易便所の尿を吸水してゴミ袋へ入れたのです。（徳田）

★「東日本大震災」特集をはじめ、さまざまなテーマでのご寄稿有難うございました。お元気でお過ごし下さい。（池）

山ざる　第42号

平成二十三年十一月一日発行

〈編集委員〉
足立静雄　池田　忍　井徳正吾
上　高子　上田正文　岡　吉明
岡田昌子　木呂子恵美子　坂上勝朗
常岡幹彦　鶴田ゆき子　徳田八郎衛
原谷洋美　藤原ひさ子　本城英明

発行者　関東氷上郷友会会長　坂上　勝朗
〒351-0014　埼玉県朝霞市膝折町4-4-30
関東氷上郷友会事務局（岡　吉明）
☎〇四八（四六〇）一六〇一
振替〇〇一一〇―三―一二三一三〇
製　作　株式会社二玄社
編集協力　株式会社ホンゴー出版

新社屋 落成

平成23年10月吉日　埼玉県桶川市に新社屋が完成
敷地面積 4,000坪　　建物面積 2,000坪

最新鋭設備を備えた物流センターが、いよいよ稼働
明日への発展を祈願して10月10日に営業開始

三協運輸株式会社新社屋　完成予想図

住所　埼玉県桶川市坂田字向 990-1

〔主要取引先〕順不同
三井化学㈱　大日本印刷㈱　ダイキン工業㈱　アサヒビール㈱　三菱商事㈱
キリンビール㈱　沖電気工業㈱　味の素㈱　ハウス食品㈱　帝人㈱

三協運輸 株式会社

代表取締役社長　岸本勲(氷上町出身)

本　社	東京都足立区保木間 1-1-3	TEL. 03 (3860) 8112
大阪支店	大阪府大東市新田中町 3-3	TEL. 072 (806) 2821
埼玉支店	埼玉県桶川市加納字峯 379-1	TEL. 048 (728) 9380

物流倉庫所在地　東京・埼玉・神奈川・名古屋・大阪

ほっとする空海の言葉

「お大師様」の言葉を親しみやすく紹介。

文：安元　剛
書：谷内弘照

空海の人間像と真言密教の教えを再現。密教学者と神護寺住職の書による理想の合作。

B6判変型・160頁
●1260円

悩み抜く一人ひとりに深く響く。

ほっとする親鸞聖人のことば

川村妙慶 文／高橋白鵬 書
●1050円

捨てて生きることこそ幸福への道。

ほっとする仏教の言葉
［捨てて生きる］

ひろさちや 文／村上翠亭 書
●1050円

日頃の疲れた心を癒す。

ほっとする禅語70

渡會正純 監修／石飛博光 書
●1050円

話題の著者、エッセイ画集。

ほっとする老子のことば
［いのちを養うタオの智慧］

加島祥造 画・文
●1050円

楽に生きるための知恵を説く。

続ほっとする禅語70

野田大燈 監修／杉谷みどり 文
石飛博光 書
●1050円

良寛さんの、心にふれる…。

ほっとする良寛さんの般若心経

加藤僖一 著
●1260円

人生の知恵を優しい言葉で。

ほっとする論語70

杉谷みどり 文／石飛博光 書
●1260円

もっともやさしい仏の教え。

ほっとする般若心経

野田大燈 文／高木大宇 書画
●1260円

二玄社　会長 渡邊隆男
〒113-0021 東京都文京区本駒込 6-2-1 Tel.03-5395-0511 Fax.03-5395-0515 http://nigensha.co.jp